

招神カマカ・神懸り等の目的からくるのであつて、彼等シャーマンの巫人に云はせると巫人は神に接觸して、神懸りとなつて神の行爲動作を行ひ、又一方に悪神、悪靈を退散せしめる所の偉力をもつてゐると信ずるから、遂にかくの如くなるのである。

將來シャーマンになるものは最早若い時から見別けが付く。格段と違つた性格の現はれが見える。そして彼等は眼に見えない空間から神の指導を受け、常に彼の眼は光明に輝やくことになる。これは何故であるかと云ふとシャーマンは暗黒のうちに神々を認めることが出来るのである、そして、この間に於いて彼等の行爲動作と云ふものが極端に事實を現はすのである、又、親しく神から感覺を有するやうなことになる。かう云ふ風に彼等巫人は招神・神懸りをなすのであるが、これには簡單なる舉動・祭式が行はれる。これには更に太鼓をうち、歌をうたひ、神をいさめる動作が行はれるのである。神からおどされたり、又、夢のうちに死ぬやうなことを夢見るやうな場合には、その人

は死ぬと考へてゐる。これらは皆神々の仕業であるが、殊にシャーマンはこれに最も注意しなければならぬ。彼のケレットと最も不調和であつたら、シャーマンは直ちに死するのである。シャーマン巫人は一寸見ると強いやうに見えるけれども、或場合には大變弱くなつて死するやうな場合が大變に多い。若いシャーマンが、シャーマンの行がやゝ明かになつて來るときには、招神をすることが出来るやうになり、その時はシャーマンの神は巫人に見えるやうになる。その長い間には彼等は彼の悪神・悪靈に反抗して、又敵對しなければならぬ、非常に苦しいものである。故に多くの人はシャーマンになることを好まないものが多い。これを永い間してゐてよく招神をなし、よく悪神を退散することが出来るやうになれば、よくシャーマンの仕事が出来ることになるのである。

シャーマンのシャーマン行に於いて神から受けるインスピレーションは男よりも女の方が早く成就せられる。男はシャーマンとなつて練習をする間

に於いて、その神來を求めるとは永い間從事せねばならない。これはその招神の練習をする間に恥しがつたり、又は恐ろしい念が起つたり、すると遂に半信半疑の念を導いて行く。こゝに於いてか、彼は折角シャーマンの練習中であつても、そのシャーマンになることを捨てるやうになる。一體シャーマンの巫人として立派なものになるには意志が堅固でなければならぬ。けれどもシャーマンの巫人になるには半ばは自分の意志に反対して自分の身體に神・靈魂の感化をうけるのである。この感化を受けるまでには非常に苦しい變化を呈してくる。この神靈の感得は或ものは短かい時期でそれが得られることもあり、又、或ものでは數年の後で漸くそれを得られることもある。兎にも角にも、かく神靈の感應を得た以上には最早普通の生活上の凡ての興味を失ひ、シャーマン行の目的とする靈的の方面にのみ向つて進んで行くのである。そして一度、シャーマンの感應を得た者は普通の働きもせず、一般の民衆の食物をたべる時に於けるその食物に對して興味を有せず、少量を食す

る、又、人と話もせず、又疑問に向つても答へなごもしない。彼等は自分の祭式・祈禱の他は唯、靜かに眠つてゐるだけである。彼等の或ものは家の内室にとゞまり、稀に外出するにすぎない。けれども或ものは狩獵をいのり、家畜の見張番を勤めるが故に荒野に徘徊してゐるものすらあつて、シャーマンの教養と云ふものは非常にむづかしい。その實際の、祭式にあつてこれを實行するまでには幾度も幾度も練習を積まなければならぬ。そして神懸り、招神が實際、彼等に感應をあたへるやうになつた時には、自分のシャーマンとして神來のあるやうにつとめねばならない。もしも彼等がその熱度を加へる時には彼の苦痛は鋭敏となり、血を流すやうなことがある。この時は殆ど癲癩に於けるが如くなり、又、狂人のやうな態度になる。

シャーマンの動作は非常なる生理的作用があらはれる。又、これを要するのである。大概、歳四十位になるとその業はほゞ定まつて来る。シャーマンの動作には是非とも太鼓が必要であつて、この太鼓を打ちつゝ、その動作をあ

らはすのである。チュクチのシャーマンのテイビカルなものは神経病式である。かゝる心理的狀態は色々の種類に分類することが出来る。要するに彼等の巫人となつてゐるものの性格は非常に熱烈なる激昂・興奮刺激等をもつものである。けれどもチュクチの研究家のボゴラス氏に従へばチュクチの巫人はかくの如く喧噪激昂などするいららしい神経病的の舉動をなすけれども、チュクチの民衆の尊敬してゐるところはいつもシャーマン巫人が美貌であつて身體の釣合もよく、其態度も靜かなるものがたうとばれてゐるものであると云つてゐる。巫人は一般に非常に大なる生理的力と敏捷とが必要であつて、その要件がシャーマンの種々の手段に必要である。又、これに卓越せねばならないのである。シャーマンについてはボゴラス氏が見たことを記述したものである。或ものが若い時分に重い梅毒に罹つた。そこでこれを癒さうとして神に祈り、二年の後に彼はシャーマンの仲間投じた。そして巫人にならうとして練習を積んで、やゝ熟練に達した。そこで病氣は

これがため癒つて仕舞つた。その後彼は數年ツングラ人と接觸をつゞけ、眞の大シャーマン巫人になつた。然るに彼の運命は突然悪い方に向つて仕舞つて、そして病氣が又もとの通りになりかけて來た。これと共に彼がこれまで得てゐたところのシャーマンの實行と云ふものが出來なくなつてきた。そこで自分はシャーマンの巫人をやめねばならないことになつてきた。これに就いてはいろいろ自分の飼つてゐるころの犬・家畜などにも悪い結果がきた。たとへば彼の飼つてゐる家畜は蹄の病氣にかゝつてたふれるものが多くなつてきた。そこで彼はシャーマン神の偉力を失ひ、遂に精神が一變して彼がこれ迄に學んだうちの悪神の偉力を應用することゝなりはじめた。しかるに病氣は一層重くなつてきた。こゝに於いて彼は悟るところがあつて再び悔悟してこの有様で進んだならば自分の健康と安寧とに非常に害があることを考へて再びこれらの行爲をやめて仕舞つた。この話と云ふものはチュクチのシャーマン神・シャーマン行、乃至はそれに奉仕する巫人、さては

一般民衆との關係をよく物語つてゐるものである。

シャーマンの行の實行と云ふものはそれに加はるものは正しい行爲をしなければならぬ。これらは矢張り一般の民衆からも尊敬されることにならなければならない。これらは注意しなければならない。それから民衆がシャーマン行に對する信仰・信頼は、昔からの傳説背景を持つてゐるものである。であるから彼等は無神論者などに決して動かされるやうなことはない。これがために民衆はシャーマン巫人を信頼することは非常に多い、そして祈禱その他の時にシャーマンから祈禱してもらつた時には、禮物として肉皮紐衣・服・馴鹿・外國の食物などを贈物とする。

シャーマンの實行する一般の目的は祈禱・助力を祈つたり、或時は敵意を有する神靈に誘拐せられた病人の靈魂をもとの如く正しくさしたり、或は未來の事を豫言したり、病氣などを癒したりするのである。これから次に模範的のシャーマンの實行についてその記述を試みて見たい。

彼等チュクチが各々夕食がをばり、釜や盆を外の天幕にかたづけられたのちに、凡ての人々は各々夜間扉を閉めるときの内室に這入つて神降カマげの祭式が行はれる。馴鹿使用チュクチの方ではこの夜間神降カマげをする祭式をする内室は最も小さく狭く、しいやうになつてゐる、こゝに這入つて祭式を行ふものは頗る不自由である、そしてしかも不愉快に感ぜられる。然るにこれが海岸居住チュクチの方になるとこれと反對にその室は最も大きい、そこで自由に楽しく神靈を下すことが出来るやうになつてゐて、シャーマンをまねいて祈禱を行つたり、祭式をするやうな場合には、先後ろ側の傍の主人が常に座る場所カマで座することになつてゐる。或時は他のものが座ることを禁ずる場所にある。それから上の方には太鼓があるが、その太鼓の上の方が堅くしめられてゐる、若し太鼓の皮が皺などがよつてゐる場合には小便を以てこれを濡らすやうにし、そしてランプの火で上に太鼓を吊して置いて乾かす。この太鼓

がシャーマンに於いては最も大切なものである。シャーマン巫人は常に祈り、又祭式の時にその運動動作を自由ならしむるために、毛の褌衣を脱ぎ、腰のあたりまで裸になる。又靴を脱ぎ、足の自由を得るやうにする。シャーマンの祭式の時は最も精神が昂奮して、身體の動作が非常な活動を現はすのであるから、衣服を脱ぎ、靴をぬぐのは尤もなことである。要するにシャーマンは跳神亂舞の君である。けれども話を聞いて見ると昔はシャーマンは刺激とか、亂舞などは行はれず、實に静かであつた。けれども彼等は、他の草の混ざらない刺激の最も強い煙草を大きな煙管パイプに一杯についで盛んに喫んでこの煙草の強い麻酔剤によつてシャーマンの祭式をしたものである。かう云ふ風習は元は、なかつたので、古くツングースのシャーマンの方の風習がうつて來たものと思はれる。

つひにシャーマン巫人は劇しい動作をすることがはじまつてきた。ことに彼は太鼓をはげしく打ち、神が、りの誘導の調子で歌をうたふのである。

最初に低い調子で歌ひ、これが段々はげしい聲、高い調子にうつり、さては最後にやかましいいそがしい舉動となり、その響、その騒ぎ、その音は小さい室内に充滿し、ために狭い壁の各部分はその響やその騒ぎで震ふのである。この舉動は丁度日本の「神代紀」にある鈿女命が天岩屋戸の前で舞ひ踊つた時の舉動とよく似てゐるのである。

なほシャーマンは彼の音聲を調和するため前にも云つた如く太鼓を使用するのである。シャーマンが最初、聲を出し、太鼓を打つて祭式をはじめ出し、これがたけなはとになると、こゝに來集してゐるものは自然にこれに調和するやうになる。そしてこの歌と太鼓とは隔から隔までに響き渡つて神靈の招來を希望する。シャーマンの歌は言葉をもつてゐないで、その音楽は最も簡單である。短い各節を幾度も幾度も繰返すに過ぎない。これを永い時間繰返し、繰返し歌つたのち、巫人はこの舉動を休止し、かくてのちはヒステリーの歎息の聲を永くひきのばす。その聲はアー・ヤー・カー・ヤー・カー・ヤー・カと云ふ

やうな聲を引くのである。そしてまた再び歌をうたひはじめ。彼はその間永く肺の間に空気を貯へることが出来る。そして呼吸を自由にする事が出来るのである。彼等のうたふ歌その歌の調子は幾種類もあるけれどもかくシャーマン巫人は彼等民衆のよく知つてゐる歌をもつてゐる。この歌をシャーマンが歌へば一般の民衆はこれはどう云ふ歌であるかを知つてゐる。又一般の民衆は誰のシャーマンはどう云ふ歌をうたふ彼のシャーマンはかくかくの歌をうたふと云ふやうなことを知つてゐる。

そもそもシャーマンの歌は別に昔から定まつた規則はない。シャーマンはその意志によつて常にこれを變化し、歌つてゐる。そして又、その歌つてゐる時には最初に歌つた歌がのちになつて出てくることがあつてそれは勝手である。これは要するに神懸りの手だてであつて、この歌の誘導によつてケレットはこゝに招來するのである。

どのシャーマンでも歌は上手にうたふ。彼等が祭式の時に歌つてゐる間

にその傍らにある人々に間投詞的のこれに應ずることが出来る歌をうたつて貰ふことが例となつてゐる。かう云ふことは自分だけが歌つただけでは神懸りが出来ない。傍らの人々から間投詞のやうな歌をうたつて貰ふと神懸りがよく出来ると信じてゐる。けれども若しも傍らの人々がこの歌の或ものをたすけてくれる者がなかつたならば、この神かゞりは出来ないものだと考へてゐる。

それからシャーマンの神かゞりの祭式と云ふものは中々むづかしい。そこで新たにシャーマンとなつたものはその方法を常に稽古してゐる。又、家の人からもつねに鼓舞されてゐる。そして兄と妹とが、一はシャーマンとなり、一は來會者となり、呼應しつゝ、常に誘導し合つてゐる。又一般の民衆もシャーマンからこれらのことをすゝめられて歌に和するやうな遣り方を互に稽古するのである。

一體このチュクチのシャーマンはウラルアルタイ民族の間に行はれるが

如き職業的プロフェシヨナルのシャーマンではなくて、全く家族的ファミリーシャーマンである。そしてそのうちでも極く原始的の位置に立つてゐる。これはチュクチ・コリヤーク・ユカギールと皆同じである。アジアエスキモーのうちには家庭で妻とその他の人々はコーラスの種類の聯絡を組織してゐる。それはシャーマンと共に祭式として調子をどつてかけ合ひに歌ふのである。それから下部コリマ地方の露化せられたユカギールのうちに、その夫がシャーマンとなつた場合にはその妻はその助手となつてこれを補助してゐる。その時には彼の妻は歌に和すことゝ、他の人々をはげますことゝに努める。これはチュクチに餘程似たところがある。祭式がたけなはとなつて歌太鼓などが最早熱してくるときは、こゝに於いてケレット神はシャーマン巫人の身體にはいり込むのである。そのケレット神がシャーマン巫人の身體にはいりこむのはどうして解るかと云ふと、その時は太鼓のうち方が最も劇しく、迅速に鳴らされた時に於いてその變化が認められるのである。けれどもその場合に最も注意

すべきはその太鼓をうつてゐるその響のうち新しい音響が出た時で、そのときにケレット神が招來した時と信するのである。それはかのシャーマンは不自然に彼の頭を振り、ガタガタふるふる聲を發し、彼はヒステリーの状態をなし、一種かはつた聲で、オート・トート・トート・トート、或はイー・ビー・ビー・ビーと語り出だす。これはすべてケレット神の聲をあらはすものであると考へてゐる。その時、彼は唯ケレットの聲を出だすのみならず、なほその神に隨つてゐる種々の獸類・鳥類等の叫び聲を發することがある。又、その時若しも又シャーマンがケレット神の神懸りをしてこの神が音聲を發することが出来ない場合にはケレット神は彼の身體によつて歌ひはじめ、太鼓を打つ。その時はその巫人の聲は一層荒々しく不自然に聞える。この時は正しく神が懸つてゐるときである。チュクチのシャーマン神に仕へるその巫人の状態はほゞ以上の有様である。これまさしく東北方アジアに行はれるところのシャーマンとしてのも最も古い型式をもつてゐるものである。さてこのシャーマンと云ふ

ものはこれは一名メジシマン (Medicine-man) のことである。このメジシマンは世界の未開なるところでは多く行はれてゐるところのものである。けれどもシベリアのこれらと、その他のこれらとは相違してゐるところはどこであるかと云ふに、彼のアメリカ或は太平洋諸島・オーストラリア等に行はれてゐるメジシマンは單に簡單なるマヂックを行ふところのマジシアンに過ぎない。然るに東北方アジアに行はれるこれらは、それらのものよりも一層複雑になつてゐて非常に固有的のところがある。これ即ちシャーマンである。シャーマンはメジシマンの一であるけれども又、これより獨立してゐるものである。しかもかくの如きシャーマンは他の地方のメジシマンより複雑となつてゐて、これは東北方民族の文化の特有のものゝ一として見るべきものである。チュクチの間に行はれるシャーマンは全く家族的シャーマンであつて未だ職業的プロフェシヨナルのシャーマンには發達してゐないものである。

(I) チュクチの貿易

その(1)

ロシア人のチュクチの土地に到着しない以前の彼等の貿易は、どう云ふ風であつたかと云ふと、この貿易は非常に大々的のものであつて、彼の馴鹿使用チュクチ群は、皮類を海岸居住チュクチやアジアの方面にゐるエスキモーと交易し、更に又、この品物をベーリング海峡を超へてアメリカの方へまで送つたものである。こう云ふ様な風に、彼等の毛皮及び毛皮で造つた色々なものは海岸地方からアメリカ大陸のエスキモーの方へ盛んに行つたものである。そして陸地の方に水草を追ふてゐる馴鹿使用の民衆は海岸地方のものから、どう云ふものが、這入つてくるかと云ふと、鯨の油・海豹の皮・皮紐などが這入つ

たのである。こう云ふやうなものを陸地遊牧の民衆は馴鹿の皮、殊に馴鹿の皮で縫はれた衣服類などと交易したのである。海岸地方と陸地との貿易は今もなほ盛んにやつてゐる。

アメリカの方では馴鹿がゐないから、皆アジアの方からこれらの毛皮をどうしても送らねばならない。即ち亞細亞居住エスキモーやチュクチの手を経て送られる。この海岸地方の民衆がアメリカの方へ渡り、又、その沿岸地方へ船に乗つて貿易を毎年こゝろみるのは、Trading Expedition とも稱すべきものであつて仲々勇ましいものである。この貿易船は彼等としては高價なもので、必要な物品を積み込んでゐるから、時々、海賊に出會することがある。これらの貿易に用ふる所の舟は即ち皮で造られた船である。この貿易は古代に溯るほど盛んであつたと云はなければならぬ。然るにロシア人が來り、又アメリカ人が關係するやうに成つてから、この Trading Expedition と云ふものは、餘程、小規模になつて仕舞つた。

かくの如く勇壯に、活潑に、彼等が海岸地方からベーリング海峡を渡つて、彼方のアメリカ大陸のエスキモーの方へ貿易に行つたから、自然と古代説話の上の如く、これらの性格を暗示した面白い話が残つてゐて、即ち彼の *Eden* の説話がこれであつて、これは丁度、日本の桃太郎のやうな話であり、又百合若大臣の如き話であつて、遠征を物語つてゐるのである。その梗概は

彼の主人公たるエレンデキはアメリカのエスキモーの處に到着した。そして、彼等に向つて貢物を請求した。その貢物はどう云ふものかと云ふと、このうちには、洒されて黒く染めた皮紐の輪、粗末な海獣の皮などがある。これらを請求したのであるけれども彼等エスキモーは、この多くの請求品に對して、一品だも需めに應ずることが出来なかつた。そこでだがひに爭論が起つて、戦となつた。けれども英雄エレンデキは遂にエスキモーを征服し、彼のもどめた凡てのものを手に入れることになつた。そして、其民衆を捕虜とし、奴隸として、チュクチの國にかへつた。

かふ云ふ話が傳はつてゐる。これは即ちチュクチが如何に勇猛であつて屢々アメリカ大陸のエスキモーと戦ひ、或時は彼等に勝利を得てゐたと云ふことを暗示するやうである。これは亦彼の九州から壹岐・對馬に廣く行はれてゐる百合若大臣の話と餘程よく似てゐる話である。これらは沿岸の島嶼の間に於ける往來の結果として行はれるに至つた説話と思はれるのである。俗ともかく以上から見ても彼等チュクチが如何に大膽なる貿易遠征を試みたかと云ふことがよく解る。さてこう云ふ風の探險を試みた主なる地方は、どこであつたかと云ふと、それはイーストケープのノーカリットエスキモー (No'okait Eskimo) であつて、近頃には、今から三代以前に一大部隊のものは、イーストケープからアメリカの方へ向つて出發した。この時は、此處の部落民は大きなボートを用ひて、あちらこちらに行つたが、或時はボートは三十個の權でこがれて行つたことがあつた。當時に於てエスキモーは以上の如くであつたが、更に北氷洋の方に住まつてゐるチュクチは皮舟でもつて行つ

た。即ち亞細亞居住エスキモーと聯合で遠征したのである。その目的は一方は貿易の爲めであつた、けれども又一方は、海賊としてアメリカの方へ渡つたのである。そしてこの探險隊は昔から見ると非常に規模が小さい。けれども、彼等の一行はインディアンポイントからセントローレンス島を經過してあちらの方へ行つたのである。このインディアンポイントからセントローレンス島を經過して行くのは、一番ベーリング海峡を渡るに最も近い場所であるから、この海峡が一番に行き易いのである。これやがてアメリカとアジアトに於いて、ベーリング海峡に於ける貿易路、交通路を暗示してゐるものである。

貿易は昔からアジアの方面に於いては、互ひに懷疑の念ををこしてゐて、親密な度が少なくて、しばしは争ひがをこつた。故にたがひに警戒して、武裝式貿易をしてゐたのである。古い話によつて、ベーリング側のアジアの方面の No'okan 及び Uvelen では、海岸の平坦な所に市場が設けられてゐた。こう云

ふ風の市場の設けられると云ふのは、集る日を定めて、その附近のものが物々交換をしたものである。かゝる風習はロシア人も後には、ロシアの市場の形式を帯びたものに變化して採用してゐる。これは今もなほアナディールに於いて、ロシア人が市場を保存してゐるが如きが是である。市の日には物々交換をしに来る幾多の民衆達は各々武装してゐる。例へば槍などを携へ来て警戒してゐる。これは何かと云ふと物々交換について始終、争闘が起るからである。こゝに集まつて来るものは、槍を携へるが、又、一方の手には皮の包を持つて、一方の手には刀子を携へ身構えをしてゐるのである。

その(II)

こゝに記したいのは貿易の際に無言貿易 (Mute-trade) が行はれることである。この風習はアメリカの北からアジアの東北方に行はれる古い風習である。つまり品物を一方のものが、或海岸に置いて退いてゐる、さうするとその

陸上の方から土人が出てきて、これに必要なものを持つてくる。そして自分達の必要なものを持つて歸へるのである。これは互ひに正直でなければ行はれないのである。彼のアイヌのコロボツクルの話も無言貿易の話の一面を傳へてゐると云つてもよい、又日本の田舎などで、昔草鞋などを吊してゐて、側に竹筒の錢入れが掛かゝつてゐる、自分が必要な草鞋等をとる時は竹筒に錢を入れる、これも一種の無言貿易と云はれないことはない。彼の椀貸傳説の如きもさうであると云へる。そして此貿易は一人不都合なことがあると、もう行はれなくなる、彼の椀貸傳説に於いて借つた椀を返さないことがあつてから、椀を貸すことがなくなつたと云ふのは、無言貿易の風習が打破られたことを物語る所の傳説であらう。儲かう云ふ風な無言貿易がベーリングの海岸に行はれてゐたのである。この貿易をなささんがため、冒險的な探險隊が組織せられた。チュクチの方で、一千四百四十六年(後光明天皇の正保三年。慶安の前である)に北氷洋の海岸に沿ふた所のコリーマ西部の河口から舟出

して海岸居住チュクチと貿易を試みたのである。そして此一隊は更に非常に遠い所まで行つたが、その時は象牙の彫刻品なども得たと云ふ話である。

チュクチはその説話によると、アメリカ大陸との貿易のことをつたへてゐる。その話はいかう云ふものである。即ち海の彼方に大きな森林地帯がある。そこにチュクチの或ものが行つた。その森林のなかには我々人間とは違つた、眼に見えないものが住まつてゐる。こは何物であるか解らない。彼等が貿易に来る時、その手にもつてきた所の狐皮や海狸の皮のみが唯、ぶらぶら見えて、誰も人のゐないのに唯ぶらぶら森林のなかにこれが見える。そしてその毛皮が自然に動いてゐるのが見える。その時に誰がかう云ふことをやつてゐるか解らぬが、唯、皮類が動いてゐるので、我々は森林の入口のところに行つて貿易をはじめるのである。この品物がぶらぶら動いてゐるのは、我々と貿易をしたいと云ふ事を意味してゐるのである。そして動いてゐる品物の側で人の聲がして、渡した所の品物と交易して下さいと云ふ聲が聞える。そ

こで我等の貿易者は、煙草の一把を遠くから投げ出す、さうすると森林のなかに聲がして、煙草！煙草！と云ふ聲がこだまして森林中から入口へと聞えてくる。けれども形は少しも見えない。そして、煙草は遠く森林のうちに持ち去られる。又、他の貿易品を投げ與へると直ちに森林のうちに這入つてしまつて失くなつた。そして、その後から直ちに、狐の皮、海狸の皮で充滿してゐる皮袋が自然に森林のなかへら投出される。これらは言葉を交はさずして無言のうちに交易する無言貿易の話が傳はつたものである。

その(三)

チュクチとコリヤークとの間の貿易の話と云ふものは、ロシア人の到着せない前から盛んに行はれてゐた。このチュクチとコリヤークとの貿易をする有名な場所はどこであるかと云ふと、パラボルスキードル(Parapolsky Dol)の南アナバツク河畔に古代の市場があつたが、その市場には馴鹿使用コリヤーク

ど、馴鹿使用チュクチ及び海岸居住チュクチやカムチャダール等が遠く集つて来たのである。話によると、この貿易所には、日本の製造品も僅か乍ら遠く来たらしい。たとへば、チュクチが今日、鎧を造る事を知つてゐる、鎧は多少日本と關係するらしい様に思へる。鐵の小さな札さしを皮紐で綴つた所謂札鎧さしよろいが近頃まで馴鹿使用チュクチのうちに行はれてゐた。これは日本の原史時代の古墳の中から出るので同じものである。一度ロシアの政府の下に屬してから、この鎧兜の製造はしないけれども昔は盛んに製造したのである。今でも各戸に昔の古い鎧兜を尊敬して保存してゐる。鎧には札鎧のみならず、札を綴つた兜かぶと、脛當等も使用してゐるやうである。これらは日本の鎧兜に似てゐる。然らばこれ等の鎧兜は、どうして彼等は造つたであらう。彼等のうちには鍛冶屋があつて、ことに、鎧兜を造る鍛冶屋が存在してゐる。けれども、これは充分に發達してはゐなかつたけれども近頃までも、ポイチン(Poitin)コリヤーク村落は鍛冶屋がゐる、鎧兜を製造する場所であると云ひつたへられて



所るす着を兜鎧のチクユチ
(る據に氏スラコゴ)

ゐる。このホイチン村はロシア人の所謂パレン(Pallen)であつて、こゝは永い間蹄鐵工場として保たれてきた。舊此鎧兜は果して彼等チュクチの固有のものであらうか。ロシア人の到着後から、この鎧兜が彼等に使用せられたか、又はそれ以前から存在してゐたか、これらは充分研究せねばならぬものである。

日本の鎧兜は不思議にも北方アナデキールのツンドラ地帯の馴鹿使用村落のある附近から出る。これらの鎧は馴鹿使用チュクチの家に、持ち傳へてゐるが、數代に亘つて所持してゐたと見え、鎧

びてゐる。これは日本人が渡來して遺したのであるか、どうかは疑問であるが、もと日本人が此の所に行つたのではなく、つまり日本から更に蝦夷アイヌ・千島アイヌと、段々手を経て、そこから貿易品として此地へ渡つたのである。そして、こゝで用ひられ、ツンヅラ地帯のうちに埋まり、これが再びツンヅラ地帯から掘り出され、馴鹿使用チュクチによつて持たれてゐるのである。日本の品物がカムチャツカのチュクチやコリヤークの市場に來ると云ふ事は、昔からあつたことである。この品物は今も云つた如く、千島アイヌの手によつて貿易せられ、つひにこゝに持つて來られたのである。

この貿易に就いては貿易品として、これに、日本語蝦夷語の残つてゐるものがある。これに就いて、ステルレル及びクラセニンニコフ兩氏は日本人と云ふ事のカムチャダール語を知つてゐた。カムチャダール (Kamchadal) は日本人を何と云ふかと云ふと、ステルレル氏がカムチャダールに聞くと何れも *Shishmen* と答へた。クラセニンニコフ氏が亦又、等しくカムチャダールに聞

いて見るや、*Shishaman* と云つた。この *Shise* 又は *Shish* はカムチャダール語で「針」と云ふ意味であつて、鐵針が日本人の手から蝦夷アイヌの手を経て千島アイヌに這入つて來て、更にこれが又もや此處に這入つて來るから、「針」と云ふ言葉を日本人と云ふことに用ひてゐるのである。丁度、オランダ物フランス物・イギリス物と云ふこと、同じで、舶來品を傳味するのである。この *Shishmen* 又は *Shishaman* と云ふ言葉は、元來、蝦夷アイヌが日本人に對して云ふものであつて、決して針そのものを指すのではなく、また固より勿論カムチャダール語ではない、アイヌ語であるが、(蝦夷アイヌは *Shishan* 千島アイヌ・樺太アイヌも *Shishan* と云ふ) 蝦夷アイヌの權威者である金田一京助氏に聞くと、「近傍の人」と云ふ意味である。そして、「近傍の人」であるが故にこれは即ち日本人を意味する。さうするとシーサムと云ふ言葉はカムチャダールのうちに這入つて、遂にこゝでは、針そのものを意味することゝなつて仕舞つたのである。

カムチャダールの地方へ千島アイヌの手を経て、這入つたものは、どう云ふ

物かと云ふと、針そのもの、それから刀、小刀子、庖丁、鐵鍋、木綿服、又絹布の古びたものなどである。これらは蝦夷アイヌが松前の商人あたりと交易し、又、彼等は是等のものを持つて千島のラシヨア島あたりに行き、ラシヨアのアイヌから鷺の羽根などと交易して歸る。かくて千島アイヌはカムチャツカのカムチャダールにこれを傳へ、そして、カムチャダールはチュクチやコリヤークに及ぼす。かう云ふ風に、日本の品物はロシア人の來ない以前、固より支那の品物の這入つた形跡はない。又、アメリカ人の來ない前、チュクチやコリヤークのうちには、日本の品物が盛んに這入つたものである。而かも、これらの日本品は彼等のうちにあつて非常に貴重品となつて、高い文化の品物であつた。かく、人の手によつてこちらの品物があちらへ行く。このため、ベーリング海峡の文化が徳川時代頃に、同地方に強い影響を與へたのは、注意すべきことである。前に云つた日本の鎧の如き、かくの如き理由でここに送られたものである。

コサツクのエビセフ氏 (S. Yepsichoff) は千六百五十六年(明歴二年)に、オコーツクの海岸オホタ河口に到着した時の報告によると、此處の土人は骨又は鐵製の胸鎧を着し、兜を戴き、武裝して、手には弓と槍とを携へた種々の土人に出會した。と云ふことを書いてゐる。さうして見ると、この附近の土人が一般に鎧兜をよるふと云ふ事は、決してロシア人が教へたのでもなく、それ以前から存在してゐたと云ふことを知ることが出来る。一體、札鎧は、この邊の一帶に行はれてゐるのであつて、コリヤークは固より、なほ、この附近の土人に存在してゐるのである。なほ、ギリヤークの如きも、この種の鎧を持つてゐる。又アイヌも、これらの鎧を知つてゐた。ギリヤーク及びアイヌの鎧は皮で造られたものであつて、アイヌの鎧は寛政の時に世の中に公になつた「蝦夷島奇觀」のうち、これを書いてゐる所がある。同書にはアイヌが鎧を持つてゐることを書いて、次の如く云つてゐる。(圖は略す)

アヨツベは鎧の名なり。按るに奇ふき器を云訓なるべし。札は木と革

を合せて作る。兎は夷製の物を見す。本邦器を用ゆ。戦争の時は禮法もあるべし。軍をトミと云。挑乃訓略に此夷地にウベツ酋長シリソキシユ甲冑十餘領を藏す。其中に夷鎧一領あり。閱するに緋威と見ゆ。其制里様殆ど類比するなき美製、頃年函人春日靜甫、正應五年乃寫。今様打掛鎧の圖を見せつ。是延喜式兵庫寮の記に所載打掛鎧の圖なり。云云

それから今日コリヤークのうちには鐵の鎧は今、使はぬけれども、皮の鎧及び骨の鎧を用ひてゐる。これ皆札鎧に屬するものである。さうして見ると、これは彼のコサツクのエビセーフ氏が千六百五十六年にオホータ河口で出會した土人が骨又は鐵製の鎧を着てゐたと書いてゐるものもこれである。この鎧の形式は、日本に於いても既に存在してゐたので、彼の古墳から出る札鎧はこれに屬する。又、皮の鎧が存在してゐたことは、垣武天皇の時、蝦夷征伐の際に鎧が關西の地に需められず、そこで、信濃以東、駿河以東の諸國に命じて

革の鎧を造らしめ三年の後に造り畢へたことが見えてゐる。これを以て見ても皮鎧が關東地方で盛んに造られてゐた事がこれで解る。昔しに於いて、これは盛んに用ひられてゐたのであらう。この皮鎧から遂に鐵の札鎧さしよろひが出来たのである。『書紀通釋』によると、仁徳紀に鎧甲の紀事があるが、これを「カワラ」と訓み、この「カワラ」と云ふ言葉に就いて説があるが、同書の著者は「カワラ」は「コウラ」の意味で、元、革を綴つてゐたものが、後に鐵札になつたと云つてゐるのは最も當を得た説明と思はれる。これはチュクチ・コリヤーク・アイヌ・ギリヤークの實例によつても、考へられる。又、アイヌが、これを用ふるのは、日本の影響によつたものであるか、又は彼等が、これを古くから造つてゐたものとも見られるのである。

ミヅシツブマンマテキウシユキン (Midshipman Matushkin) の報告によると、コリーマ地方に住んでゐるオマキギン (Omakiin) は、ロシア人到着以前に於いて、既に鐵の使用を知つてゐたと云つてゐる。さうすると、このあたりに鐵を用ふ

ると云ふことは、既に此處では知られてゐた。けれどもチュクチ・コリヤークなどの方面はどうかと云ふに、これは久しく近頃まで、石器時代の状態であつた。その利器としては石器骨器を使用してゐたのであつて、現今でもその風が遺つてゐる。彼のノルデンスキョルド氏の探險隊の行つた時には同氏の記事によるとなほ、石器を使用してゐたことを書いてゐる、この石器はアレウト・エスキモー等一帯に行はれてゐるのである。又千島アイヌも近頃までこの境遇であつた。この時に當つて鐵器の恩澤を蒙るのは、日本から行く品物に限り、然らざればカムチャツカ半島に日本、其他から漂着した場合に、古釘を難破船から取るのが何より大切なことになつてゐた。又千島アイヌの口碑によれば、カムチャダールは、時々密かに海を渡つてシムシムの島に到着する、そして密かに千島アイヌの墓をあばいてそのなかから鐵の裝飾品、小刀子等を盗み歸つたと云ふ話を傳へてゐる。

その(四)

前にチュクチの方に無言貿易のあつたことを記してをいた。さてこう云ふ風の説話は他にも存在するかと云ふに、これは昔は古亞細亞族のうちに廣く行はれたものであつたらしい。そしてそれはなほ彼のアイヌのうちなどにも行はれてゐたらしい。彼の享保六年に出來た新井白石氏の「蝦夷志」にもかう云ふことが書いてあるのでも知れる。先づ同書に千島(東北諸夷)と云ふのは三十七島あるが、そのうちで通ずるは僅かに一島のみ、その餘は詳に知るを得ない。と記し、

夷中總稱曰ニクルミセニ夷人所レ通則キイタツブ嘗聞ニ其互市例ニ極奇也毎年夷人裝ニ載船貨ニ以行去岸里許而止島人候望乃去ニ其衆落ニ避ニ之山上ニ夷人運ニ據其貨ニ陳ニ列海口ニ去而止如レ初既而島人負ニ擔方物ニ絡繹來會各自易ニ取其所レ欲之物ニ閣ニ置其餘ニ及ニ厥産ニ而去夷人又至扱ニ載之ニ而還若其方物過多則或留ニ其餘ニ

或置船貨而去方物皆獸皮船貨則米鹽酒炯及糲之屬云

この記事は明に無言貿易を云つてゐるのである。これは千七百年代の記述である。こう云ふことは尙ほ、元文七年に出た『北海隨筆』にも見えてゐる。この無言貿易として尙、古い記事は『日本紀』の齋明天皇六年の條である。即ち次の文がそれである。

六年春三月、遣阿倍臣、率船師二百艘、伐肅慎國。阿倍臣以陸奥蝦夷、令乘己船、到大河側、於是渡島蝦夷一千餘、屯聚海畔。向河而營、營中二人、進而急叫曰、肅慎船師多來、將殺我等之故、願欲濟河而仕官矣。阿部臣遣船、喚至兩箇蝦夷、問賊隱所、其船數、兩箇蝦夷便指隱所曰、船二十餘艘、即遣使喚、而不肯來、阿部臣乃積綵帛兵鐵等於海畔、而令貪嗜、肅慎乃陳船師、繫羽於木、舉而爲旗、齋棹近來。停於淺處、從一船裏出二老翁、廻行熟視所積綵帛等物、便換著單衫、各提布一端、乘船還去、俄而老翁更來、脫置換衫、並置提布、乘船而退、云云

以上の『日本紀』の文章も明に兩方とも無言貿易をしてゐることを傳へてゐると云ふことが解る。最初一方のものが品物を置き密かにこれを見てゐると、一方から人が出て必要な品なれば取つて、物を置いて歸るのである。明に無言貿易をやつてゐるのである。この記事は恐らくは東北方アジアの無言貿易の一番古いものゝやうに思へる。これに付いてなほ思ひあたるのは彼のアイヌに傳はるコロボツクルの話で故坪井博士の如きはこれを以て實際の歴史的事實を傳へてゐるものとしてゐられたが、これに反しアイヌ説の小金井博士などはこは取るに足らざるものであると二足三文にけなしてゐられるけれども、こは兩説以外に解釋すべきものであつて、私は此の話は寧ろ一種のフォークローアとして取扱つて極めて面白いものであると思ふ。そこで、先づその話の梗概を記して見やう、それは

昔し昔し我等アイヌが未だ北海道の地に渡らない頃に、こゝにアイヌと別な人間が住まつてゐた。彼等は體の小さな小人であつて丁度蔭の葉の

下に住まつてゐる位の人間であつた。又、物を食べる箸を二人が擔つて持つて行くと云ふ話を云つてゐる。彼等は穴を掘つて住まひ、この穴の上に蔭の葉などを覆つてゐた。そこで彼等と呼んで蔭の葉の下の人(Koo-poo-buru)と云つてゐる。又或所では彼等をトイセクル(土の家の人—Tote-chise-kuru)なども云つてゐる。彼等は一尙アイヌと接觸しなかつた。交易する時は暗がりになつてから、いつもアイヌの家の窓の外から物を出す。そこでこちらから適當なものを窓から出してこれと交易する。かくの如くして交易してゐた。しかるにアイヌの若者どもが集まつてこゝに交易に来るものはどんな者であるか、見てやらうと若者たちが待ち構へてゐた。ところが果して何者か窓から手を出し交易を求めた。そこで若者たちは寄り集つてこれを引張つて、どらへて見ると女であつて、體は非常に小さい。そして、口と手とに入墨をしてゐた。この女は非常に哀んで泣いてその部落へ歸つた。そして一同にこの事を話した。そこで一同のものは大

いに怒つて、その部落を他へ移して仕舞つた。今日遺つてゐる堅穴は彼等の住つてた跡である。又そこから出る土器石器は皆彼等がこゝに住んでゐた時に使つたものである。そして又、今日アイヌが入墨するのは皆彼等の風を模したものである。

とかう云ふことをアイヌはつたへてゐる。これは立派なフォルクロアである。けれども話のうちに夜な夜な物を交易したと云ふ事や、いつもその形を見せないと云ふのは明に無言貿易である。そして新井白石氏の「蝦夷志」に書いてゐるキータツブ(室蘭)のアイヌと千島アイヌとの交易の話ともよく似てゐる。又、これを齋明紀などの記事から考へると、アイヌも曾て無言貿易をしてゐたのは明である。これらは些細な話であるけれども東北方アジアに於て古い形式の商賣が行はれてゐたと云ふことを知ることが出来るのは最も愉快な事である。これに就いて思ひ出すのは日本の各地にある、梳貸傳説で

ある。これは或所では湖池に伴ひ、或所では横穴、或所では古墳に附着して話
が形成せられてゐる。即ち古墳や湖池などの主が膳椀を非常に貯へてゐた。
そこで村のうちで客などをする時、多数の膳椀が必要な際、湖池の沿岸、古墳の
前に来て、膳或は椀を何人前貸して貰いたいと云ふと、翌日、乞ふただけの膳椀
が備へられてゐる。用が済んだ後でこれを返す。然るに或る悪戯者がゐて、
これを返へさなかつた事があつた。湖池等の主はこれが爲め大いに怒つて、
それ以後は貸さないやうに成つた。これは日本各地に遺つてゐるフォルタ
ローアである。けれどもこれは、彼のアイヌや又、チュクチの間に傳はつてゐ
る無言貿易の亞流を物語るものではなからうか。そしてそれはアイヌの方
の風習が傳はつたものか、又、それとも吾人祖先が古く無言貿易をしてゐたの
が痕跡として遺つたのであるか、兎に角これは無言貿易の古い形式を現はし
てゐるものである。

第三章 コリヤーク族

(A) コリヤークの地理學的分布

コリヤーク (Koryak) の住居地方は今日の彼等の住居地と、ロシア人の渡來しない以前の住居地とは大いに變化してきてゐる。最初ロシア人が到着した際には、その一番端はしの方はタウイスクであつた(コサツクの報告による)。その時、そこには海岸コリヤーク人がオコーツク海及びギシガ灣の西海岸や、ギシガ河口とタウイスクとの間の海岸附近にあるロツキ島に居住してゐた。タウイスク地方の住民はヤクトスクから移住して來た所のヤクトが住んでゐる。こゝにはコリヤークは現在は既に居らない。そしてこれ等の移住ヤクトは純粹のものではなく、コサツクやツングースと雜種になつてゐるものである。ロシアの年代記によると、コリヤークはカムチャツカのチギル河口にまで達してをつたと書いてある。なほクラセニニコフ氏の時

にも、その所に彼等の村落があつたと云ふことを記述してゐる。彼のヂットマル氏(Dimmar)は千八百五十三年(嘉永六年、日本にペルリが浦賀に來た頃)コリヤークとカムチャダールとの境界線を調べた。その時に北緯五十七度であつた。即ちこれを地理學的に云ふと、オコーツク海の側は、ボヤムボルカで、ペーリング海峡の方面はオセルナ地方であつた。

クラセニンニコフ氏によると、コリヤークの部落はペトロバウロスク附近アバヂヤ地方のイマツカ河畔に住居してゐた。この群は、以前には馴鹿派であつたけれども、敵のためにその馴鹿は追はれて仕舞つた。けれども、彼等はカムチャダールと雜種にならず、言語や風俗習慣はなほ固有のそれを保つてゐた。然るに今日の彼等は、カムチャダールの様にロシア化せられ、もうカムチャダールに少しもちがはない様になつて仕舞つた。そして唯、自ら、自己が「コリヤーク」と云ふと其名前を記憶するに止まつてゐる。

今日馴鹿使用コリヤークは南は北緯五十五度にまで達する。スリニン氏

によると、彼等の僅少のものはホルシエレッツクに住まつてゐる。彼等は當時の争鬭の時からなほ一層、北方に分布してゐる。その口碑に従ふと、チュクチは常にコリヤークを攻撃してゐた。そして遂に不毛の土地、北方の方に分離されたし、今日チュクチもコリヤークもバルバルの平原に水草を追つてゐる状態となつた。

東北方のコリヤークは右に記述した彼等の群と異つてなほ獨立の状態にある。そのうちでも Kerck の如きはロシア人の影響を受くること最も少なく、非常に離れてゐるが故に、それがために、彼等の事情はよく解つてはゐない。西方のコリヤークは、その境界線は昔も今も、變つてはゐないで、スタノポイ山脈で境してゐる。(コリマ方面ではマイデ)けれどもこの住民は冬になると、栗鼠を狩るために僅な人間はスタノポイ山脈を横斷してコリマの地方に移り、夏になつて、元のところに歸つて來る。Korkodon-Yukaghir の口碑に従ふと、コリヤークは昔、スタノポイ山脈を横斷して彼等に反對する所の敵人を撃ちに

出掛けたことが度々あつたと云ふ話である。

今日、コリヤークの生活地方はギシガとベトロバウロスクの地方に分布してゐて、彼等の生活してゐる場所は河口谷間、それから馴鹿の食物に富む地方に好んで居住してゐる。

(B) コリヤークの體質

コリヤーク (Koryak) の體質はどうかと云ふに、ヨヘルソン氏 (W. Joehelson) に従ふと左の如くである。

身長は寧ろ短い方即ち低い方であつて、男子百七十三人での身長は平均一五九六ミ、メ、(最長一七〇〇ミ、メ、から最低一四九〇ミ、メ、までである)。

女子の身長は百十三人に就いて見ると、平均は一四九一ミ、メ、である。(最長は一六一〇ミ、メ、で最短は一三八〇ミ、メ、)。

カムチャツカの北に居るコリヤークは男子二十四人、女子十九人に就いて見た身長は男子は平均一六二〇ミ、メ、(最長一七一〇ミ、メ、最短一五三〇ミ、メ、)で女子は平均一五三〇ミ、メ、(最長一六〇〇ミ、メ、最短一四三〇ミ、メ、)である。

以上に據つて考へて見るとカムチャツカ北部に在る彼等は一般に云つて

他の地方の彼等と比較して身長は低い様であるけれども、これは其測定した人数が頗る小數である結果であらうが、又、カムチャダール (Kamchadal) と雜種に成つてゐる結果ではなからうかと思はれる。即ちカムチャダールの身長は男子六十三人の平均一六〇一ミ、メであつて(最長一七四〇ミ、メ、最短一四七〇ミ、メ)、女子の身長は六十五人に就いて見ると、平均一四九六ミ、メ(最長一六〇〇ミ、メ、最短一四〇〇ミ、メ)である。

コリヤークの身體は強壯であつて、骨格は逞しく肩は廣く、筋肉は能く發達してゐる。尙、一般から云へば海岸地方に居るもの、即ち海岸居住コリヤークは體格は恰好よく出来てゐるけれども、馴鹿使用コリヤークは不恰好に見えて身體の釣合ひが悪いのである。

頭形指示數 (Cephalic Index) は男子は八〇・三(八六一七五)女子は八〇(八六一七五)である。又、この位の指示數を有する者が最も多數であるかと云ふと、七八と八二との間にあるものが最も多い。しからは頭形は是等の事實から見て

蒙古—土耳其族 (Mongolian-Turkish tribes) よりも以下である事が解る。

次に顔面の廣さは Mongolian-Turkish tribes より狭く、男子は一四六・二ミ、メ(一六〇ミ、メ、一三三・二ミ、メ)而して女子は一三九五ミ、メ(一五一一一二六ミ、メ)である。ヤクト (Yakut) のそれを見ると、男子は一五〇ミ、メ、女子は一四二ミ、メである。顔は一般に卵形 (Oval) を呈し、顎は小さいけれども、下顎骨はよく發達し且、曲つてゐる。

次に頭髮に就いて記すると、男子の頭髮の色は黒色を呈してゐる。二百八十二人の中で二百二十人までは Black hair であつて(七八パーセント)七十八人は Brown hair である。(四二パーセント)そして八人が Light brown 即ち薄い褐色の頭髮の者で、(四三パーセント)唯一人が黄金色の所謂 Blond hair であつた。(〇五パーセント)

灰色を呈するもの即ち Gray hair は時として存在する事がある。更に十四人の老人に就いて見ると、四十五歳から七十歳までの者は Gray hair であるが

測定した彼等の中には禿頭のものは見なかつた。這は不思議である。しかし神話のうちには禿頭人の話があるのである。

次に頭髪の形態はどうかと云ふと、二百八十人の男子の頭髪は總て直毛 (Straight hair) である。そして百七十九人の女子の頭髪は唯だ三人波状毛 (Wavy hair) のものがあつたが他は悉く Straight である。

ボゴラス (Bogoras) 氏に據るにチュクチ (Chukchee) の頭髪は波状のものより更に鉤状毛 (Curly hair) のものもあり、コリヤークではアルトル地方 (Alutor) の彼等では鉤状毛のものがあるけれども太平洋海岸のものは Straight である。

眼の色は暗褐色を呈してゐるのが普通である。二百五十七人の男子に就いて見ると、百八十九人は Dark-brown eyes である (一・五バーセント) として六十二人は Light-brown であつた (二・四バーセント) 四人は黒色 (Black) であつた (二・五バーセント) 而して二人は灰色 (Gray) であつた (〇・七バーセント)。次に女子に就いては如何と云ふと、百六十六人の彼等のうちで、其百五十一人は Dark-brown で (九〇・九

パーセント) 十二人は Light-brown で淡褐色 (七・二バーセント) 而して三人は黒色であつた (一・八バーセント)。

コリヤークの眼形は著しい蒙古眼型ではない。そして狭小なのが特徴である。

コリヤークは現今は雜種となつてゐるものがある。尤もこの雜種となつたと云ふことは矢張り昔から血が少し宛混ざつて來てゐるのである。この雜種となつたものは、どんなものであるかと云ふと、チュクチ・カムチャダール・ツングース・ヤクート・チュパンヂ・ユカギールそれからロシア人である。チュクチの土地と接近してゐるラルバルの馴鹿使用ツングースのうちには、チュクチと雜種となつてゐるものあり、又、北方カムチャツカの海岸居住コリヤークのうちには、既に久しい前からカムチャダールと雜種になつてゐる。最も古い古代に於いては、タウイスク附近にては、コリヤークは既にツングースと雜種となつてゐた。第十八世紀の終り頃から、オコーツクの海岸にゐるロシ

ア化せられないコリヤークの中には既にヤクトと雑種となつてゐたものもあつた。これ等のコリヤークはチュパンヂやユカギールと屢々戦つて、この際にコリヤークの方に、チュパンヂ・ユカギールの婦女を捕へ來つて、これと雑種になつたことがあつた。

以上の如く考へて見れば今日のコリヤークは、ロシア人の來ない前から既にその附近の民族と雑種を形成してゐたと云ふことが考へられるのである。

(C) コリヤークの社會組織

コリヤークの群を形成する家族制度は確かにタブーによつて結束せられてゐるのである。このタブーによつて彼等は支配せられてゐる事は非常に珍らしい。例へば竈とか圍爐裡、それからシャーマンの愛用する太鼓・發火器等は最もタブーせられてゐるものである。是等は單に家のうちにある人々のみならず、外にある人々に向つてもタブーせられてゐるのである。斯う云ふ風であるから他の家族ファミリーは今云つた物に觸れる事を禁じられてゐる。此制度は非常に難かしいもので、これは日本に於いて古代に斯う云ふ風に物品などにタブーせられた事があつた、それは大化の勅文にも見えるので知る事が出来るが、今日我々はコリヤークの風習に、實際にかう云ふ事實があると云つて宜しい。

コリヤークは長老制度である。此制度は彼等の間に最も嚴密に行はれるところのものである。この結果として年長者を重ずる風がある。如何に偉い者であつても、年を取らない者では勢力がない。年長者は年の若い者よりも何時も優越なる地位に居るのである。これを見ると面白い事は一家族のうちには於いて、年長者は家の内に於いても其居る場所が他の者と違つてゐる。コリヤークの家の内即ち天幕の内でも最も大切な場所は柱である。此柱はコリヤークを始終護つてゐるものと考へられてゐるが、年長者は柱の傍に座す權利を有してゐて、他のものは此處に座する事を禁せられてゐる。年長者は常に多くの妻子供を持つてゐるが、若しも彼が死せば其場合には其妻子供達は名譽のために尊敬の意を以て其物品を彼等に與へる事になつてゐる。それから此年長者はシャーマンの力を持つてゐる。又他のシャーマンの補助者を得てゐる。此シャーマンの力を持つてゐると云ふ事は彼等の社會生活に於いて最も大なる尊敬を拂はれてゐるのである。

コリヤークの家族は其家族の長として父系尊拜が行はれてゐる。これは年長權を有してゐると云ふ組織の結果からこれが來てゐるのである。此家族の長が逝くなつた後にはその弟又は年長の子供と年長の娘とを結婚させた婚を以て家族の長とする。彼等の社會組織は年長者尊拜の風が正しく行はれてゐると云はねばならない。けれども茲に注意すべきことは此婚は其儘年長者の最初の家に住むと云ふ事は甚だ稀であつて、ヨヘルソン氏の調べたものによると一八〇の結婚に對して唯一のパーセント六だけが其元の家に住つた計りである。此年長者を重ずる風は婦女子の間にも行はれてゐる。即ち母は家内の仕事に關係してゐると共に其家族の長である。

かくの如く父系主義であつて年長者を尊ぶ風習がコリヤークの方の風習であるが、然らば婦人の位置をどう云ふ風に見るか云ふに、これは男程の勢力はない。馴鹿使用コリヤークのうちでは男が内部の天幕の内で食物を食べてゐる。其周圍に於いて子供達は並び、其子供達の傍には母即ち年長者の

妻が食物を配當する。又、他の客を待遇する計りである。他の婦人及び娘達は彼等の外の天幕の内、前の人々の食べ残した所の食物を受取つて食する計りである。それから亦海岸居住コリヤークのうちでは婦女達や娘達は男が食した後に圍爐裡の縁や、又爐邊に別々に残つた食物を食する計りである。かくの如く彼等の社會は男子殊に其年長者が主もになつてゐる。けれども其の夫としての年長者が妻に對してはしばしば要件要談のある際は相談する。娘の嫁入事にしても相談する。一般に男子から女性の年長者に對する態度は親切に保護者の位置になつてゐる有様である。そこでヨヘルソン氏の如きはコリヤークの家族は凡て一致してゐる。幸福であると云つてゐる。

コリヤークの社會制度のうちで不可思議な一種の風俗がある。それは血族者の復讐の行はれる事である。たとへば茲に或甲の者が乙の者に殺害せられた場合には殺された甲の血族者の男子は乙に向つて復讐する義務を持つてゐるのである。これは眞理として彼等は考へてゐる。この事は日本の古來行はれてゐる所の復讐の考へどよく似てゐる。コリヤークの乙が甲に向つて復讐を實行する者は肉身の兄弟であるとか、從兄弟甥及び其他兄弟又は母方の最も縁の遠い者がこれに従ふ。若しもある場合に於いて其殺害せられた者に兄弟がないと云ふ場合には若しも年に差支へないとすれば其父又は其伯父は復讐者となつて敵をうつ事が出来る。要するに此復讐の觀念はコリヤーク凡ての血族關係者の一般に義務として有するものであると云つてよい。斯う云ふ様な風が彼等の間に行はれてゐて、或程度までは法律上の人格が認められてゐる譯である。此法律上の人格と云ふのはつまりコリヤークの社會組織から來てゐるものであつて、又、大きな家族の間、或は氏族の間に行はれてゐる敵打ちの場合に於いて罪と罰との責任者として若しも、これを防止しやうと試みる時には、其目的に向つて賠償によつて決着せしむる事がある。かゝる場合に於いては馴鹿使用コリヤークなれば、其殺された敵

の方から對手に向つて馴鹿を贈る事が例となつてゐる。又海岸居住コリヤークならば、獸類の皮縫取した衣服武器又其他の物品を贈る事になつてゐる。かう云ふ風な制度の定められてゐるのは、日本の古代に於いて行はれてゐた所の彼の素戔鳴尊に負はせた机代物の如きとよく似てゐるものであつて、其他かう云ふ例は枚擧に遑がない。であるから我國の古代の賠償の制度と云ふものは、コリヤークの土俗に見る事が出来て、實際にそれを考へる事が出来る。斯くの如く互に敵打たれ、敵打つ者が出来た場合には屢々年長の老人が立つて仲裁を試みる事がある。此仲裁を試みる時には前に云つた賠償によつてこれを決着するのである。以上の風習は非常に珍らしい風習であるから茲に記述して置くのである。

(D) コリヤークの土俗

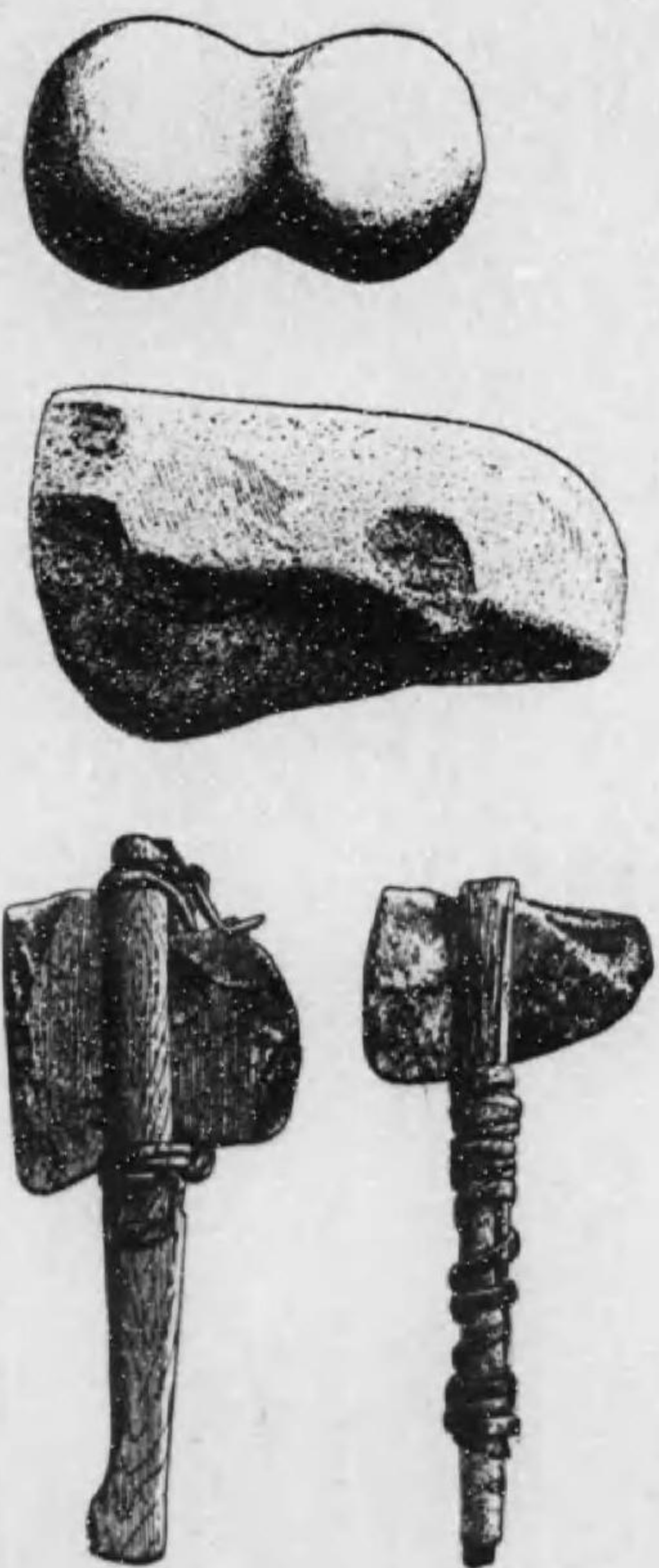
その(一)

コリヤークは東北方アジア民族のうち文化の最も原始的の位置にあるものである。チュクチよりも寧ろ原始的の位置にあると云つて宜しい。それは彼等が猶石器を使用してゐる事である。チュクチも元は石器時代の位置にあつたのであるけれどもこゝでは早くより鐵器時代に進んで來た。これは前に既に記した如くである。

けれどもコリヤークの方は其石器時代の状態が引續いて存在してゐる。コリヤークは今なほ石器時代と金屬使用時代との過渡期にある。彼等の使用する石器は日用の利器に於て猶ほこれが認められる。殊に注意すべきは

彼等の間になほ製作する石器は磨製ポリッシュ的の物はなく、殆ど全く打製チャップ的の即ち打ち缺いた物である。此點から云へばコリヤークの石器には磨製はなく、此状態は恰もヨーロッパパレオリソック石器時代の末期位の程度に在る事が解る。これ等の事實から考へて見ると石器の磨製・打製と云ふものは必しも時代と云ふものを示すものにはならない。これは今日コリヤークの石器を見て知る事が出来る。

石器の種類は石斧・石鎚・石銛・皮剝石器・石鏃等である。是等は今日もコリヤークの間に使用せられてゐる。これらの石器は凡て打製即ち打ち缺かれて作られるのである。其作り方はどう云ふ風な仕方であるかと云ふと先打ち割られた原料の石を左の手に持ち、右の手に骨製の槌を持つて自由に其端を缺いて行くのである。これには指を怪我するから、それを避けるため左の手の拇指サムに骨製の指環を箝める。それで人差指で缺ぐ時怪我を防ぐのである。斯う云ふ具合で骨の槌で缺いて行つて作られるのである。指に箝める骨の



錘石同

斧石の使用クーヤーク
(るよに氏ソックルへヨ)

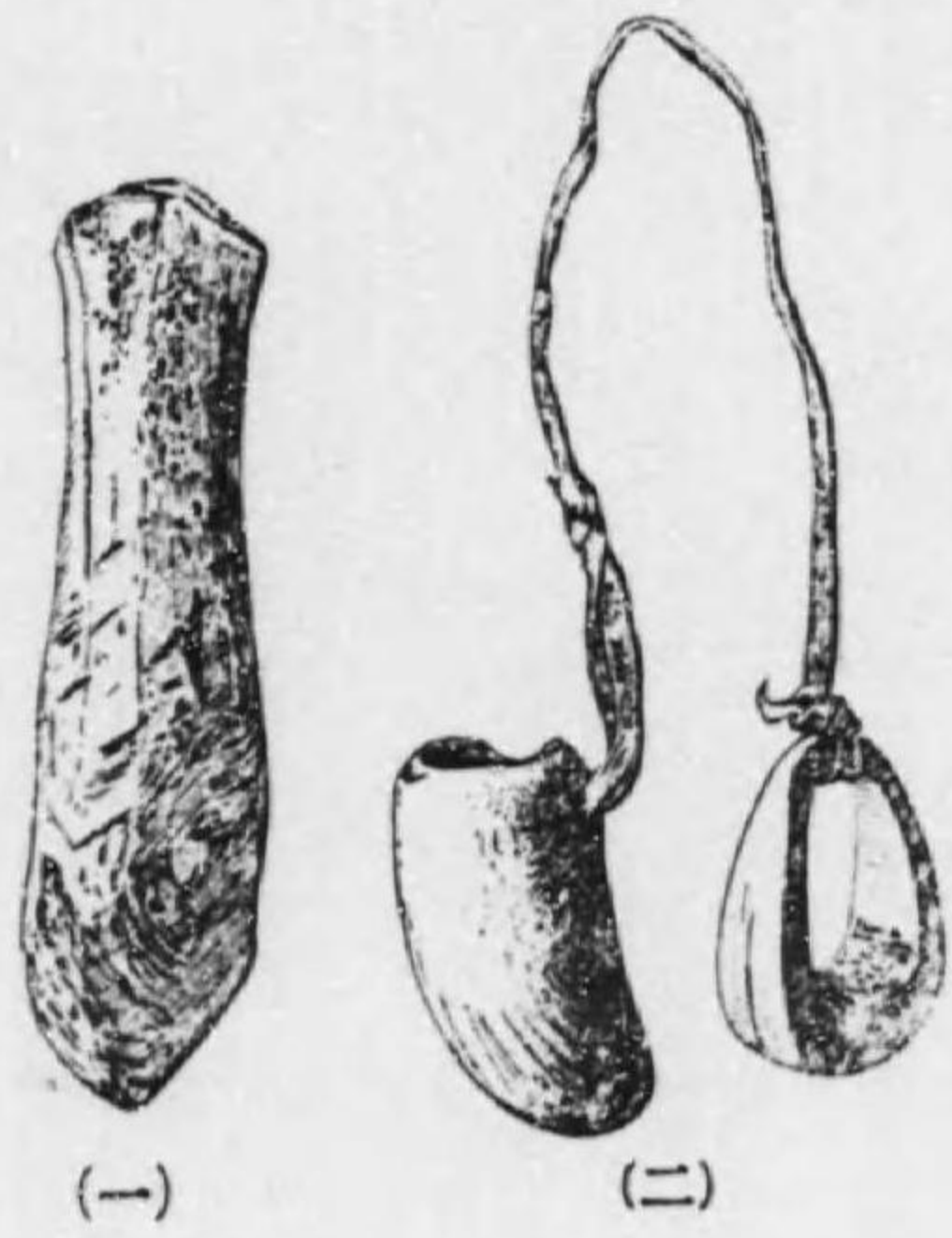
彼等の間になほ製作する石器は磨製ポリシト的の物はなく殆ど全く打製チャップ的の即ち打ち缺いた物である。此點から云へばコリヤークの石器には磨製はなく此状態は恰もヨーロッパパレオリソックの石器時代の末期位の程度に在る事が解る。これ等の事實から考へて見ると石器の磨製・打製と云ふものは必しも時代と云ふものを示すものにはならない。これは今日コリヤークの石器を見て知る事が出来る。

石器の種類は石斧・石鎗・石銛・皮剝石器・石鏃等である。是等は今日もコリヤークの間に使用せられてゐる。これらの石器は凡て打製即ち打ち缺かれて作られるのである。其作り方はどう云ふ風な仕方であるかと云ふと先打ち割られた原料の石を左の手に持ち、右の手に骨製の槌を持つて自由に其端を缺いて行くのである。これには指を怪我するから、それを避けるため左の手の拇指サムに骨製の指環を箝める。それで人差指で缺ぐ時怪我を防ぐのである。斯う云ふ具合で骨の槌で缺いて行つて作られるのである。指に箝める骨の



圖 六 同

斧石の用使クアヤリコ
(るよに氏ソツルンヨ)



(一)

(二)

具器作製器石クーヤリコ
れ入指(二)・髓の骨(一)
(るよに氏ソルヘヨ)

環は今日鐵の道具——鐵の小刀で木を彫刻する時にも矢張り箆めてゐる。
昔は石鏃は等しく骨の道具で打缺かれた。こゝに示してゐる圖は燧石製
の石鏃である。斯う云ふ石鏃は彼等の古く住んでゐる所からも出るし、又、今
日でも盛んに使用してゐる。茲に示してゐる圖は彼等の鑿穴のなかから得
た物である。鎗の先即ち石鎗石銛等は何れも燧石で作られてゐる。時には
黒曜石で出来てゐる物もある。此黒曜石は昔はカムチャツカの方から輸入
せられた物である。此處には産しない。即ち貿易品である。けれ共石鎗の
多くは燧石で出来てゐる。それから石の斧及び石の皮剥ぎは石英から出来
てゐる。石斧は自然の、或點までは河原石などの磨研されてゐる物を利用し
て少しく刃の處を打ち缺いて作られてゐる。それから此處で石板石の小刀
を使用してゐる。これは獸皮を切り、又其他の家用に使用してゐる。此石の
小刀はAとBとの二つの型式があつてこれは多くは土中から發見せられる。
是等の或物は少しく打ち缺いで作り、或物は刃の處を綺麗にして作つてゐる。

是等は自然の膚を應用してゐる事が多い。砂岩^{サンドストーン}で出来た耳飾りがある。これは小さな棗形に作られて其上部に孔を明いてゐる。この孔に動物の臍を紐としてこれに通して吊つてゐる。此種の耳飾りの孔は、昔は石の錐であつたのである。現に此種の物は今なほ海岸コリヤークの村落の婦女が用ひてゐる。近頃になつて此耳飾りは石の道具で作らないで美しい石を鐵製の小刀でもつて形を作り上げて、上部の孔は鐵の錐で孔をあける様になつてゐる。

ヨヘルソン氏はコリヤークの事に就いて屢々又、實際に此のところを永い間調査したが、氏に従ふと彼等は木を割るに石の斧を用ひてゐるところがある。けれども其石の斧は何れも打製であつて磨製石斧を用ひてゐる處を見なかつたと云つてゐる。こゝに不思議なる事は同氏はコリマのツンドラに住んでゐるユカギールの地方で磨製石斧を發見せられた。是等を見ると民族によつては近頃では、其或者は打製石斧を使つて、又其或者は磨製石斧を使

つたと云ふ事が解る。關東の石器時代などに磨製石斧と打製石斧とが多少地理學的に區別せられて發見せられるのは矢張り此コリヤーク及びユカギールの關係を見るやうにも思はれる。ステルレル氏はカムチャダールが石を磨いて作らへた磨製石器を使用する事を誌してをられる。又、ヂットマー氏はカムチャダールのうちに磨いた刃の附いた石の斧が存在してゐる事を注意されてゐる。けれどもコリヤークは決して磨製石斧を始め其他に到るまで磨製のもの無く、打製のものであると云ふ事は注意せねばならない事である。殊にこゝになほ云ふべきは彼等が木を割るに骨製楔や骨斧を用ひる事である。骨で楔をして木を割り又、これの代用として骨斧を用ひると云ふ事は注意を要す可き事である。

日用の石製品のうちに石のランプがある。この石のランプは各所で作られるのであつて此石は砂岩^{サンドストーン}である。此上部の方に孔をあけて石斧で窪みを作しらへる。此窪みには魚油を入れて、蘇^{ソウ}を燈心として火をつけるのであ

る。これはコリヤークの各所で使用せられるのである。又、日用製品のうちに火を出すとき火鑽杵の先端を押へる窪み石がある。これは河原石などを使ふのである。此河原石の原料は多く石英から選ばれてゐる。是等の石器は今使つてゐる處もあるけれども歐米人に接した處は多くブリキ鐘などを石のランプに代へ、又、發火器の押さへなども金屬器などに變化してゐるところなどもある。

なほ人工や裝飾を施されてゐない大きな扁平な石が使用せられてゐる。これらは食物をたべる時の臺、其他のテーブルに使はれてゐる。この大きな物は長さが七十七センチメートル、廣さが四十八センチメートルである。(或ものは長さ三十八センチメートル、廣さが二十八センチメートル)これらの石は多くは砂岩から出来てゐる。此事に就いてヨヘルソン氏は斯う云ふ事を云つてゐる。グリム氏は曾て日本の北海道の古い竪穴のなかからコリヤークの使用してゐる石臺と同じものを發掘せられた。これをドイツの極東ア

ジア協會の報告に記載せられてゐる。けれどもどう云ふ目的に向つて用ひられたかと云ふ事は何等記載してゐない。然し乍ら其出た石の形狀は全く同じものである。蓋し同一使用法をなしたものであらう。この石の臺が、コリヤークの方にも出れば、北海道方面にもこれが存在してゐる。さうすると此海岸コリヤークの物質的文化的型式と云ふものは、太平洋の北部の海岸及び島嶼地方に於いて昔は同一のものが分布してゐたと云ふことが知られるのであつて、互に此分布圏内に包含せられるものであらう。現今此石の臺がコリヤークのうちに使用せられてゐるものはペンシナ灣の海岸コリヤークのうちに於いてある。

先、石でつくられた主なる物は以上の如くである。それらの石器は現今彼等のなほ使用するものであつて其文化は金屬品と石器との過渡期にあるのである。今日東北方アジアに於いて石器を使用する人間の今なほ遺つてゐる例としてこれは大切な事實の様に思へる。

その(二)

金屬器と鍛冶術

ウランゲル氏によればユカギールにこんな話が傳はつてゐる。彼等の祖先 Oholk はロシア人到着以前既に鐵の使用を知つてゐた。彼等の墳墓に石斧で削つた木の柱を建て此柱に鐵・眞鍮・銅の破片を掛けたと云ふ話が傳はつてゐる。是等の金屬器の破片は古來シヤーマンの裝飾に是等を用ひてゐるのと同じ意味である。

ステルレル氏によればカムチャダールは千島アイヌから高價で鐵片を交易した事を話した事を書いてゐる。この事に就いて猶ほクラセニンニコフ氏も彼等が鐵片の多くを持つてゐる事を記してゐられる。當時のカムチャダールは家の前に柱をたて、それに鐵をかけてゐる。これは其家の富と自分の位置を示してゐるのであつて、其家が如何に位置がよく富み榮えてゐる

かと云ふ事を世間に見せる爲めである。是等の話を聞ても當時相當に彼等が千島アイヌの手を経てこゝに這入つて來てゐた事が考へられる。カムチャダールは當時から既にコリヤークやチュクチに於ける如く金屬器の破片を打ち金にする技術(Art of Hammering)を知つてゐた。クラセニンニコフ氏によれば、當時の彼等は鐵を調金する事は出來ないが、それを熱したる鐵を石の上で冷やし、金槌の代用に石の槌でこれを鍛冶する事は知つてゐる。又彼等は破れた鍋や、ロシアから這入つて來た新しい鍋の破片をもつて鍛冶をして槍鏃を製作した。又鐵針の目が壞れた時には新しい針で孔をあけ、かう云ふやうな鍛冶の仕事は當時彼等に遺つてゐたのみならずコリヤークやチュクチの間にも行はれてゐたのである。

コリヤークは斯くの如くカムチャダールと同じ様に古くから鐵を鍛へる術を知つてゐたのである。彼等の鍛冶術と云ふものは確乎たる工業として其材料の無い事、鍛冶の道具の不足する點からその進歩は餘り見る可きもの

はなかつた。一體或民族が石器時代に於いて鍛冶をする事を覺えたとしても粗金 (Ores) を採し出す事が出来ねば不都合である。其地方に於いて粗鐵 (Iron ores) の床^{ヤク}がなければどうも仕方がない。他の民族から此粗鐵の供給を仰ぐか又は他の民族から鐵の破片を仰ぐかするより他に仕方がない。かう云ふ様な譯であるから鍛冶術と云ふ事に就いては種々なる注意を要するのである。唯考古學的に鐵器鐵片を發見しても、單にそれが他から這入つてゐたと云ふだけで鍛冶を實際にやつてはゐないと云ひたい事がある。

コリヤークの住んでゐる地方に近頃來たヤクトを除いて冶金術 (Art of Metallurgy) の發達してゐる文化人は抑々どんな民族であるかと云ふと、それは日本人と支那人とである。けれども是等の國とコリヤークの居住地との間は、餘程距たつてゐる。であるから其鍛冶術が是等の國人から學んだとしても間接のものであると云はなければならぬ。シュレンク氏によるとコリヤークの鍛冶術はアイヌ又はギリヤークを通じて日本の鍛冶術を知つたの

であらうと斯う云つてゐる。

ロシア人が最初シベリアに到着した當時、彼等仲間に鍛冶師がさう多く有らう筈はない。であるからコリヤークなどに於いても彼等から鍛冶術を知る機會は少なかつたらう。けれども茲に注意すべきは、鑛山の發見であつてそれに伴つて人夫も必要だらうし、又、その鑛山發見と共に粗金 (Ores) などを採つた場合にはこれを鑪に掛けて見る、又、これによつて器具などを鍛冶した事もある。これには彼のタートルやヤクトの如き、其仕事に最も熟練するシベリア人などによつて試みられたであらう。さう云ふ様な事からコリヤークの鍛冶術を知つたと云ふ事に原因するのであらう。

ロシアの歴史によると第十七世紀にロシア人がシベリアに到着し各所で鑛山を發見し、それがためにモスコウの政府に向つて相當な技師をシベリヤに派遣することを度々請求したことがある。そして其ロシア本國の技師が此方に到着し、粗金を試練する事がたびたびあつた。かう云ふ事もコリヤーク

クなどの土人は、漸次に鍛冶術の事を知る原因となつたであらう。

ロシア人のシベリア最初の征服時代に於いて、或必要から政府は断然土人に向つて兵器火薬等の需用を嚴禁した。けれどもかう云ふ兵器彈薬と云ふ事までも、是迄既にロシア人に服従してゐるロシア人以外の者にかゝる恐ろしい武器のあると云ふ事などを知らしめて、なほ自分達に其必要を感せしめたのに違ひない。クラセニンニコフ氏によるとカムチャダールに就いて當時ロシア政府は鐵の道具や銅の皿類を需要する事を禁じた。然るに彼等はロシア人に反對して皮肉にも其腰に佩ける劍類を作り出す事になつた。これは必要に迫られた事であるが、さて其以前に於いて素より斯くの如く佩劍のやうなものは作る事は出来なかつたけれ共、しかし金屬を鍛冶すると云ふ事は不完全乍ら行はれてゐた。

勿論コリヤークはロシア人到着後、ロシア人から自由に鐵の道具を買ひ込み始めた。又、その鐵を鍛冶する道具及び鍛冶する鐵の原料等も輸入せられ

た。こゝに於てかコリヤークは一層鍛冶術は進歩したのである。Kuskkaのギシカ河口の村落に當時、倉庫が設立せられ、此倉庫のなかに鐵の原料や其道具を貯へて置いた。これは土人とロシア人との交易をせんが爲である。相當に此倉庫には是等の品物が納められてあつた。このクシユカと云ふところはコリヤークの或酋長の住んでゐた所であつた。こゝに問題のあるのはコリヤークはロシア人の到着以前に於いて既に鐵を鍛冶する事を不完全乍ら知つてゐたが、舊、此鍛冶は規則的な Home-industry として鍛冶術が發達したのではない。コリヤークの鍛冶術に就いて一番最初の文献はデットマール氏であつて、此記述は第十九世紀の半ば頃のものである。コリヤークの鍛冶術は最も簡單なものであるけれども、其道具のうちには於いて最も注意すべき物は鞆(Bellow)である。この鞆は最も簡單なものであつて海豹の皮からつくられ、それに二つの板の覆が付いてゐる。此板は一枚は上に、一枚は下に在るかゝの如き鞆はなほチュクチの鍛冶屋のうちでも見る事が出来る。チュク

チのそれはコリヤークのものよりも少しく進歩してゐる。コリヤークの今、私の話す鞆の事は主としてボコラス氏によつたのである。ヨヘルソン氏は彼等の鞆は其上の板の端に別に突起が付いてゐる。此突起は鍛冶師の弟子がこれを握り、動かして風を送る。

ボコラス氏によるとチュクチの鞆はロシア人のものを採用してゐるものと假定してゐた。けれどもコリヤークの鞆はツングースの簡単な鞆とよく似てゐる。さうして見ると彼等はロシア人が到着した以前から既に是を用してゐると云ふ事が解る。さうして其起原は恐らくはツングースの方から這入つたのであらう。さうして見るとチュクチも元は曾てこれと関係があるであらう。

東部シベリア民族の過半以上の鍛冶師の使用する鞆は二重であつて、弟子が此間に座るために地上に小さい長方形の皮袋が付いてゐる。此皮袋に二つの管(木又は鐵)が火爐に導く所の一つの鐵口を形も作つて一所になつてゐる。

火爐は一般に簡單なもので單に地上に穴を掘つて其穴のなかに木炭を堆高く盛つてゐるに過ぎない。二重鞆は動かぬやうに皮袋の外側に付いてゐる板で地上に結び付けられ、これと結合してゐる口を持つた管を粘土で覆ふてゐる。或地方では土とか其他重りとなるものを管の上に置いて成可く低くしてゐる。さうすると都合よく皮袋が土地の上にある事になる。海岸居住コリヤークのうちに行はれる鍛冶師の鞆は軟かな海豹の皮で作られ、又馴鹿使用コリヤークの方では飾られた立派な馴鹿の皮から作られてゐる。又、彼等のうちで家畜使用者のある者は牛の皮で作られてゐる鞆もある。二重鞆の袋は短い其口の處の縁の部分に小さな木片を縫ひ付けてゐる。此木片は鞆を動かす度に開いたり閉ぢたりする。皮袋の間の板上に座つてゐる弟子は一方の袋を指で開けたり閉ぢたりして、そして又他の袋を閉ぢたり開けたりする。かう云ふ風に鞆の仕事と云ふものは両手を要する様な頗る難しい骨の折れることであるから大いに熟練が必要である。けれども一般に

此仕事は若者又は婦人がこれに關係する。かう云ふ風の二重鞆はヤクト州のツングースのうちにも行はれる、又ヤクトにも行はれてゐる、又ユカギールの鍛冶師のうちにも見える。けれどもこのユカギールの鞆はヤクトの方から這入つたのである。

第十八世紀の蒙古人の鍛冶術に就いて彼の Pallas 氏は二重鞆を使用してゐる事を記してゐる。ギリヤークとアイヌの鍛冶師とは等しく二重鞆を使用してゐる。シュレンク氏は此アイヌとギリヤークとの鞆は日本人のを見習つたのであると云つてゐる。

Georgi 氏はツングースは簡單なる鞆を使用すると云つてゐるが、二重鞆と云ふ事を云つてゐない。シュレンク及びマークの兩氏は黒龍江畔のゴルデイに就いてこれと同一の記述をしてゐる。そしてシュレンク氏はゴルデイとギリヤークとのそれに就いて云ふには、此兩民族の鞆は其起原が二種に別れてゐるだらうと思ふ、そしてゴルデイの方は Manchu-Chinese の方から這入つ

て來たのである、ギリヤークの方は日本人の方から這入つてきたものであると云はれた。

その (三)

甲冑の製作

今日パールンやクエルに居る海岸居住コリヤーク(ベンシナ灣)は鐵製の器具を製作してゐる。此の鐵製の器具を製作すると云ふ事は彼等の最も自慢としてゐる處である。是等の地方の鍛冶屋の作るものは小刀子、斧槍等である。是等の鐵製器具はコリヤークやチュクチの市場には見えないけれども、曾つて其南の方に居るカムチャダールやその附近に居るツングースのうちに彼等の製作品が認められる。コリヤークは斯くの如く鍛冶をして色々の鐵器を作り上げる事が出来るが抑々斯くの如き鍛冶の術を何人から學んだのであるか、これは大いに研究せねばならぬ事である。

クラセニンニコフ氏によると、同氏がカムチャツカを旅行せられた時に見聞せられた話によると、カムチャダールはロシア人の到着しない前から既に鐵器を使用してゐたと云ふ。この鐵器はどこから得たか云ふとカムチャダールは千島アイヌの手によつて日本人製作の鐵製品を貿易して得たものと云つてゐる。以上はクラセニンニコフ氏の記述する處でこれは尤もな事と思へるけれども是等の鐵器が日本人製作のもので、千島のアイヌによつてカムチャツカに輸入せられたと云つても、此輸入した鐵器の量と云ふものは、極く少量であつたであらう。又、當時彼等の間に正しい意味の貿易と云ふものは決して行はれなかつたのである。であるからよしんばこゝに鐵器が入つて來たとしても其量は甚だ少なく其恩澤を蒙るのは僅かな家族のうちに於いて蒙られてゐたものであらう。一體、日本人や支那人は既に高い文化を持つてゐる。そして鐵器を盛んに作つてゐる。なほ黒龍江地方の民族及びヤクートの如きは早くより鐵器を使用してゐた、これにも拘はらず、東北方

アジアの各民族は尙ほ石器時代の境遇にあつた事は最も注意を要する。コリヤーク其他の北方民族はロシア人に接觸しない前の長い時期に於いて既に鐵器が交易品としてこれらの民族の間に這入つて來てゐたのである。この事に就いての一例を云へば、コリマのツンヅラ地帯の北部にユカギールが居るが、彼等の民族が話すところによると、ロシア人が此處に到着しない以前に於いては彼等は既に鐵の斧を使用してゐた。凡ての氏族は鐵斧を古くから、凡てのツンヅラ地方に輸入せられたそれらを使用してゐた。先、その最初には石の斧が行はれてゐた。けれども石の斧ではどうしても重い堅い所の大きな材木を切り出し、又は樹木の或部分を切るまでには非常な困難があつて到底其目的を達する事が出来ない。どうしても鐵の斧が必要である。けれどもさりとてまたそれがため石の斧を捨てるのは不可能である。要するに此意味で鐵の斧がこゝに這入つてきたのである。そこで、これらの地方には鐵の斧と共に石の斧の殘物が遺つてゐる。なほ日本人の手になつた鐵

器は千島アイヌ及びカムチャダールの手によつて得たのである。又、傳説によると此所に住んでゐるツングースは鐵製の甲冑を着用し鐵製の武器や骨製の武器を製作してゐた。

一千六百五十二年(承應元年)オホータ河々口に到着したコサツク兵の報告を基礎として見ると、こゝに居住するツングースは鐵製の甲冑を着用し、鐵製の武器や骨製の武器を所有してゐたと云ふ。これらを見ると彼等の間には古くから鐵を鍛冶し、しかも自ら甲冑を作る術すら發達してゐたのである。これは金屬及びこれを鍛冶する術を殆んど知つてゐる處のヤクトによつて最も發達したものと考へなければならぬ。これはロシア人到着以前に於けるヤクトに歸せなければならぬ。彼等ヤクトは既に古い時分から鐵器を鍛冶する術を知つてゐた。けれどもコリヤークの鍛冶術と云ふものは鐵の粗金(Iron ores)から鐵を熔解して器物を作ると云ふ事は知られてゐなかつた。唯鍛冶をする事を知つてゐたばかりである。

日本人の甲冑が北方ツングラ地帯のチュクチのうちに發見せられる事に就いては前にも記して置いたが、これはロシア人の這入つて來ない以前に貿易をした關係でこれを得たのである。一千六百九十六年にアナディールからカムチャツカに征服に行つたコサツクはカムチャツカのコリヤーク地方で日本の文字を書いてゐる文書を發見してゐる。それから暫らく經つてからデイル地方附近で日本の難破船があつてそこから採つてきた容器を發見した。スロプトゾフ氏によればこれらのものは間接にコリヤークと交易したのであつて直接にはこれらの品物とコリヤークとの間には毫も關係を持たないのであると云つてゐる。ポーポフ氏によるにロシアが最初のオコトツク居住のツングースが鐵製の武器を持ち、鐵製の甲冑を着用してゐるのを見た。これらの物品はヤクトから這入つてきたものであるとせられた。けれどもヤクトは比較的になつて極東北に到着した。そして北部ツングースは黒龍江地方からヤクトに先だつて北方に來たと想像が出来る。

されば彼等の鐵を得た事は何れの點から考へても最も古代の事であつたと云はなければならぬ。ツングースの着用してゐた甲よろこは彼等の最も親族である滿州人と深い關係あるものである。何だか關係あるやうに思へる。彼等の着用してゐる甲冑は前に云つたものと同一で鐵片を綴り合はした物であつて、所謂札甲さしよろこである。けれども其源は皮から出来たものであつて要するにこの皮を截ち切つて札としたのが段々と進歩して鐵のものになつてきたものであらう。

古代の皮や骨で作つた甲冑から進んだ鐵製の甲冑は(皮骨のものは今日もなほ使用されてゐる)私をして見るに、これらの鍛冶術と云ふものは最早ロシア人の到着しない以前から知られてゐたものと見て宜しい。一體コリヤークが何時の時、如何なる民族によつて鐵を鍛冶する事を教はつたのであるか、この答は非常に難かしい。けれども元は貿易の交換に於いて、生産者と消費者との間に介在してゐたものが段々と發達したもののやうに思へる。

石器時代の當時に金屬器の破片や鐵の塊片が這入つて來た當時に於いては、是等の金屬の小片と云ふものは他の物よりも特別に尊敬せられ、非常に偉力を持つてゐるものとしてゐた。そこで是等の鐵片と宗教上の信仰と云ふ者は非常に深く結び付いて來てゐた。今日シヤーマンのうちに鍛冶かんながくつゝいたり、又彼の作つた種々の鐵器が非常に神祕で、偉力のあるものとしてゐるのである。要するにこの意味から來てゐるのであらう。そして一度、他のものから鍛冶をしてゐる術を知る事が出来たならば、それから以後になると、盛んに鍛冶をして、小刀子、斧、槍等を作り出すに到つたのである。

その(四)

陸上の狩獵

コリヤークの陸上の狩として主なものは野生馴鹿や、角の大きい野生の山羊(Ovis nivicola)である。これらの動物は食用に供せられるのである。野生

馴鹿は馴鹿を飼養してゐるから餘り必要ではない、これを狩するのは僅かに或特殊な狩人によつて行はれてゐる許りである。その有様は丁度ツングースやユカギールに見るのと同じである。しかのみならず野生馴鹿の數も餘り多くはない。コリヤークの方では飼養馴鹿が盛んに放牧されてゐるから草があつて非常に宜しい土地は大概飼養馴鹿の棲息場所になつてゐる。それが爲めに野生馴鹿は其棲息地を奪はれて次第次第に北方の方へ追ひやられ、或者は僅に山上に棲息するのみである。野生馴鹿は夏は山上に、冬はツングラ又は河のほとり、谿谷などに來る。其著しい處は Palpol 山脈で、屢々アナデイール河畔を横斷するのを見る事がある、又、夏には北氷洋の海岸地方で見掛くる事がある。それから又、其小群はコリヤーク地方の最極南のところに來る、此最極南に居る野生馴鹿は北部カムチャッカやバラボル (Palapol) 谿谷の住民、殊に、バルボル (Palpol) の住民によつて狩せられてゐる。野生馴鹿の需要は極めて尠く、貿易などに出す事は極めて少い。以上は馴鹿・山羊に就いて

てあるがなほ彼等は皮を必要なものとしてゐる動物の狩もする。それには熊・貂・黒貂・狐・河獺・狼などがある。先、熊から記して見たい。

熊は、これは此内に入れたけれどもコリヤークは熊の毛皮を餘り使用しない。けれども其肉の脂肪の良くなる時、即ち秋に熊の肉を喰べる。此地方に居る熊は褐色の毛を有する者でミツデンドルフ氏の所謂 *Ursus beryngianus* である。これはカムチャッカに澤山棲まつてゐて主として河のほとり、魚の多く居る所に棲む、これは魚を食する爲である。コリヤーク地方には此種の熊は多く棲まつてゐる、彼等は此熊を *Koinin* と云ふ。千八百九十九年には熊の皮は三百八十枚程をギシガ或はアルトルスクからウラデオストックに出した程である。夏になると熊は山上から河畔又は海岸に下りて來て魚を漁るから、此時にこれを捕へるのは最も良い機會である。秋には草の實などを漁りに來た時に捕へる。冬になると熊は、コリヤークが魚を貯藏してゐる倉庫に密かに忍んで來て倉庫内の魚を取りに來る、その際にコリヤークはこれを

捕へるのである。又、冬になると熊は穴籠りをしてゐるが其時、これを捕へる。然るに春になると熊は穴を出て、來る時であるから注意を要する時期であつて、此時は熊は人間に出會したりなどすると跳び着く時期である。そして春は熊は瘦せてゐる時期で肥えてゐない。従つて其皮も使用する事が出来ない。夏と秋には熊は人間に會ふと稀には攻撃するから途中でこれに出會したら直ちに逃げる様にしてゐる。熊狩は専ら夏と秋に試みられる。此狩りは今日では鐵砲を用ひてゐるが昔は弓で射殺したものである、槍は餘り用ひなかつた。熊狩に犬を使用してゐる、けれどもこの犬は直接熊に向つて攻撃はしない、いつも熊を中央に立て、狩人を保護してゐる許りである。熊狩に犬をよく訓練してゐるのは海岸居住コリヤークである。一般に犬は糧を曳くに多く使用して熊狩り等の時は餘り役に立たない。冬になると熊は穴のうち引込んでゐるから、熊狩りをするには一番穴を目がけてするのが都合が宜い。そこで狩人は密かに其穴の入口の處に熊が逃げない様に、又、出

て來られない様に、丸太を以てこれを防ぐ。其天井には穴をあけて、そこから熊を昂奮せしめて、槍で突刺すか、又は鐵砲で打ち殺すのである。それから前にも言つた如く、コリヤークの倉庫の所に魚をねらひに來る熊を獲るには、頗る強い皮紐で罫わを掛けて置いて熊の來るのを待ち、熊のこれに引かゝるのを捕へる。けれども彼等の間にはシベリア一般に行はれる様な熊くま陷おと罫しは行はれない。

狐も彼等は狩する。これは主として赤狐であつて、其皮は最も高價である。狩の仕方は種々あるが、一般に陷おと罫しで捕へる。其時には傍に犬を置いて、これを捕へることにしてゐる。赤狐狩は馴鹿使用コリヤークの如きは馴鹿に糧を曳かして遠くまで行つて狩をしてゐる。

次に北極狐(Vulpes lagopus)も狩する、けれどもこれは赤狐よりも少い。其産地はツングラ地帯であるが、時としてはコリヤークの東部地方の無樹帯に棲息する。狩獵法は赤狐と同じ遣り方である。クラセニンニコフ氏によると

カムチャダールはロシア人の到着以前には、狐の皮は大切である、又、必要であると云ふ事を知らなかつた、むしろ犬を大切にした。それはカムチャダールの冬の衣服は主として犬の皮を用ひたやうな關係から來てゐる。

黒貂 (*Mustela zibellina* Linn.) は今日シベリアで最も値の貴い動物である。であるから、毛皮を得るがためこれの狩りは盛んである。昔は今日よりも黒貂の棲息地はもつと廣く、且、今日よりも多く棲んでゐたけれども、一たび黒貂を獲り始めてから、今日では段々と其數は減じ、其棲息地は狭められ、僅かにギシガから、毎年交易せられるのみである。黒貂は *Penshina* 及び *Opuka* の谿畔、或は北部カムチャツカで捕へられ、南カムチャツカではカムチャダールの手でもつて、毎年殆んど二千匹許りの收穫がある。一體シベリアで黒貂の價値のあるものゝ産地は、レナ地方であつて、其内でも *Olekna* や *Vitim* が宜しい。又、*Transbaikalia* ではネルチンスクにある黒貂の或上等のものは全く暗黒色で青味を帯び、軟かく、光澤を持つてゐるものである。最上等の黒貂の毛は、さきが

銀色を帯びてゐるものがある。

貂 (*Putorius ermineus* Linn.) は多く狩しない。この狩はロシア人及び海岸居住コリヤークに行はれるのみである。貂狩として有名なのは、ヤクトであつて、彼等には此狩りが盛んである。

灰色の狼 (*Canis lupus* Linn.) はツンヅラに棲息する。これを狩するものは専ら馴鹿使用コリヤークである。狼狩りをする目的は一は家畜を取りに來る害を防ぐためもある。又、一はその皮で帽子、手袋、頸巻、上衣及び足履ひの飾り等に製作使用するがためである。灰色の狼の皮は貿易品となつてゐる。これを狩する仕方はチュクチと同じである。

河獺 (*Lutra vulgaris*)、穴熊 (*Gulo vorealis*) は稀に棲息してゐるから、コリヤークは其都度々に狩する許りである。昔はこの二つの動物の毛皮は祭式に着用する衣服の飾りとして用ひられた。穴熊の皮は美しい衣服の飾りに使用する、これを用ひる風習はカムチャダール・チュクチも同じである。此穴熊の

皮は商買人の最も争ふて買ふものである。今日其使用者の主なるものはチユクチである。カムチャダールの方で狩して得た穴熊の皮は商人の手によつて、これがチユクチの方に這入つて行く事になつてゐる。

栗鼠 (*Sciurus vulgaris*)。これは餘り狩りとしては盛んではない。その産地はギシガ及びベンシナ等の上流地方で少し許りある。この動物は無樹帯や海岸地方には棲息しない。カムチャツカでも栗鼠は中央山脈の森林中に棲息する。ギシガ地方に少し許り居る栗鼠はツングースが狩してゐるのである。遊牧ツングースがコリーマやオコーツク地方で得た栗鼠の皮はギシガで交易する事になつてゐる。彼等は共に弓矢で栗鼠を狩した。此栗鼠狩りの時に用ひる矢と云ふものは骨で作つて、先は鋭くしてゐる。栗鼠狩りには必ず此矢を用ひてゐた。それはどうしてあるか云ふと、皮を傷つけない様に、殊更に鋭い骨鏃を用ひたのである。彼等狩人が栗鼠を狩する有様は、森林のなかに這入つて、あちこち見廻はつて栗鼠が居る事を發見すると、直ちに弓

に骨鏃の矢を番へて其頭を覘つてこれを射る。一たび栗鼠が此矢に當れば樹から落ちる、それを捕へるのであるが若しも栗鼠が樹から落ちても傷が浅くて、地上から他へ逃げる事があると、其時は連れて行つた犬がこれを追ふ事になつてゐる。

鳥の狩。渡り鳥としての鴨、鴈、白鳥等を彼等は狩する。昔は弓矢でとつたものであるが、今では小銃を以て狩してゐる。コリヤークの發射は下手であつて鳥類の如き小さなものゝ狩りには注意しない様に思はれる。秋になると渡り鳥が南と北に移住する時期で澤山コリヤークの地方に集つて來る、鳥類は斯く多數に集つて來るけれども、彼等を狩する事は極めて少い。これらの鳥類を多數にとつて、これを食物として貯藏するには最も便利であるにも拘らず、彼等はこれをしてない。コリヤークは鳥を喰べるには、焼いたり煮たりしない。射殺した後、直ちに生で喰べる事にしてゐる。

彼等の鳥類の狩の仕方は色々あつて、今其一二を記して見ると、海鳥 (*Sea-bird*)

は鯨の骨と其筋の糸で作られた罾わなで捕へる。松鷄まつどりの様な冬の鳥は動物の筋の糸で作られた掛蹄かひで捕へる。此掛蹄は冬の霜の降つた時などに板の上にこの蹄をこしらへて、板の部分をば雪に埋めて置いて、そして捕へるのである。其他、彼等は、尋麻いんま製の糸から編まれた網で鳥を捕へたりする。又、海豹の掛紐の一方に石を箵めて、そして此紐を廻して其勢ひの付いた時に先方に石が飛んで行つてそれが鳥に當る、かうして狩をする事もある。若しも鴨、鴈又は其他の渡鳥が村落から餘り遠くない所に巢を掛け始める時節になれば、彼等はこれを捕へる、そして遅く七月或は八月の始めに鳥が毛變りをする時節がある。其時は棍棒で敲き殺す。Jobovka 村落では鳥の毛變りの時節には鳥突き槍を投げて鳥を殺す事をしてゐる。八月になると各村落の人々は毛の抜け易はる鳥を狩するためにカヤックに乗つてあちらこちらに狩りに行く。此時の獵器は今云つた鳥突き槍を使用する。コリヤークの石投げは決して別に木の棒とか木の板とかの投げ板のやうなものを使用しない。専ら自分の手でなげるのである。

その(五)

海上の漁業

海岸居住コリヤークは其海岸に住んでゐるから其食物の大半は魚類である。そこで彼等は灣や河口、河畔でこれを漁する事を努めてゐる。魚を取るには色々の方法を以てしてゐる。先、網の方から記したい。網には色々の種類があつて其形も違つてゐる。例へば河の小流に魚が上下する時に網を張る。其網は丁度小流だけの幅の網であつて、兩端に糸を附けて其兩端の糸を棒に縛りつけて置く。魚が此棒に引掛ると又一方の端を引き上げて魚を捕へるのである。又、簡單なる手で投げる様な風の投網の簡單なものもある。又、網で魚を掬ふたたまの様な物もある。先、魚を取る網の初歩の物に發達してゐる。網の原料は尋麻いんまの纖維で作られて、これを糸として、網をすく道具があ

つて、それで網をすくのである。此網をすく道具は鯨の骨又は野生馴鹿の下肢骨で作つたり、或は木製のものもある。又魚を取るには釣針もあつてこれで釣る。此魚を釣るには海岸、河口等の冬結氷すると、其氷の上に孔を穿つて、其孔の隙間から糸を垂れて釣る事が多い。釣針は今では鐵で出来てゐるけれども昔は骨でこしらへてゐたものである。これに附いてゐる錘りは今日は鉛で作られてゐるが、昔は石であつた。釣桿は骨若くは木の枝で作る。其尖端に糸のついてゐる處は、骨で彫刻してゐる物を附けてゐる魚が捕れた場合には長さ四十五センチメートル程の曲つてゐる木の棒で魚を敲く所の敲き棒がある。これに用ふる木は、なるべく重い力づよい木を用ひてゐる。

彼等には舟がある。これは皮舟である。これをロシア語で *Baydara* と云ふ、又コリヤーク語ではこの事を *Gritwat* 或は *Neiga Gritwat* と云ふ。舟の骨格は木を組み合せて縛り付け、其上に海豹の皮又は海象の皮を以て張つてゐる。

コリヤークはカムチャダールよりも舟人としては上手であるが、さりごと

眞の漁人と云ふ事は出来ない。彼等は長い航海は出来ない。稀に海岸を少し離れるに過ぎない。夏になると屢々ペンシナ灣を横斷するが、それは最も天氣のよい穏かな日を見定めて試みるのである。カメンスコエの住民は或時はイットカナに航海する事がある。これを要するに彼等の皮舟は決して荒海に乗り出す事は出来ないのである。

ペンシナ灣のコリヤークは一人乗りの小さな皮製ボートを作る。此舟の形はアレウトやアラスカからグリーンランド迄のエスキモーの舟に非常によく似てゐるのである。かくの如くコリヤークの此舟はカヤック型と云ふ可きである。ポゴラス氏によればカヤックは太平洋沿岸居住のチュクチの間には知られてゐないと云はれてゐるが、コリヤークの方ではこれが少しく用ひられてゐる。コリヤークのカヤック (*Mitok*) は西部エスキモーのそれと相違してゐる。そして形状は小さい。カメンスコエの殖民者北方カムチャツカの彼等は木を刳りぬいて作つた丸木舟を使用してゐる。ユカギールや

カムチャダールのそれとよく似てゐる。

これらの二民族は皮舟を製作使用せず、木製の丸木舟を用ひてゐる。丸木舟はロシア人はこれをば *Struzhok* と云ふ。コリヤークはこれを *Yanca'rtwat* と云ふ。木材は白楊はこ楊であつて、斧で樹を切り、それで製作するのである。此舟を漕ぐ權は兩方に水掻きのあるものである。是等の丸木舟は寧ろ河舟であるが、カメンスコエの居住及び北カムチャツカの海岸居住コリヤークは、彼のカムチャダールの如く、これに乗つて海豹を獵する。此舟は一雙のものが普通であるが、時としてはこれを二つ繋いで用ひる事がある。

海獸の狩獵。海獸 (*Sea mammals*) の狩獵として古アジア民族のうちでユカギールは専ら漁業によつて生活してゐる。カムチャダールは漁業に従事してはゐるけれども極めて少ない程度に於いて海獸を狩する。海岸居住コリヤークは今日では彼のギリヤークに於けるが如くに魚類を以て生活し、コリヤーク殖民者の多數海獸よりも最も大切なる食物としてゐる。けれども彼等

の生活はなほ海獸を狩獵する事が最も大切なことである。昔に於いては海獸の狩獵は今日よりも最も盛んであつて、且、最も大切なるものであつたさうである。故に海岸居住チュクチはエスキモーに於けるが如く主として海獸の狩獵を矢張りつゞけてゐて、漁業の方は家事の經濟上第二位に置かれてゐる。コリヤークのうちで海豹を狩獵してゐる特別な處はペンシナ灣であつて、これを捕へるには主として銛を使用してゐる。銛の先は今日は鐵であるけれども昔は凡て骨で作られてゐた。

今日鯨を漁すると云ふ事は殆んど稀な事であるが、昔はベーリング海とオホーツク海に於いて盛んにこれの狩獵が行はれたものである。或老人の話すところに據ると、ペンシナ灣は鯨を獵するに最もよい處であると云つてゐる。そして其時は鯨の祭りが最も盛んに行はれた。十九世紀の最初にペンシナ灣にアメリカの鯨取りが往つて鯨を漁した事がある。この時のアメリカ人の記録によるとコリヤークは盛んに此所で鯨の漁をしてゐるが、これは

専ら海岸で決して遠く沖に出る事をしない。又、彼等の用ふる皮舟も、色々な形があつたと云つてゐる。

その(六)

戦争及び武器

今日のコリヤークは餘り劇しい戦争はしないが、古代の彼等は盛んに戦闘をしたものである。ロシア人とも劇しく戦つた。

諸、彼等の戦争に用ひる武器は、どう云ふものであるかと云ふと、弓、矢、槍等が主なものである。是等の武器は狩獵に使用する事もあるから、要するに其兩者は同じものである。先、弓、矢から記さう。昔は其矢の根として石、骨、木を用ひたものである、又、鐵鏃も比較的古くから用ひてゐた。けれども一番大昔の鏃としては石鏃が一番多く用ひられてゐたのである、石鏃の事を *Auta'ma'xem* と云つてゐる。石鏃は今日は土俗上に見るのは頗る困難である、なくなつて

ゐる。これは鐵鏃が用ひられた影響であつて、又、鐵鏃の方が遠距離に飛ぶと云ふ様な結果が、遂に石鏃を廢する様な事になつたのである。鐵鏃は骨鏃よりも盛んに用ひられてゐる。石鏃は今日では彼等の古い住居跡で發見するよりほかに仕方がない。けれども稀に時としては、コリヤークのうちには石鏃を記念品として保存し、又、護符として用ひてゐる。ヨヘルソン氏は同地調査中に於いて石鏃の矢柄がに附いてゐるものを採集せられたが、其形式は色々な種類がある。矢の長さは凡そ五七センチメートルから八七の間にある。此石鏃は矢柄の先に挿込まれ、其上から動物の筋の糸で縛つてゐる。彼等はなほ矢柄に骨鏃をも附けてゐるが、其材料は鯨、馴鹿、海象及びマンモス等の骨、牙等から作られてゐる。斯う云ふ骨鏃は彼等の各部落に於て見る事が出来るが、骨鏃の使用は、これを狩りに使用する事は餘り見ない。其内で海象の骨鏃は主として鳥を狩する時に使用する。又、木の鏃は矢柄の先を尖らして作つてゐるものである。次に鐵鏃はどうかと云ふに、これも等しく矢柄の先に挿

込んで、それを動物の筋で巻いてゐるものもあれば、又、矢柄の先に骨片が附いてゐて、其骨片の先端の開いた所に挿込でゐる。ヨヘルソン氏はコリヤークで、矢を多く採集したが、これを分類すると凡そ三十種ばかりの形式があること云つてゐる。そして矢の形状はチュクチと同じである。

今日弓は小銃の行はれてゐない地方にはなほ狩獵用として用ひられてゐる。弓は或部落では、其古い弓矢を非常に貴重なるものとして保存してゐる所がある、けれども又、一方には弓は小銃が盛んであるが故に、殆んど廢物同様である。そこで今は唯、子供の遊びにそれを作用し、又、遊戯勝負事などにこれを用ひる許りである。

弓矢は彼等の土俗として葬式の際に焼き捨てる風があるけれども、其時に焼く弓矢の多数は本物ではなく、模造した葬式用の弓矢を用ひる事になつてゐる。葬式用の弓は幹は殊更に曲つて中央の所に溝を附け、端の所に皮紐を附けてゐる許りである。それは弦の意味である。又、葬式用の矢は羽根を眞

似してゐるものを用ひる。此葬式の時に斯かる弓を用ひると云ふ事は餘程面白い事であつて、殊に弦が切れた様な形式で入れてゐるのは非常に面白い事である。海岸居住コリヤークには特別な弓師がある。彼等は簡單な弓も作れば、又複雑なる弓もつくる。彼等の作る簡單な弓は、其幹は落葉松赤楊で作り、其窪んだ即ち弓の内側は馴鹿の背中の廣い筋の糸を以て張る。これは弾力性をつけるためである。次に彼等の作る複雑な弓は、其幹は其細長片の一は落葉松、一は樺皮で、この二片をば、膠質のもので密着せしめて作つてゐる。これはかう二つ合はしたならば非常に弾力性が強くなるとかう云つてゐる。弓の内側には矢張り馴鹿の筋を張り、弓の外側の處には樺の皮を張る。又、弓の兩端には角製の弓筈を入れてこれに弦を掛ける事になつてゐる。弦は海象の皮紐で出來てゐるが、又、或ものは白鯨の筋の弦を掛けてゐるものもある。クラセニンニコフ氏によるとカムチャダールの弓弦は鯨の筋からこしらへたと云つてゐる。長い細い弓は遠距離に飛ぶと云ふ事から尊んでゐ

る。是等の矢には羽根が附いてゐる、矢柄は空中を飛ぶに都合よく、軽いものを選んでゐる。槍は今、他の武器が鐵になつてゐるにも拘らず、骨と石とで槍の先が作られてゐる。石の槍は専ら鯨狩に使用してゐる。口碑によると骨の槍は昔、戦争と狩獵とに用ひられたと云つてゐる。クラセニンニコフ氏によるとコリヤークは三叉の槍を使用してゐたと云ふ事を書いてゐるが、これ恐らくは鐵の槍が古い骨槍に代つた道程だらうと思はれる。

その(七)

堡塞

東北方の民族は敵を防禦する爲めに堡塞を設ける。コリヤークも亦、堡塞を設けてゐる。今日の彼等はロシア人に征服せられて非常な壓迫を加へられた結果として最早堡塞を築く必要はないが、ロシア人渡來以前及びロシア人渡來當時には盛んにこの堡塞を造つたものである。今茲に此事に就いて

記して見たい。

コリヤークの内で海岸居住の彼等は堡塞を設けてゐる。其目的は不意の敵の襲撃を防いだり、又、包圍せられた時の、それを持ち堪へる爲めであつて、其堡塞は専ら村落内に設けられてゐる。彼等の村落を海岸に設けてゐるのは敵の侵入を防ぐ一つの手段である。若し敵が其村落を侵して、危い場合となつて來た時には其海岸附近の島に彼等の村落を移す事をする。であるから成る可く彼等の村落の位置は海岸にあつて、而かも前面に島のある處を選ぶ様に成つてゐた。彼等が一度村落を島の方に移すと、そこで魚を捕つたり、又、海獸を獵するのである。又、彼等の防禦地としては河口に村落を設けてゐる、彼等が海岸や若くは河口に村落を設けて置くと、敵の近付いた時には皮舟で島の方へと遁れる事が出来る様に成つてゐる。其島と云ふのは所謂 Rocky Island であつて此島は自然の岩石から出來た島であつて、そこで自然の要塞が出來てゐる。其自然の堡塞と云ふのは岩が現はれてゐて、其岩が防禦する

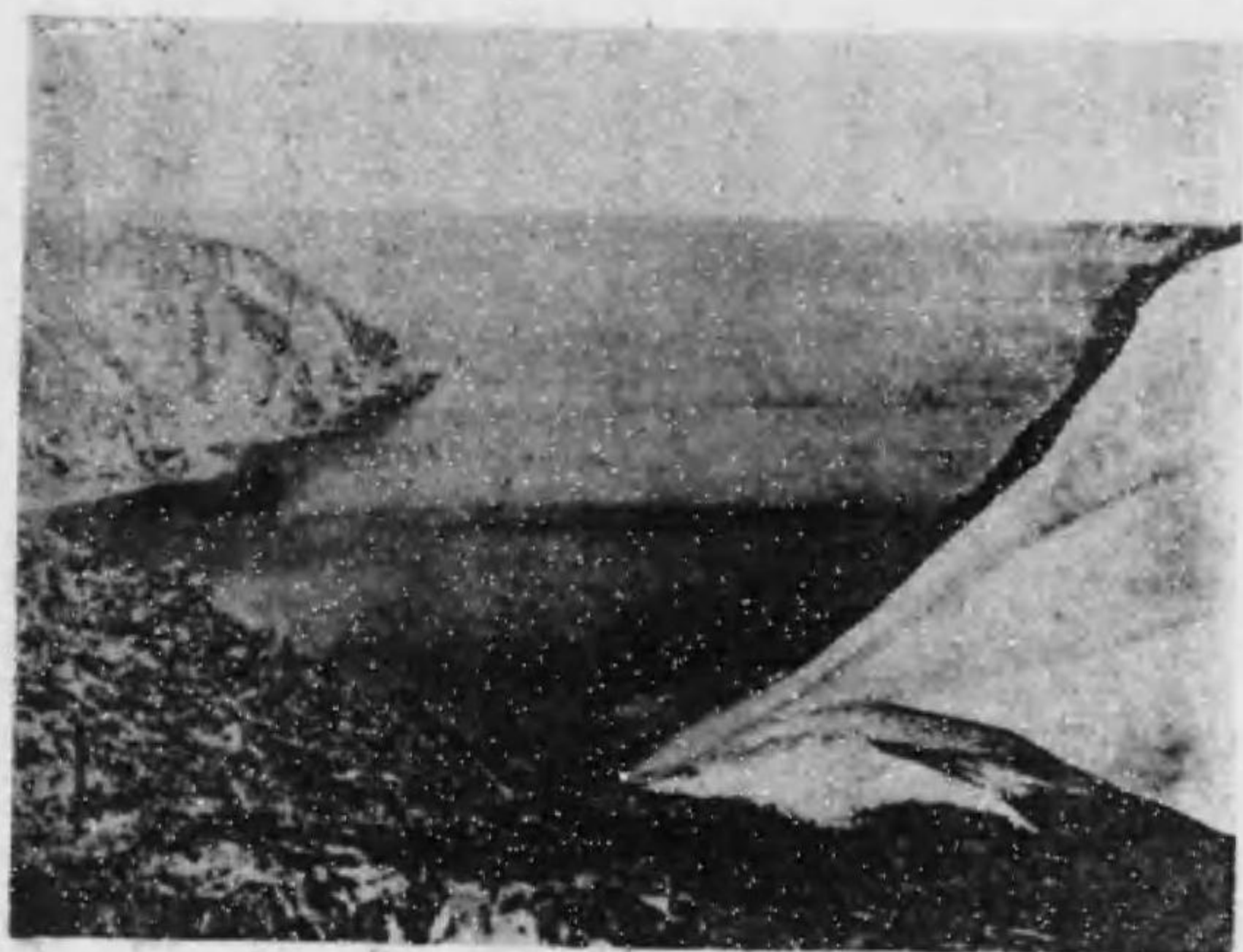
に都合よくなつてゐるので、彼等は其岩のなかに隠れる。かう云ふ島は彼等の居住地のあちらこちらに存在してゐるけれども今は其島々に生活してゐる者はなく、村落もない。けれども土人の話すところによると、是等の島々には昔は人の住居してゐたものであつて、其古い住居跡が遺つてゐる。殊に著しいのはギシガ河口附近にある島には立派に其遺跡がなほ遺つてゐて、是を見る事が出来ると云つてゐる。斯う云ふ風の自然の岩石から成つてゐる島に人が住んでゐるし、一方は村落として、一方は堡塞として、昔人の居つた例は、朝鮮の北咸鏡道の赤島に於ても其例がある。私は曾て此島を調べたが、凡て此島は赤い花崗岩から成つてゐて、小さい島であるが、其なかに堅穴等も存在してゐる。彼の李朝の祖先の或王は、其王妃と共に豆滿江畔から女真人に追はれて進退谷まつて此島に遁れたと云ふ傳説がある島は即ち此赤島である。日本内地に於ても斯う云ふ例を探せばあちらこちらに在る。千島の島々なごに於てもこれを見る事が出来る。例へばシヨタンの島の島島に於ける、又、

根室の辨天島に於ける例などが是である。

以上は海岸で島のある地方の例であるが、海岸附近で島のない場合には彼等はごうしてゐるかご云ふに、斯う云ふ處に住する民衆は其村落を海岸の絶壁・斷崖の丘陵に設ける。そして前は海であつて後の方の陸地には敵が來る恐れがあるから、溝や土堤で、又石壘木柵等で取圍んでゐる。戦争が始まらうとする際には番兵を選び出して、其番兵は堅穴の屋根の上或は倉庫の屋根の上に見張り番をしてゐる。若し彼等の村落にして、村が小さく、弱い人々が集つてゐる様な時には敵の襲撃と云ふ様なものを受ければ忽ち彼等は破滅して仕舞ふ。そこでさう云ふ場合には先、最初は弱い者を堅穴の裡に隠して置いて、それから靜かに一人の番兵が見張り番をしてゐるのである。愈々敵が此處に近付いて來て今や戦争が始まると云ふと、女や子供、老人は皮舟に乗つて逃げて仕舞ふ。その時に若しもその住居の附近が廣い灣に成つてゐれば都合が宜いが、さうでない場合には非常に困難をする。是等の人々は殺され

て仕舞ふかも知れない。若しかう云ふ風な場合には武装してゐる人々は踏み止まつて防禦するのである。古老の話によると、今日ではコサツク兵のために戦つて絶滅されたけれどもギシガの灣にはある村落が在つた。其時、彼等は敗北して舟で *Nasik* のコリヤークの方に逃げて行つて、これが爲めに彼等の或部分が助つたと云つてゐる。 *Nakakuta* 河口に在る村落から通れて來た民衆が、此處に堡塞を造つて住まつてゐた、其遺跡が今日でも遺つてゐる。其位置は岩から成つてゐる岬角であつて、其岬角の海岸が海上から突然と高く斷崖絶壁となつてゐる、であるから其方面から敵が近附く事は出来ない。そして残る後は一方は地續きであつて、敵が侵入する恐れがあるけれ共、此處は都合宜く深い谿谷に成つてゐて自然の溝が出来てゐる。さうして、其溝の下は甚だしい傾斜に成つてゐるから、容易に敵がそれに登つて來る事も出来ない、のみならず、その傾斜には石疊を築いてそこを保護してゐる。此石疊の殘物は今に遺つてゐて、今日見る事が出来る。所謂此處は天然の嶮を成し

てゐる斷崖である。彼等の口碑に據ると、此堡塞には曾て彼等がロシア人と戦つた場所の在る所であつて、當時ロシア人は此堡塞を陥し入れるのに非常に困難した。そこでロシア人はツングースを案内者として、此處を攻撃した。其時コリヤークは敵を自分の村落に近附けない様に頑強に防禦した、時恰も冬期に際し、非常に寒かつた、そこで彼等は傾斜してゐる坂に水を流して水を凍らし、すべすべする様にして敵の容易に足を踏み入れる事が出来ない様にした。そこでロシア人は非常に困難したが、遂に一計を案じて、毛皮製の深靴で、裏に鋭い鐵の鐵製雪橇かんじきを着けてそれによつて一歩々々と、氷に足を挿込みつゝ、彼等を攻撃した。堡塞中のコリヤークは盛んに上から弓に矢を番へて發射し、又石を投げた。これが爲めに彼等の多數は轉げ落ち、死亡した者は非常に多かつた。けれどもロシア人は其人數の多かつたのと、鐵砲を以てこれを攻撃したから堡塞は遂に落城して其防禦してゐた勇士は絶滅したから、コリヤークの戰士は其堅穴のうちで女子供の凡てを殺害して自殺して死んだ。



(るよに氏ソルヘヨ) 塞堡のクーヤリコるあに罽ノキトア

其城は落城した、けれ共其内の小数の戦士は辛うじて危険なる海岸の断崖絶壁を飛去り逃げた者もある。又、或者は水上を超えて Poren に行つて遁れた者もある。是等の話は彼等の堡塞と戦争が如何に劇しかったか云ふ例を示した者である。

是迄記したのは主として海岸居住コリヤークの例であつたが、然らば海岸に居住してゐない馴鹿使用コリヤークは敵を防ぐのに如何なる方法をするかと云ふに、彼等は家畜を多く所有してゐるから敵の近附いた時には

人間のみならず、其家畜をも防禦しなければならぬ。そこで戦争が始まらうとする場合には、先、凡ての家畜を山上に追ひ上げて、さうして接近して來る所の敵を防いだものである。又、更にツンヅラのうちで敵に遭ふた場合には、最初に圍ひの裡に追ひ遣つた馴鹿を、凡て皮紐で縛り、樞を真直に立て、連ねて圍ひとして、其中に馴鹿を入れて、彼等はそこで戦ふ様にしてゐる。

その(八)

日用の生活様式とその什器

これからコリヤークの日常使用する器具及び其使用法に就いて聊か記して見たい。

彼等の日常の事を云ふ前に當つて、先云ふ可きは發火法である。彼等の發火法は弓鑽發火である。これによつて火を出したものである。けれども現今は他から硫黄やスエーデン製のマッチが這入つて、廣く行はれるやうに成

つたから、今や日用の發火には古代の發火法を用ひない。けれども宗教上の祭式・儀式の時に用ふる火は矢張り昔の發火法によつて火を出したものをを用ひる。彼等は今猶ほその發火法で得た火を尊信してゐる。コリヤークの話す處によると發火器によつて得た火は聖火であつて恰も神と人との中間に介在するものと信じてゐる。近頃になつては猶ほ或所では聖火を得る際にも一寸昔の發火法を真似て、それからマッチなどによつて火を附ける様な所もある。マッチは非常に便利な物である。けれども彼等の方ではこれは他から價を以て得なければならぬ。又價も非常に高いからそれが一般に向つて使はれる事は困難である。そこで或者は火打鎌と火打石とを打ち合はせて火を出す事を遣つてゐる。火打鎌は餘り廣くは行はれてゐないが、兎に角、ロシア人が到着しない前から既に是を使用してゐた。此火打鎌の最初に輸入せられ且、弘まつたのは黒龍江方面のツングースの手によつて成されたものである。昔は彼等の地方から此處に這入つて來たものであるが、今では

賣買人の手で此火打鎌がウラチオストックから輸入される。今用ひられる火打鎌は支那製のものである。これと共に火打石も這入つてゐる。

此火打鎌に用ひる火口（はくち）は樺の木（ハルキ）の根つ子（ネ）に生える菌類（キノコ）から取る。此菌は荒い外部の方を打ち砕いて、内部の海綿質（スポンジ）のものを水のなかに揉み、軟かくしてこれを日光に乾かす、さうするとそれが軽くて燃え易い様に成つて、遂に火口となるのである。

發火器は一定の場所に住まふ海岸居住コリヤークの方よりも常に山野を漂泊する馴鹿コリヤークの方に必要が多い。前者の方は今日稀に堅穴のなかで發火用に供するに過ぎない。

彼等の婦人は一度び火を得て圍爐裡に火が點せられると、其火を長く維持して使用する事は最も巧みである。それは灰を以て燃え屑の火を埋める、使用する際には此燃え残りの火を灰の中から出して其上に菌の屑を置く、火が燃えて來る。さうして又、火を彼方此方に配る事が出来る。海岸居住コリ

ヤークも彼等が移住旅行する場合には發火器を携帯するのである。

燈火として石製ランプ (Esk.) が用ひられる。是れは砂岩で作られてゐる。それは深くはなく、高さ五〇センチメートルから六〇センチメートル位のもの。其ランプは常に天然木の臺の上に置かれる。斯くの如きランプは海岸居住者の方が、いくらか進んでゐて、馴鹿使用者の方はこれが劣つてゐる。此燈火に用ひる燈心は水蘚ツグミ或は腐つた木片から成る。今は燈心は専ら糸を使用してゐる。海岸居住コリヤークの方の燈火の油は海豹の脂を用ひるが、馴鹿使用コリヤークの方は馴鹿の骨を打ち砕いて煮て、脂を採り、所謂白脂を使用するが、これは Stearine の成分を持つてゐる。

馴鹿使用コリヤークは天幕のなかの寢室にランプを置いてゐる。此ランプの中には石製品もある。海岸居住コリヤークの話によると、彼等は昔は土製ランプ (Sed'yeck) を使用したさうである。(その Sed'yeck は土又は粘土の意。Esk. はランプの意) 今日彼等は土製のランプを製作使用しない。けれどもチュ

クチ・エスキモーはこれを尙、製作使用してゐる。ヨヘルソン氏は彼等の或家のなかで鯨の脊椎骨で作つたランプを見たこと云ふ。尙、コリヤークのうちには土俗品として土製ランプは見えないけれども、古代の堅穴等を發掘すると其中から土製のランプを發見する。

海岸居住コリヤークのランプは特別な物がある。又、木材は煖房や料理に使用する。流木は夏と秋とに割り、燃料に使用する。

コリヤークは元、粘土で壺などを作つてゐたが、近頃はこれもなくなつた。他からこれに代る物が這入つて來た。又、彼の石を焼いて物を煮る法も今は殆んど消滅して仕舞つた。これ等は彼等の調理法の點に於いて一大變革を來たしたものと云はなければならぬ。今日、煮焚きをする道具は商人の手から買つた鐵製と銅製との鍋を用ひるだけである。彼等は堅牢なものとして、殊に銅製の鍋を愛する。けれどもこれを得る事は容易ではない。唯、富んだコリヤークか、馴鹿を多く所有するコリヤークがこれを買ふに過ぎない。

彼等はブリキの鍋を使用する。これは最も弱い物である。けれども彼等はこれを大切に使用してゐる。近頃 Paten や Oued などの村落の鍛冶屋は、輸入せられたブリキで鍋を作る事をしてゐる。

金属器は器具として行はれてゐるけれども猶ほ石器は行はれてゐる。先、骨を打ち砕く道具石で拵らへた刳板の様なもの、それから石の槌の様なもの、が未だ用ひられてゐる。是等の石器の原料は河のなかの砂利から採つてゐる。例へば槌にしても立派に作る事が出来ない、唯一方の所を打ち缺いてゐるに過ぎない。此事に就いて前に一寸記した如くに彼等は打製品を使用してゐるので磨製品は使用しない。是等から考へて打製石器が必しも古くはなく、又、磨製石器が必しも新らしいとは云へない事が解る。コリヤークは打製石器を使用してゐる民衆である。この事を日本の石器時代の東京附近の例に於いて見るなれば、彼の武蔵野の山手の方に遺つてゐる打製石器はコリヤークの石器と比較する事が出来る。武蔵野あたりの打製石器は製作の上

から云つて、コリヤークの石器製作と同じ氣持を想像しなければならぬ、蓋し同じものであらう。それから石の斧もある、石の斧も打ち缺かれて作られる。なほ石製の刳板もある、これは其上で植物質の物、動物質の物を石の斧で切つたり、又、石槌で打ち砕いたりする。殊に石の槌は骨を打ち砕いて髓を取出したり、又、燈油の原料としてその骨を砕いたり、或は、樹の果實や、堅い乾いた魚を軟かくしたり、それから草の根つ子を打ち砕いたり、肉等を軟かくする用に供せられてゐる。彼等の食料品のうちに楊草 (*Epiobium angustifolium*) を云ふものがある。これは彼等の一般に食用に供されてゐるものである。此草は石の刳板の上で石の斧で切られ調理される。一體コリヤークの石の斧は打ち缺いた物許りである。それに柄を付けて、柄の付け方は真中の両面に溝をつけて、これに木の尖端を入れて、そして一方に於いて皮か葛かづらなどで縛り附けてゐて、柄の所を持つて物を切る様に成つてゐる。今日石器時代の遺跡から出る溝の有る石器はコリヤークは現にこれを使用してゐるのである。

コリヤークの飲み物は全く水計りで彼等は夜中に起きて冷水を飲む風習があるが、その容れ物は木又は皮から出来た桶である。此飲料水は海岸居住コリヤークなども皮舟で狩りに行く時はこれを右の様な桶に入れて持つて行く。

冬の頃、水が缺乏した場合には雪と氷とを溶かして水を得なければならぬ。これは非常に困難な事であるために、氷の下を流れる水を汲んで用ひる。それは氷の在る所に孔を穿けて其下に流れてゐる水を汲むのである。

海岸居住コリヤークは移住の際には成る可く河口の岸に其家を設ける事が普通である。又、馴鹿使用コリヤークは主として其天幕を谿畔に設ける。これは兩者共に水を得るに容易であるからである。日本の石器時代の遺跡など成る可く水の小流れ等の上に住居を設けてゐるのはコリヤークの心理状態と同じものと云つて宜しい。

水を汲むには木製の柄杓がある。それで汲んで水桶のなかに入れる。水

桶は皮紐海豹の皮又は二楊・ポブラ等の樹でつくられてゐる。エスキモーは此コリヤークと同じな水桶を用ひてゐる。エスキモーの方の水桶は海豹の皮で出来てゐて、動物の筋で編んである。エスキモーの方では此水桶は、單に水桶のみならず、他の器具にも用ひてゐる。

彼等の器具に柄杓匙等がある。是等は馴鹿の角山上に居る山羊の角から作られてゐる。なほ木製のものもある。この器具は専らソップや粥などを掬ふに用ひられてゐる。今は一般に匙の類は輸入品を用ひてゐるものが多いとなつてゐる。殊に馴鹿使用者の富有者の如きは輸入品の銀製の匙をさへ時に用ふる者がある。彼等の器具は皿鉢・盆・柄杓・桶等であるが、是等の形はチユクチの物と同じである。富有者は近頃は輸入品の陶器やブリキ類を用ひてゐる。

彼等は夜間は大小便のために決して外に出ない、これがために、是等の兩便を受ける便器がある。これは木を刳り抜いた物である、これはコリヤークは

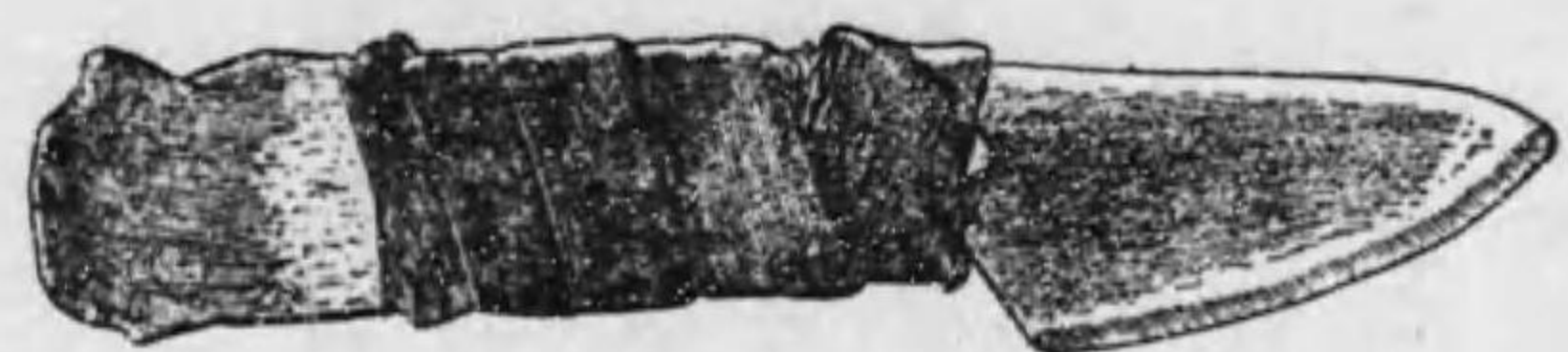
各戸に備へてゐる。

その(九)

動物性食物

コリヤークの食物は主として動物性のものである。殊に馴鹿使用コリヤークは最もこれが甚だしい。猪、コリヤークの一般の食物と云ふのは魚類、海獣、馴鹿、山上の山羊、熊、鳥、貝類等である。魚類は海岸居住コリヤークの最も好む食物である。それには生魚と乾魚とがある。海岸地方では夏、秋の間は生魚を煮て食したり又は焼いても喰べる。魚の頭あたまは生で喰らふ。冬になると魚をば料理したり又は生でもつても食する。生の魚は冬になつて凍つたものを其儘に食べる。此生魚の凍つたものを喰べる風習は、スタノボイ山脈の西部の北氷洋の地方の民衆にも廣く行はれてゐる。

乾魚(ロシア人の所謂 *Kukola*)は夏の漁期の間、海岸又は河畔で、婦人によつて



(るよに氏ソルヘヨ) 丁庖骨くさを鱈

作られる。此乾された魚は貯へられて冬になつて食べる。此漁期の季節は、男は魚を取るが、婦人は其取つた魚を自分の家の前に乾かす。これが爲めに彼等は仲々忙しくて、魚を一面に乾してゐる様さまは實に奇觀である。魚を斯くの如く毎日乾して秋に成ると是を自分の倉庫の裡に入れる。さうして冬期の食用に供する。此乾魚は主として犬鮭(*Dog salmon*)であつて、是を食する時は海豹の脂を掛けて喰べるのである。

鱈ニシキの魚に就いて彼等に一種の迷信がある。これを裂さくには鐵の小刀ではせず、圖の如き鯨の頤あごの骨から出來た小刀を用ひる。此鱈の魚に限つて今日猶骨庖丁を用ひるのは何故であるかと云ふと、此鱈の魚に就いては一種の信仰があつて、それを全身に傷を附ける事は彼等の方で好まない。

そこで軟かく切られる骨庖丁を用ひるのである。要するに此魚がタブーされてゐるのであつて、此故に骨庖丁を用ひるのである。昔ならば石庖丁で魚は裂いたのであらうけれども、此鯡に限つては矢張り骨庖丁でもつて裂いた事が解る。斯う云ふ風に考へて見ると土俗上の問題の如きは、實際上の意味に於いてのみを以て判断する事は出来ないと云ふ事が出来るであらう。今日此骨庖丁を用ひてゐる地方は Vancouver 島の Koshimo で猶鯡を裂くのに是を用ひてゐる。

Itkana の移住民は大きな鮭よりも小さな鮭を捕つてゐる。此鮭は彼等は Uyo'k (Salmo socialis) と云ふ、此魚は大變悪い臭がある。此小さな鮭は専ら冬に食する、夏これの捕れる時節は海岸の砂地又は河原等に夥しくそれらの魚をば堆高く盛つて、これを又、馴鹿の角を刃としてゐる熊手で掻きならし、そして能く天日に乾して倉庫のなかに入れる。一體此魚はにほひの臭い、形の小さな魚であるから、普通犬鮭ドックサレモンのよく捕れた場合には、此魚は喰べない。若し犬鮭

を大變に多く捕らへて食物に不足の無い場合には此小鮭は犬の食物として遣る事にしてゐる。

海獣 (Sea mammals)

海岸居住コリヤークでは海豹シムが最も主要な食物である。けれども是等の肉は永く持堪もちへる事が出来ない。又、何時でも是を食する事が出来ない。春の時分には石室の内に暫く貯へて置いて、少し宛出して喰べる。しかし春を過ぎると最早此手段ては出来なくなる。海豹及び其他の海獣の肉は煮てたべ、昔は是を煮るのに土器を以てしてゐた。

ペーリング海峡オウラスで海象シライオンの肉は高價である、これが高價であるのは近時、西洋製の漁船が此邊に侵入して来て、盛んに大仕掛で漁業をしたから、是等が減つて来たのであつて、此關係で高價を来たしたのである。今又、稀になつてゐる、唯、海象の居る地方は、Karagha 灣や Karagha 島の小灣内でこゝに多く棲息する。コリヤークの狩獵者の或者は夏に皮舟に乗つて同島に行つて其獸

を狩する。

馴鹿は馴鹿使用コリヤークの生活の基礎である。馴鹿が料理せられた時に、その髓腎臓・肝臓・軟骨及び下肢の腱等は生のまゝ、齒で噛み切つて喰べる。髓は風味のあるものとして珍重する。髓を骨のなかゝら取出すのは非常に巧妙を極めてゐて、石槌や大きな庖丁の背で骨を打ち割つて、中からそれを取り出す。彼等の旅行中には凍つて堅くなつた肉は薄片に切つて食する。今日、肉は鐵製又は銅製の鍋で煮てゐる。是等の鍋は冬の間は富有者の天幕の外、圍爐裡の上に掛けられてゐるのを見る。そして鍋の中には何時も熱い汁が出来てゐて、咽喉の乾いた時には小さな杓子しやくこで是を注いで飲む。此鍋は何時も圍爐裡の上に掛け放しであつて、机などの上に置く様な事は無い。若しも牧人が牧場から歸つて來る時は此鍋の中の汁を出してもてなす。鍋は始終、掛け放しであるが故に實に不潔である。此汁の中に這入つてゐるのは色々の肉であつて、此肉は前に調理した残りの物腸・馴鹿の舌、他の動物の色

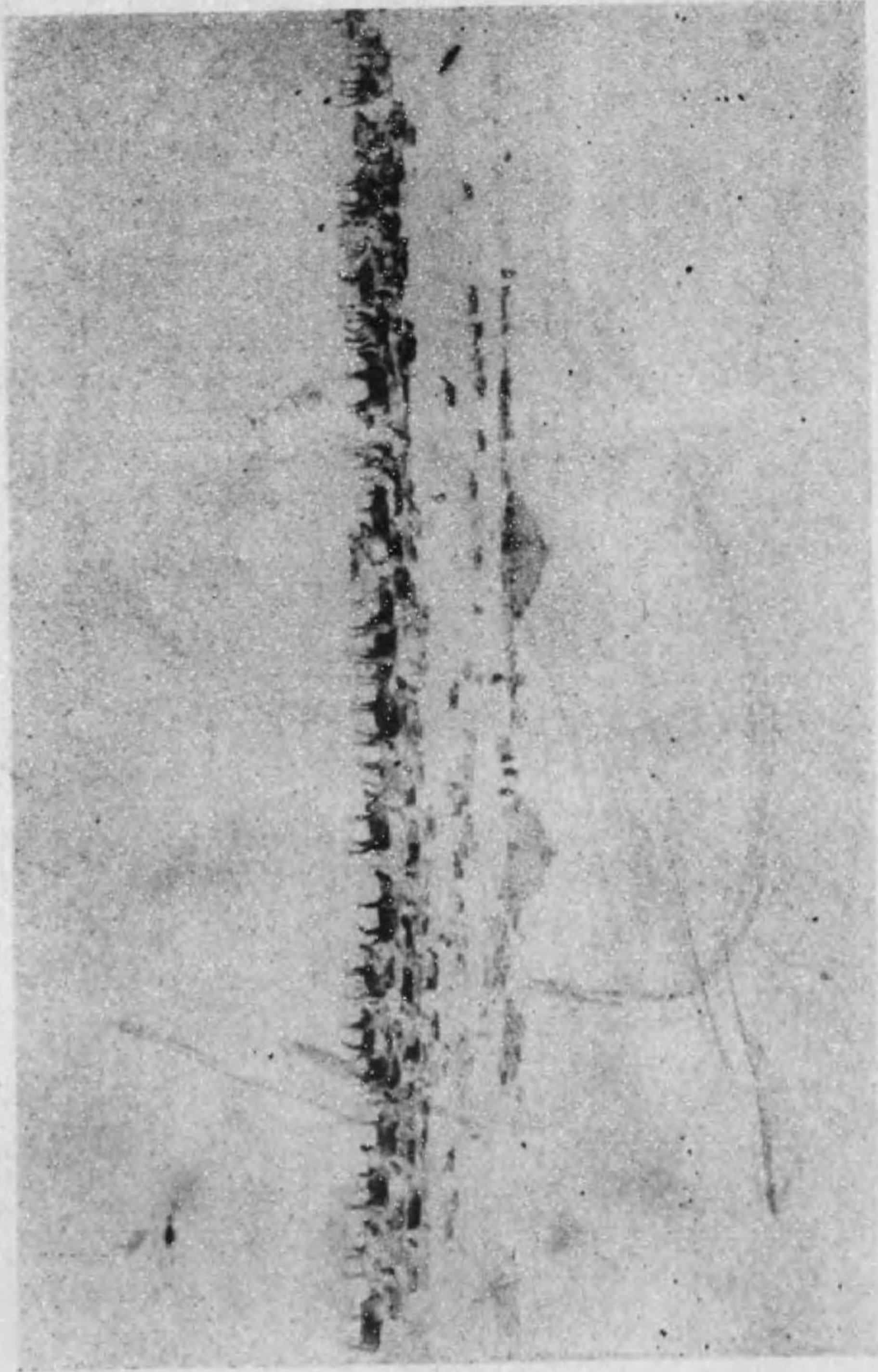
々な部分で、これらが鍋の中に投げ入れられてゐる。鍋は是等の肉が一杯に這入つてゐて、其中に馴鹿の毛であるとか、洗はない土の着いてゐる肉などがあつて實に不潔なものである。若し、鍋の中に汁氣の無くなつた時には、水を挿し入れたり、雪を投げ込んだりする。

以上の鍋は一箇所に留まつてゐる時の野營には充分であるが、若し移轉する際に、運搬するに忽ち壞れて仕舞ふ。食物の調理は天幕の中でもつて、女子がする事になつてゐる。調理は仲々早く出来る。例へば肉ならば其肉を木の俎板の上に置いたり、又は大皿、刳り抜いた鉢などの中に入れる。料理は左の手で肉の一片を握り、猶、肉の一片を齒で咬へ、右の手で庖丁を持つて下の方から切つて行く。斯くの如き調理の仕方はシベリア一般の民族が肉を調理する時の仕方である。旅行中の際は生肉は打ち碎き、又、馴鹿の脂肪などは石槌で敲いて喰べる。

とは云へ馴鹿使用コリヤークの食物は馴鹿の身許りではない。なほ魚類

や海岸居住コリヤークの使用する海産物等をも食する。海獣の肉は冬期馴鹿を賣却する際に貿易品として是を求めるので海岸から遠く距たつてゐる所に漂泊する富有な馴鹿使用者は殆んど魚類を食せず、海獣の肉をも少しく食するのみである。彼等は夏期、谷の溪流の傍で小さな網を以て魚を捕るか、又はヤナを懸けて是を捕るのみであつて、其使用も異ふ。冬期に貯蔵する事もない。されば此山上の溪流での漁業は全く取るに足らないのである。彼等は海産物と犬鮭とは海岸の民衆から輸入せられるか、又は彼等が海岸地方に行つた時、是を得て食する許りである。

馴鹿使用の小團體や貧しい獸群者で、天幕を持たない連中は冬期でも魚類を食せねばならない。これは彼等が馴鹿を全く所有してゐないから是を食物として用ひる事が出来ないのである。斯くの如き憐れなる放牧者は夏期に河口か、或は海岸に行き、冬期は乾魚を食べるのみである。さりとて彼等は海獣を狩るのであるが皮舟を持たないから海上に出で、是を狩する事は



(るよに兵ンルンヨ) 群鹿馴のクーヤリコ用使鹿馴

や海岸居住コリヤークの使用する海産物等をも食する。海獣の肉は冬期馴鹿を賣却する際に貿易品として是を求めるので海岸から遠く距たつてゐる所に漂泊する富有な馴鹿使用者は殆んど魚類を食せず、海獣の肉をも少しく食するのみである。彼等は夏期、谷の溪流の傍で小さな網を以て魚を捕るか、又はヤナを懸けて是を捕るのみであつて、其使用も異ふ。冬期に貯藏する事もない。されば此山上の溪流での漁業は全く取るに足らないのである。彼等は海産物と犬鮭とは海岸の民衆から輸入せられるか、又は彼等が海岸地方に行つた時、是を得て食する許りである。

馴鹿使用の小團體や貧しい獸群者で、天幕を持たない連中は冬期でも魚類を食せねばならない。これは彼等が馴鹿を全く所有してゐないから是を食物として用ひる事が出来ないのである。斯くの如き憐れなる放牧者は夏期に河口か、或は海岸に行き、冬期は乾魚を食べるのみである。さりとて彼等は海獣を狩るのであるが皮舟を持たないから海上に出で、是を狩る事は



(るよに兵ツルンヨ) 群鹿馴のケーヤリヨ用使鹿馴

出来ない。或富める馴鹿養牧者は例へば獸群を以てロシア人の居住地附近を漂泊する。Taigonos 半島の西部に居る彼等は犬橇で時々ロシア人の村落を訪問する。彼等は夏期に於いて冬期に用ひる乾魚を漁するために出で、行く。彼等はよしんばお客があつても其犬に於けるが如く多くの馴鹿の肉を切つて出さない。犬の如きも十匹から十二匹の犬群には僅かな馴鹿の肉で充分である。

一般から云ふと馴鹿使用コリヤークの食する嗜好物は犬鮭と或海獸の肉と脂とである。今日の漂泊する馴鹿コリヤークは昔彼等の祖先が海上に狩獵をしてゐた時代の遺風と慾望を猶ほ忘れないでゐる。是等は彼等の民族性の上を考へる事にも餘程面白い。雪が降つて橇を驅るのによい機會があれば彼等は橇を仕立つて海岸コリヤークの所に到り、その地方の海産物を得やうとする。其海産物には凍つた海豹の脂・犬鮭・白鯨の皮と交易して歸る。又、海岸の者は彼等から馴鹿の肉などを得るのである。

鳥類

彼等の經濟上の點から是を用ひるのは僅かである。彼等は海鷗うみかもめを好まない。是は味の無い、まづい物と考へられてゐる。けれ共、一度食物が缺乏して來ると此海鷗も食する。初夏の候は漁期であるが、其前に海岸居住のコリヤークは海鳥の殆ど凡ての種類を食する。若しも漁業や海豹狩りが始まれば、最早鳥獵は止められて仕舞ふ。彼等は鳥の卵を愛する。鳥の巢がへりの季節に成ると彼等は此卵を採集するが爲めに、皮舟に乗つて島から島に漕いで行く。卵の採集は大概數百個も得るが、それを其場所で直ちに煮て喰べたり、又翌日などに煮て喰べたりする。彼等の卵の鑑定は腐敗してゐる物も腐敗してない物も區別は立たない。

貝類

貝類は海岸でとつてゐるが、これは海岸居住者も馴鹿使用者も共に食してゐるけれども格別旨い食物とは思つてゐない。そして魚類や其他の海産物



(るよに氏ソソルヘヨ) 器骨くぬを肉の貝

の餘り獲れない時に、是を食する許りである。今日のコリヤークは貝類に對して以上の如くである、けれども昔はかゝる事はなかつた。貝類は最も好んで喰べたのである。これに就いて最も面白い事は、Naykhan 河口は海拔六〇メートル許りが或岩の海岸であるが、そこに古代コリヤークの堅穴の跡が遺つてゐる。そして其附近には昔時の貝塚が猶遺つてゐる。是等の貝塚を見ても彼等が古代に於いて貝を多く喰べてゐたと云ふ事が解る。今試みに此貝塚を積成してゐる貝殻は何んな物であるか、茲に是を記して見たい。是れ即ち彼等が多數の貝を好んで喰べてゐた事の證據になるのである。Louis 博士の報告によれば此所の貝塚を積成した貝類は *Purpura saxicola*, 此次は *Mytilus milius*, *Edulis*, *Mya alenalia*, *Littorina grandis* 等から成つてゐると云ふ。そして今日此地方の海岸

には是等と等しい貝類が棲息してゐる。こゝに示してゐる圖は鯨の骨から作られた貝剝きである。長さは一〇センチメートルで、此器を以て貝を割り乍ら身を出したのである。コリヤークは此器を *Mikakuna* と云ふ。

馴鹿使用コリヤークは馴鹿トシディアフライばつた (*Oestrus tarandi Nordenskiöld* 或は *Tabanus tarandinus Slunin*) を食する。此蟲は馴鹿の皮の上に發生する。春に成つて此蟲が毛皮の上や毛の中から發育して這ひ出してくる。此時コリヤークはこれを拾ひ出して食ふ。又牧者はこれを集めて桶の中に入れて自分の家に持ち帰り子供を喜ばす。

植物性食物

コリヤークの植物性食物の使用はチユクチから見ると稍々多い。けれどもカムチャゲールに比較すると、これよりも其使用の量は少ない。コリヤークの神話によると其祖先たる大鴉は草の實草の根草の葉等を好んで食したと傳へられてゐる。これを以て見れば昔に於いて彼等は植物性の食物を取

つてゐた事が解る。



(るよに氏ソルへヨ) 器骨リ掘穴

コリヤークの植物性食物の採集に就いてこゝに面白い土俗があるから記して見よう。植物の根植物を採集するのは主として女子に限られてゐて男子はこれをしてしない。此事は一般に他の民族に於いても其風習は同じである。此地方に背中の皮の赤い甘日鼠があるが、此鼠の穴には草根が可成り多く貯へられてゐる。これは或季節に採集して冬の用意に供してゐるのである。此穴に運ばれてゐる草根は都合二種類から成つてゐる。

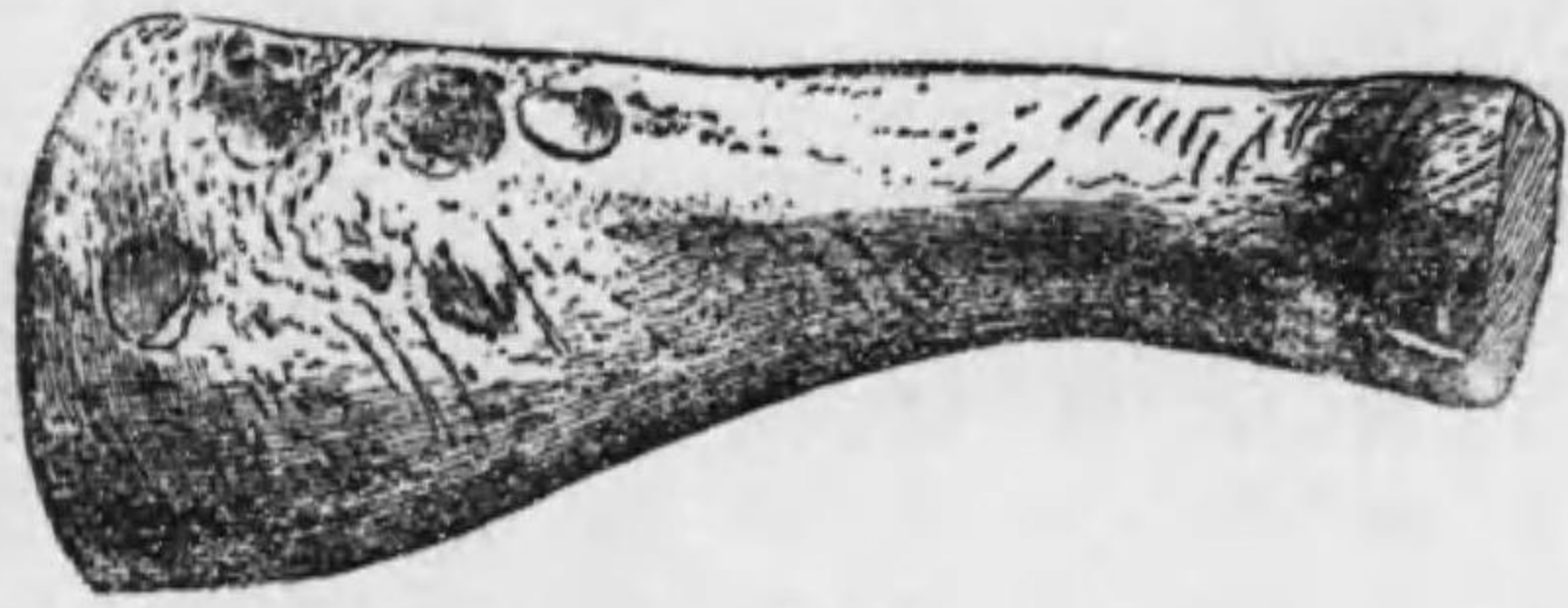
即ち *Evotomys latasiei* 及び *Evotomys Wasnesoen-schii* である。此植物はギシガ地方やカムチ

ヤツカの北部に多く繁殖してゐる。秋に成ると鼠は冬の食物として草根を穴の内へと盛んに集め出す。此季節にコリヤークの婦女は圖の如き器具を携へて其穴を掘つて、中から鼠の集めてゐる草根を採集する。此穴を掘る道具は、骨から出来てゐて柄が弓なりに彎曲してゐる。近頃は此器具は鐵に成つて、柄も亦斯くの如くには曲つてゐない様に成つてゐる。或場合には婦女は飼つてゐる犬を伴つて行つて、犬に其鼠の穴を嗅がして探させ、掘り取る事もある。彼等の面白い風習は、廿日鼠の貯藏してゐる植物の殆ど凡てを取出すが、唯僅か許り、彼等の冬の食物として足りるだけの小量は、残して置く。又、穴を掘るも、決して土を上投げ上げない。それは鼠が巢を修理するのに大變都合の宜いやうにして遣つてゐる。斯う云ふ事は彼等の風習として非常に面白い事と云はなければならぬ。此中にある植物は皆これコリヤークの食料となるものであつて、自然の現象は大變に旨く、能く出来てゐるものと云つて宜しい。尙、委しく此巢の中にある植物を見ると、斯う云ふものが、その

内にある。例へば Martagon の球莖 (*Fritillaria sarrana*)、次は *Claytonia acutifolia* Wild (マシア人は是を甘根と云ひ、コリヤークは Inat と云ふ)、白酸模 (*Polygonum polymorphum*)、すげぐさの根 (コリヤークは Paixo と云ふ) 等である。凡て是等の根は生又は調理して食する。若し生で喰べる場合には海豹の脂で漬し、或は Roe 鹿の肉と共に打碎いて食する。彼等は魚類は馴鹿の肉と草根と共に調理したり、又、草根を魚と混ぜて、海豹や馴鹿の血を混ぜて、食物とする事がある。楊草 (*Epilobium angustifolium*) はコリヤークは、これを Me'mnet と稱し、食用に供するが、これは食用植物中第一に位するものである。この草の莖は、採ると束にして太陽の熱か又は圍爐裡の傍で乾かす、そして後に是を石斧で細切りにする。これを海豹の脂、馴鹿の脂肪などを混ぜて喰べる。麥の粉をも用ひるが、これは草の實や、焙かした海豹の脂を混ぜて、共に練り合せて蒸菓子とする。カムチャツカでは樹の髓 (Pine) を喰べる。これは先、樹の枝を割つてその中から髓を取出し、是を太陽に乾かし貯藏して冬の食物に供する。楊草の若葉は

茶が不足した場合には茶の代りとして用ひる。北部カムチャツカの地方では、あまゐ (Heracleum sphandilium) の根を食物とする。

草の實は草の根に於ける如く新鮮なものをば生で喰べる、或は馴鹿の血と混ぜて粥かゆとしても喰べ、或は魚や肉と混ぜて調理して食する。彼等の食料中最も愛好する物は太陽に乾した犬鮭の乾魚の肉を敲きにして、これに海豹の脂と Blaa-berry を混ぜたもので、これは彼等の方でも大變珍味とする爲めに、皿の内にに入れて食事の時に出して来る。斯う云ふ混ぜ物を軟かく敲きこなすには、骨の棒を以て、木の盆か或は皿の上で敲いて、拵らへるのである。此骨の杵は二三センチメートルあつて圖の様な物である。



(るよに氏ソルヘヨ) 杵 骨

主なる草の實の種類を此處に記すると次の物がある。 *Empetrum nigrum*, *Vaccinium uliginosum*, *Vaccinium Vitis idaea*, *Rubus chamaemorus*, *Lonicera caerulea* 及び *Prunus padus* (北部カムチャツカ地方) 等である。其内で Blaa-berry の *Vaccinium uliginosum* が最上等である。カムチャツカでは前に在つた *Prunus padus* の實を押し潰つぶして扁平な菓子に作る。是は天日てんびに乾かすと都合よく出来る。草實・小鹿の類 (Koo. 鹿)・魚・海豹の脂等を混ぜて作つた蒸菓子は是を凍らして喰べる。其喰べ方は先、小刀で此凍つた蒸菓子を切つて行く。是等の蒸菓子は旅客に出したり、又は特別な旅行の際に是を携へて行く。

草の實は夏及び秋に摘み取る。ツンヅラ地帯に生ずるホロム莓ホロム (*Cloud-berry*) 即ち *Rubus chamaemorus* は海岸居住コリヤークよりも馴鹿使用コリヤークの方に採る方が採取するのに便利が多い。それで多く是を採つて喰べる。けれども彼等は是を一切貯藏しない、採れば其場で直ちに喰べて仕舞ふ。

他の食用植物は野生の薔薇 (*Rosa alpina* Pall.)・山秦皮 (*Alaria esculanta*)・海ぶやん

シ (Sea colowor)・Sedarunt それから楊ヤナギの皮の様なものである。山藜ヤマナギ皮はコリヤークは Me'ngomei と稱し海岸居住のコリヤークの方では是を喰べないが、馴鹿使用コリヤークは夏に於いて海岸に狩りに行つた時に、是を採つて喰べる。其喰べ方は先、小刀子で是を切り、海豹や馴鹿の血、馴鹿の肉を是に混ぜて調理する。Sedaruntは秋に遅く採つて小さな皮袋の中に入れて貯めてゐる。彼等の是等の食物の喰べ方に就いて奇妙なる風習は、nut は其殻と共に食する、是等も餘程面白い風習である、決して殻を捨てない。楊ヤナギの皮も亦外部と共に食する。此楊の皮は樹から剥ぎ取つて来て石槌で打碎き、魚と共に調理する。そして是を生なまの儘で嚼かむ。

馴鹿コリヤークに向、植物性食物として附け加へなければならぬのは馴鹿の胃の中に貯はへてゐる馴鹿苔トウモロコシを喰べる事である。胃の中から採る馴鹿苔は未だ充分に苔が消化しないのを採るのであつて、是は未だ緑色の苔の儘に残つてゐて、人間が喰べるに大變に軟かく成つてゐる。是を取出して馴鹿

の脂で煮て喰べる。昔は是を盛んに喰べたものである。けれども今は段々此風習が減少しつゝある、富者の如きはそれを捨て、顧みない。けれども下等の者は食物に不足を生じた時には是を喰べてゐる。

冬期には草の實、根、其他の貯へた食物が、もう段々と喰べ盡されて、多く残つてゐない、其冬の半ば頃、漸やく植物性食物が僅かに残つてゐて、これが春に成つて動物性食物が殆んど彼等の内に行き渡つた時に、僅か残つた植物性食物を喰ひ盡す様に成つてゐる。彼等の食物に就いて天然はよく是に配劑してゐると云つて宜い。麥粉と米とは特にロシアの商人から之を買つて喰べてゐる。帝政時代には是等の穀物はギシガの役所の倉庫には多く貯藏せられてゐたものである。是をロシアの商人が買ひ入れて、コリヤークの方に此時の時價を以て賣つたのである。コリヤークは是等の穀物を大變に好む、其内でも米が最も彼等の好む所であつて、これを海獸の脂と馴鹿の脂肪とを混ぜて、粥として食する。次に小麥が大變に好まれる。これに水と血とを混ぜて

粥として喰べる。小麦は好むけれどもRyeの麦は好まない。

飲み物として近頃茶を大變に用ひる。此茶は所謂磚茶である。

コリヤークは酒の類は元來持つてゐない。であるから酒と未開人との關係に於いて、コリヤークは餘程の原始の状態にあるものと云はなければならぬ。然らば彼等には絶対に麻酔劑の種類が存在しないかと云ふに、是は一種微妙な作用によつて麻酔劑を攝つてゐる。斯くの如き事實は未開人の土俗を研究する上に於いて餘程参考となるものである。

コリヤークは麻酔劑として毒物なる平茸の一種、Fly-agaticを食ふ。是はカムチャダールよりも多く用ひる。けれども彼等は毒のある平茸の生の物は喰べない、乾したものを喰べるが、先、毒のある所を捨て、さうして喰べる。麻酔を攝る菌類の内、人を殺す様な劇しい毒を有する菌類(Fungus)は彼等に從ふに三種類あると云つてゐる。今記したFly-agaticは採集せられた後、太陽か又は圍爐裡の火で乾かし乾燥さす。乾燥した物を食する。けれども是を食べ

るのは専ら男子のみであつて、女子は決して喰べない。(クラセニンニコフ氏に據るにカムチャダールは是を喰べないと云ふ事を書いてゐる。又、ドイツトマル氏はコリヤークのシャーマンの巫女が是を喰べてゐるのを見たと言つてゐる。) 倭、此毒物の菌類を喰べる方法は一樣ではない。ペンシナ半島の或村落では男子は是を食する前に先に女子をしてこれを試みに一寸是を嚙ます、然る後男子は是を呑み込む。ボゴラス氏に據るにチュクチでは是を食する際には先、菌を小さく裂き、是を呑み込む。直ちに水を飲む。Shurin氏によると是等と等しい仕方がコリヤークにあると記された。ドイツトマル氏はコリヤークとチュクチとのFly-agaticに就いて云ふには、彼等はそれを細かく裂き、直ぐに呑み込まないで永い間、口中に含んでゐると云ふ。クラセニンニコフ氏はカムチャダールでは乾いた齒で管の如く丸め、口中で轉がし、喰まないで直ぐに呑み込み、更に其後で楊草の煮た汁を飲み込み、更に丁幾劑を飲むと云ふ。

阿片・Hashesh・Fly-agaric・の阿爾加魯乙里の様な植物性の毒物は、酔・幻覺・妄想・精神錯亂等を起すに最も宜いものである。彼等は是等のものの刺戟物を用ひてゐる。其内でも、酔ふと云ふ現はれの形式は、興奮や運動の自發性の或者を示す。そこでコリヤークのシャーマン巫人は祈禱の前に是を飲む事に成つてゐる。かくせば酔から幻覺・妄想に移り、遂に精神錯亂に到るのである。シャーマンの巫女が是等を用ひると云ふ事は神懸りに於いて必要なものと成つてゐる。シャーマンの神懸りに於いて所謂通常の人以外に威力を示す形式は、元斯かる植物性の菌類より得たる變化を表はしたるものとして注意すべきものである。

今日はロシア人やアメリカの鯨取り等からブランデーを入れられた。従つて彼等は是を用ひる事に成つてゐる。コリヤークは是を得るがため、北極狐・赤狐と交易をしてゐる。斯う云ふ状態から見ると酒と云ふ様なものは未開人に無い事が解る。けれども麻酔なり、其他の或變態心理の現象を現はす

方法に於いては未開人に於いて菌類を非常に役立てゝゐると云ふ事は面白い現象である。クラセニンニコフ氏によるにカムチャダールは、あまくさ(Heracleum sphandilium)から酒を搾り、持つてゐるのを見たこと云ふ事を書いてゐる。さうして見るとカムチャツカ半島からベーリング海峡に居る民衆に於いて、カムチャダールなどは酒製造の起原を成してゐると云つてよい。

食事

コリヤークは食事を寧ろ規則的に行つてゐる。シベリア民族のうちでもヤクトは大食家で無暗に食物を食はる癖がある。コリヤークは多少これに似た所がある。彼等の食事は都合三回で、即ち晝は二回、夜は一回である。前者は太陽の上つた時と太陽の没した時、後者は寢に就く前である。若しも彼等に食物が澤山にあつた場合には晝は三回とする事がある。其時には日中に食事を攝る事に成つてゐる。馴鹿使用コリヤークは朝夕二回で主として馴鹿の肉を喰べる。海岸居住コリヤークは朝は乾魚を食し、後に海豹の肉

を喰べる。若しも他の食物があつた時には夕方に海豹の肉を喰べる。一般に海獣の肉の使用は夕食にする事が普通である。寝る前に食事をする風は北方シベリア民族の間に一般に行はれる風習である。

一家の人員が七人、又は八人位から出来てゐるならば、其一家族の喰べる馴鹿は丁度、一匹で三日間の食料にあて、喰べる。一ヶ月なれば十匹、九ヶ月なれば九十匹である、此馴鹿と人員との關係は未開人が狩獵をした場合に於いては鹿などを食料にあてる時の計算として参考となるものご考へる。ヨヘルソン氏が馴鹿使用コリヤークの或地方に夏期を過した時に、彼等の其馴鹿の肉の喰べ方を見ると其際は生育した馴鹿を喰べず、専ら魚を以て食物にあてた。尙、それに加へるに、^{コリス}積病に斃れた鹿^{アイア}草の實、食用根草等を以てした。これで見ても馴鹿を大切に飼養してゐる事は充分に解る。専ら其の繁殖力を努めてゐると云ふ事も解る。馴鹿使用コリヤークの總人員三千七百四十八人を、家族の六に於いて割つて見るに約六百二十四組の家族を得る。此の六

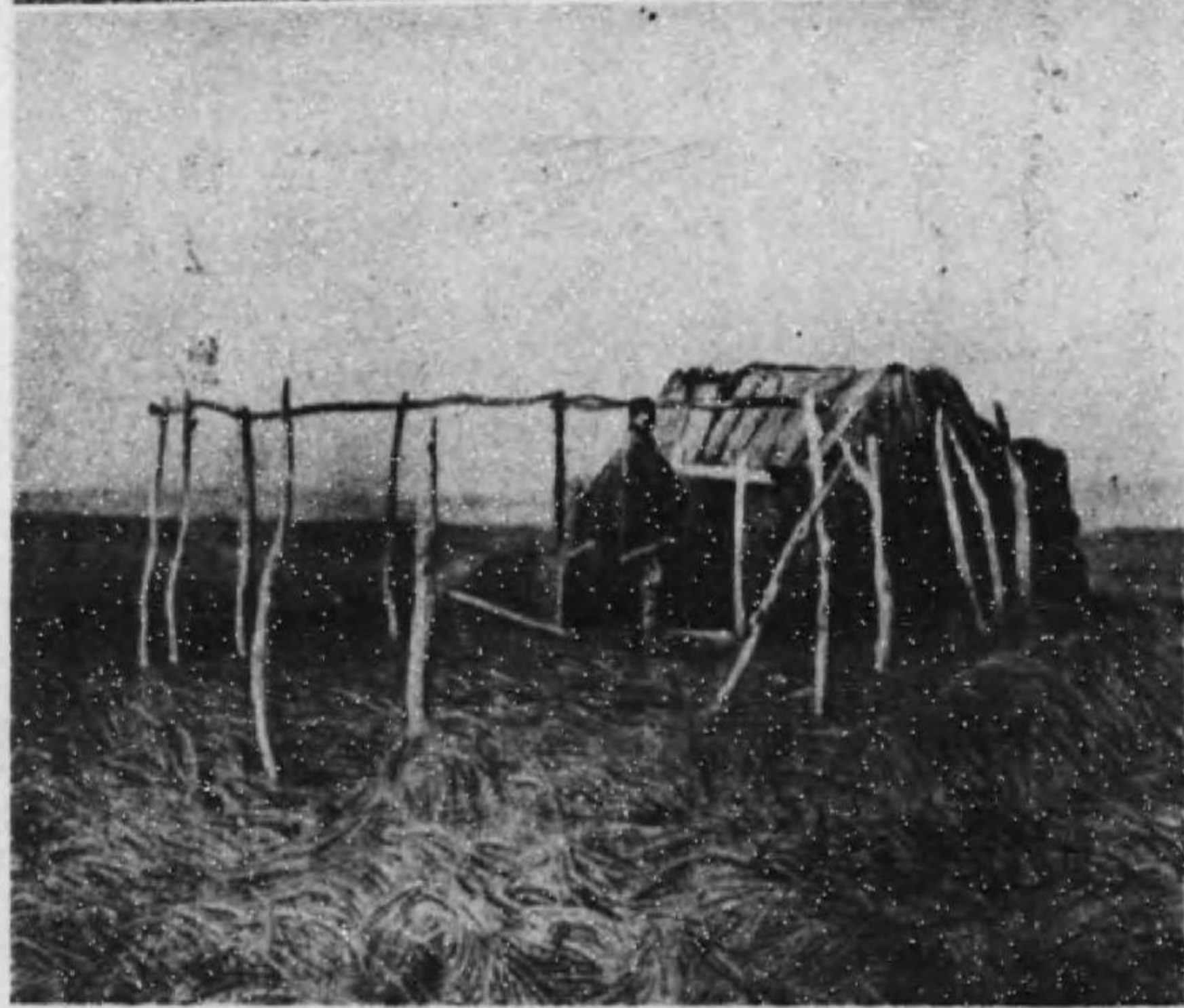
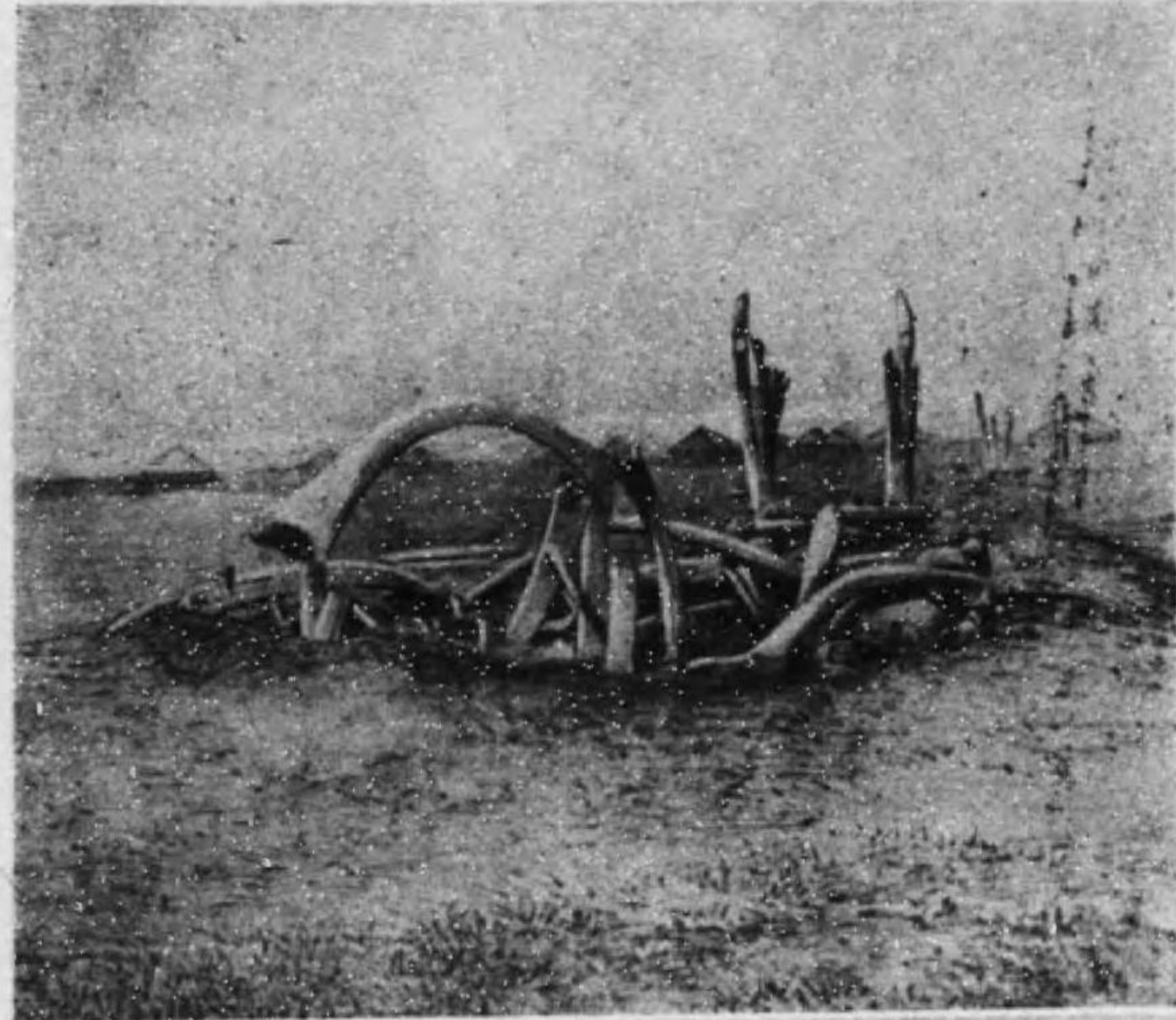
百二十四の家族が九ヶ月間に生活するには、大約五萬六千匹の成長した馴鹿を要する譯である。千八百九十九年に三萬二千五百六十六匹の馴鹿の皮が輸出せられたけれども、其皮の類のうちには半ば以上は、生れて一ヶ月の積^{コリス}の皮が混ざつてゐる。これで見ると馴鹿の皮即ち屠殺した馴鹿数が少ない様に見えるけれども、其不足してゐる馴鹿の皮は、彼等自身の衣服の原料、天幕の材料に使用したのもあらうし、尙、海岸コリヤークやロシア人と貿易したのもある。若しも是等を計算の數に入れたならば、馴鹿を屠殺したる數と、よく合ふのである。なほ馴鹿の皮の小數はアナディール地方からギシガを通じ、て輸出したのもあり、カムチャダールによつて Tigil やベトロバウルスク地方に運ばれた物もあり、且、カムチャツカに於いてカムチャダールやロシア人の衣服として使用せられたものもある。是等も計算のうちに入れなければならぬ。

ユカギールは冬の最初に於いて魚類を大變に贅澤に用ひる。ヤクトが此所に訪づれて來た時にも大變な御馳走をする。彼等は斯くの如く魚類を無暗に使用するから春に成ると其食物は缺乏してくる。遂には飢餓に迫る事がある。彼等は即ち其魚類を不節制に使用してゐるのである。斯う云ふ例は尙、ツングースにもあるのであつて、ツングースの食物の喰べ方なども前後を考へずして多量に食べ盡して仕舞ふ。例へば此所に馴鹿があるとしても一匹位屠殺する事は少しも惜まない。けれども馴鹿を家畜として持つてゐる馴鹿コリヤークの富める家では一匹の馴鹿と雖も容易に殺さない。彼等は動物の肉が喰べ度い、けれども堪へ忍んでゐる、所謂禁欲してゐるのである。此禁欲の結果は自然的に家畜を益々増加して行く。

海岸居住コリヤークは非常な經濟的生活をする事に妙を得てゐる。倉庫には、澤山の魚類を貯へてゐる、けれども段々と用ひてゐる内に自然と缺乏して來る。其場合には、よしんば訪問客があつても其魚類を隠す風がある。斯

う云ふ事は彼等の貯蓄心に富んでゐる事を示すものである。彼等の食物は犬鮭 (*Salmo socialis*) であるが不漁の時がある。さう云ふ時に困らない様に豫備として此魚を貯へて置く。

海岸居住コリヤーク地方では魚類や海獣の大漁のある事もあるが、全く是等の取れない時、即ち所謂飢饉の場合もある。古老の談によると、ベンシナ灣では、古くから殆んど七十回程の大飢饉があつたと云ふ。けれども、其時日は何時日であつたか、それは解らない。是等の飢饉とは何んなものであつて且、その起る原因は何に由るか云ふに、それは一年の夏中に殆んど河に魚がのぼつて來ない事がある。其時に於いては、唯に魚が見えないのみならず、其關係として海獣も亦、海岸に近づかない。是に於いてか夏に於いて食物を得る事が出來ないから、冬の食物の用意が急務と成る。さうすると春に成つて食物がなくなり實際の飢饉となる、それに加へて雪が溶け始めて河水が増加してコリヤークとロシア人との間の交通を途絶する。斯う云ふ結果は飢饉



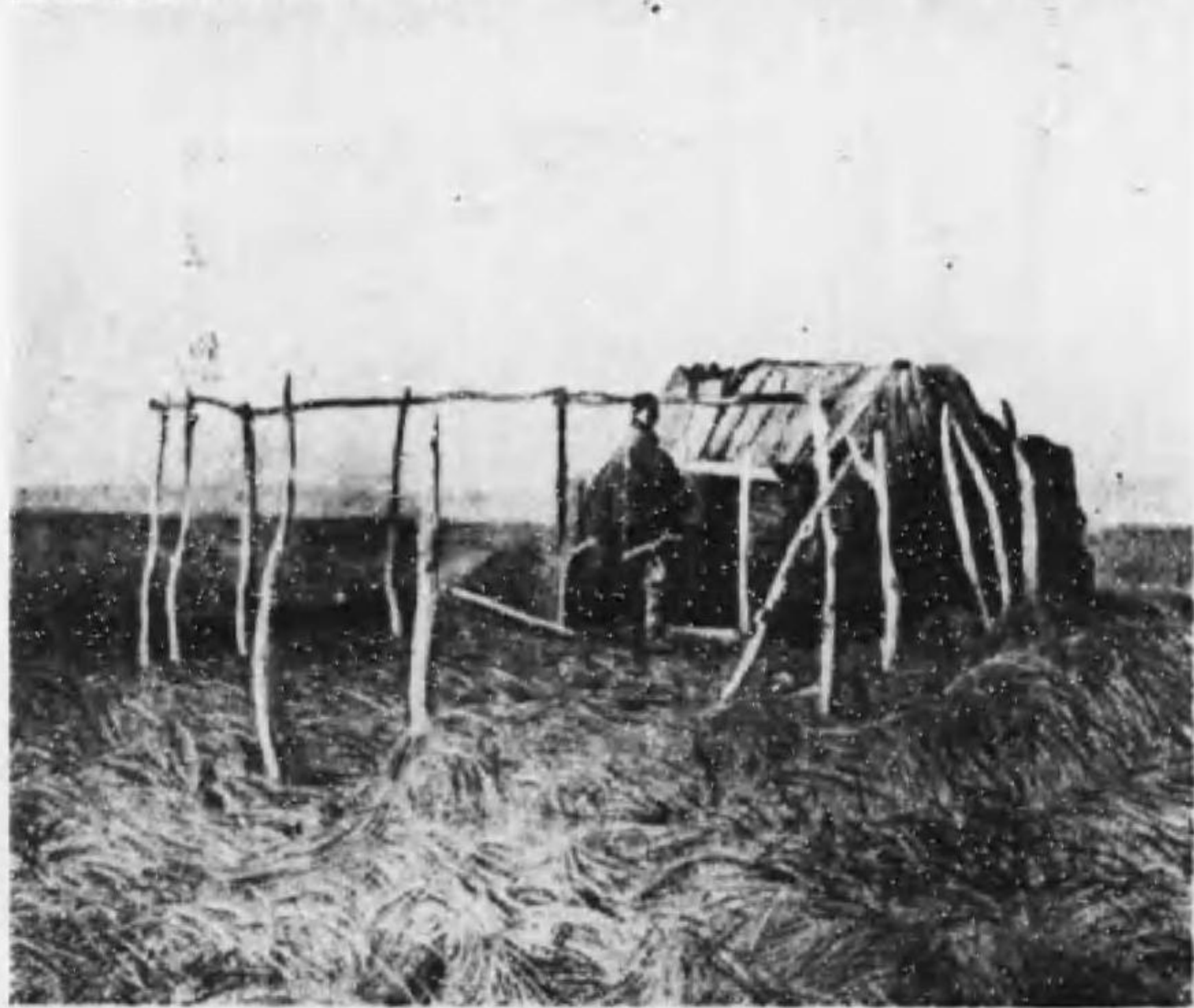
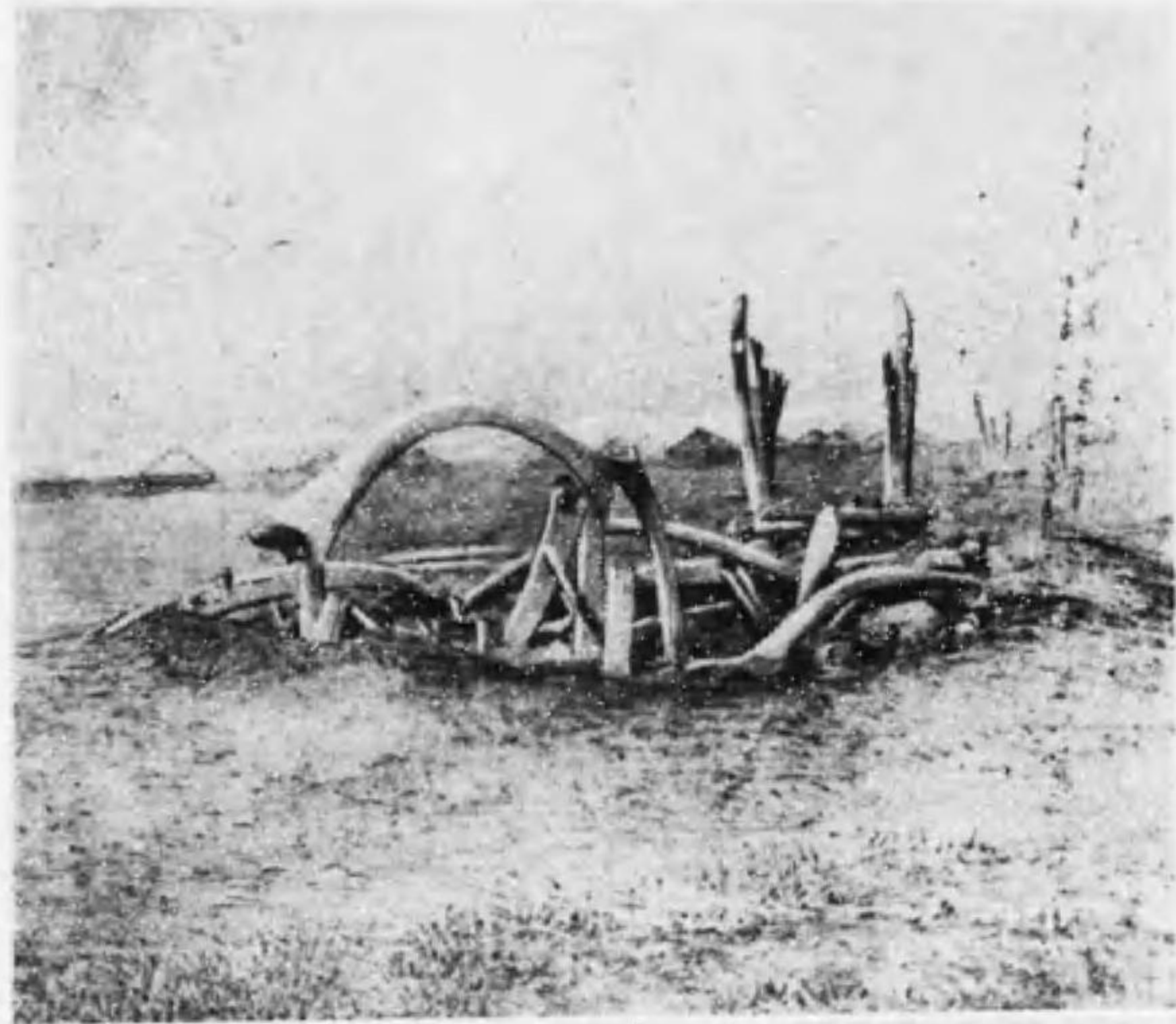
跡遺の「家骨類」るあに落村クッサニウ (上)
 舎小のチクェチ方地岸海 (下)
 (るよに氏スラゴゴ)

を惹き起すのである。飢饉の結果として Ikana 村や、Paren の地方の民衆の殆ど半が餓死した事がある。

以上は海岸居住コリヤークの例であるが然らば馴鹿使用コリヤークは如何と云ふに、彼等には殆んど飢饉の心配はない。これは何故であるかと云ふに、彼等は常に家畜を持つてゐて、これを繁殖してゐるからである。これが爲めに富有者は飢饉の心配はない、更に貧者でも富者の附近に住み、これに雇はれ、使はれてゐるから食物の不足はない。けれども、こゝに馴鹿使用コリヤークに一番困るのは疫病の流行して家畜を襲ひ來る事である、そして其結果として家畜が段々と減つて行く、けれども彼等は譬へ疫病で病死した肉でも平氣で喰べるから飢饉の憂ひは極めて尠い。

その(10)

馴鹿使用コリヤークの住まふ場所は Yayini 又は Ly'geyan 云々。これは



跡遺の「家骨類」るあに落村クッサニウ(上)
 舎小のチクェチ方地岸海(下)
 (るよに氏スラゴボ)

を惹き起すのである。飢饉の結果として Itkana 村や、Paren の地方の民衆の殆ど半が餓死した事がある。

以上は海岸居住コリヤークの例であるが然らば馴鹿使用コリヤークは如何と云ふに、彼等には殆ど飢饉の心配はない。これは何故であるかと云ふに、彼等は常に家畜を持つてゐて、これを繁殖してゐるからである。これが爲めに富有者は飢饉の心配はない、更に貧者でも富者の附近に住み、これに雇はれ、使はれてゐるから食物の不足はない。けれども、こゝに馴鹿使用コリヤークに一番困るのは疫病の流行して家畜を襲ひ來る事である、そして其結果として家畜が段々と減つて行く、けれども彼等は譬へ疫病で病死した肉でも平気で喰べるから飢饉の憂ひは極めて尠い。

その(一〇)

馴鹿使用コリヤークの住まふ場所は Yayah 又は Ly'geyan と云ふ。これは

土着の家と云ふ意味である。此名稱は海岸居住コリヤークにも用ひられてゐる。コリヤークの家屋は馴鹿使用者と海岸居住者との間に於いて相違してゐる。馴鹿使用者の方は天幕に住まひ海岸居住者の方は堅穴に住まつてゐる。是は同一民族であつても其住居の様式に於いては互に違つてゐるのであつて注意を要する。海岸居住者は馴鹿使用者の天幕式家屋を稱して *Ca'ucwyany* と呼ぶ。是は馴鹿使用者の家と云ふ意味である。これと反對に馴鹿使用者は海岸居住者の家を *Waike* と云ふ。此意味は鯨の家の顎骨と云ふ意味である。此意味は最も興味あるものであつて即ち是等から考へれば古代の海岸居住コリヤークの家は骨組を鯨の骨でもつて作られた、それで堅穴に住まつてゐた事が解る。斯くの如き堅穴は尙、エスキモーの中に見る事が出来る。ヨヘルソン氏はギンガ灣にある古代コリヤークの堅穴の跡を發掘調査せられたが、堅穴の中には鯨の骨組の材料がある、其肋骨や顎の骨等は發見しなかつたが、堅穴の周囲には鯨の骨の散亂してゐるのを認められた相である。

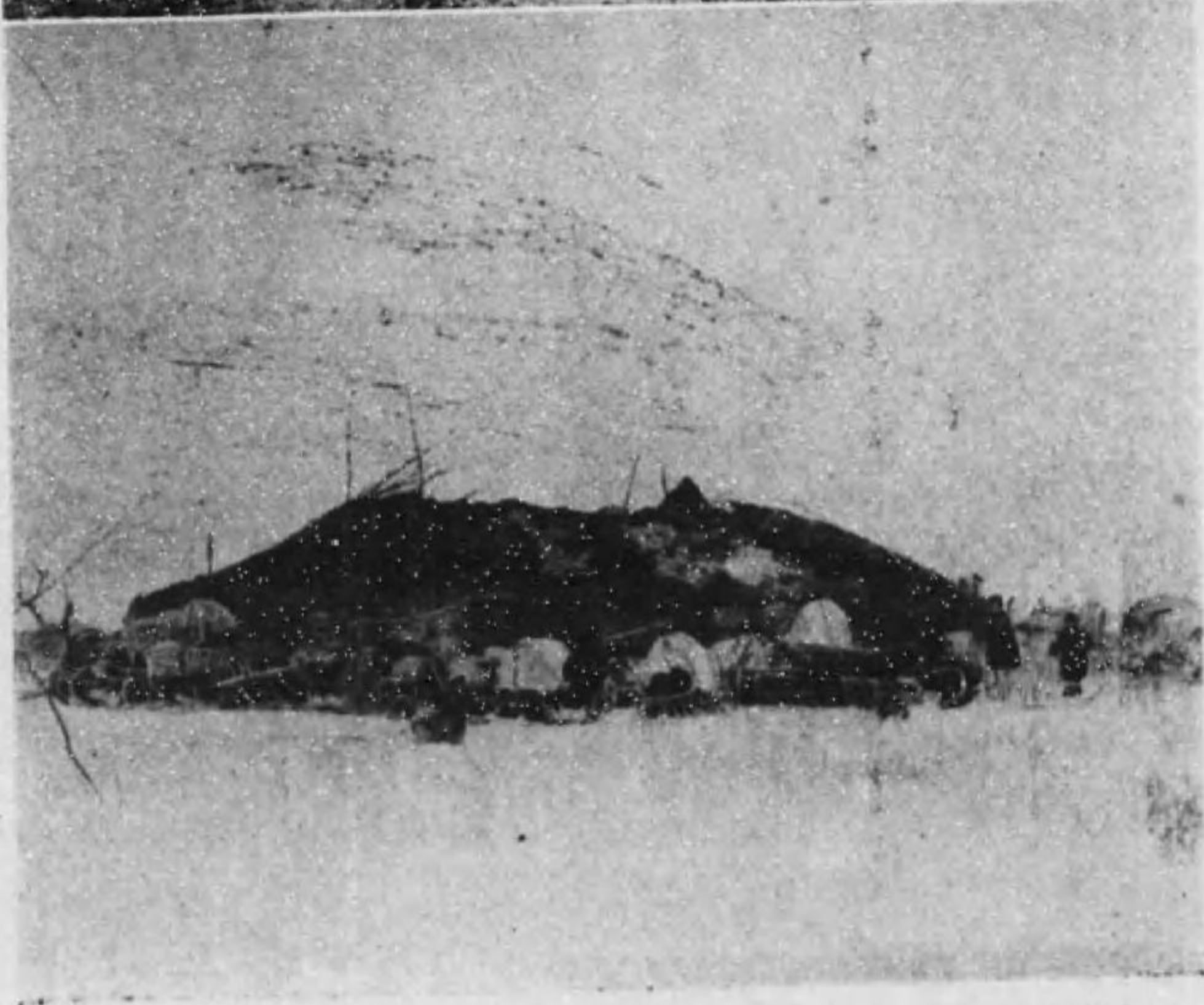
堅穴の遺跡として鯨の骨から作られた骨組の在るのは、ウランゲル氏やノルデンスキョルド氏等によつて北氷洋の海岸地方に発見せられた。ボゴラス氏は斯かる遺跡をペーリング海峡の海岸居住チユクチやアジアエスキモ等の村落で発見せられた。是等の遺跡を稱してその土人は *Yalika* と呼ぶ。此言葉は顎の骨の家と云ふ事である。

馴鹿使用コリヤークの家屋

馴鹿使用コリヤークの家は天幕から成つてゐる。その天幕は都合二つの部分から成つてゐる。即ち外部天幕と内部睡眠用天幕とが是である。外部天幕の骨組は彼の蒙古人や土耳其人の運搬し易いタイプのものである。これは彼の家畜と共に漂泊するキルギスやカルマーク等の如き天幕も此のタイプである。是等の民族の天幕の覆ひは毛氈であつて、是を骨組の上に被せてゐる。斯かる天幕は猶、馴鹿使用ツングースが、其天幕に樺の皮、或は馴鹿の皮を以て覆ふてゐるのと同じものである。

外部天幕のタイプは都合二つの部分から成つてゐて、即ち上部・下部である。上部は天幕に成つてゐる部分であつて、其形は圓錐形、下部は裾の部分であつて圓筒状を呈してゐる。そして其上から馴鹿の皮を覆ふてゐる、其馴鹿の皮はキルギスの毛氈の家 (*Kilikka*) やツングースの皮、或は樺皮の皮のそれよりも無細工で重い。さうしてコリヤークの外部天幕の下部は以上の諸民族の規則的に成つてゐる現今に行はれる様な風には作られてゐない。さりとして馴鹿使用チユクチよりも多少均整體であるが、是と似てゐる所がある。

彼等の外部の天幕 (*Yalika*) の骨組は先、基礎の柱 (*Yelka*) から成る三脚臺の様になし、其頂上の所で太い紐で結んでゐる。杭の高さは三メートル五から五メートルまでである。三脚臺の周囲は一メートルから二メートルの距離で一メートル三から一メートル五位の楔を以て頑丈な杭が差し交はされてゐる。そして此杭の上端に孔があつて、其孔のなかに差し通した紐で縛つてゐる。是等の孔は頂上に平行した横木の端が結ばれてゐる。これを *Yelka* と呼ぶ。



トントのクーヤリコ用使鹿馴 (上)
トント大るれらゐ用に者富同 (下)
(るよに氏ソルヘヨ)

天幕の構造は丈夫で風に堪へる様に出来てゐる。

彼等の外部の天幕の覆ひは馴鹿の皮から成つてゐるが、内部の天幕に用ひられる覆ひは等しく馴鹿の皮であるけれども是は壞れて破れてゐるものを用ひてゐる。外部の天幕の覆ひは上手に骨組の上につき覆はれてゐるが風が吹くと下の部分が動いて捲き上げられる様な事がある。そこでそれを防ぐが爲めに覆ひの裾の所に大きな石包ツツのなかに重いものを入れて置く、又橋などを其上に置いてゐる。

コリヤークの外部天幕はチュクチのそれよりも広い。幾組かの家族は此一つの天幕の内に住まつてゐる。寢室用の天幕は入口の所を除けば殆んど天幕の周囲の何所いづこにも是が設けられてゐる。チュクチは一般に入口の反対の所に唯一つの寢室天幕を持つてゐるのみである。そして關係のない家族は同一天幕の中に住んでゐない。

コリヤークの大きな天幕は直径八メートルから九メートル位である。圍



トントのクーヤリコ用使鹿馴 (上)
トント大るれらる用に者富同 (下)
(るよに氏ソルヘヨ)

天幕の構造は丈夫で風に堪へる様に出来てゐる。

彼等の外部の天幕の覆ひは馴鹿の皮から成つてゐるが、内部の天幕に用ひられる覆ひは等しく馴鹿の皮であるけれども是は壞れて破れてゐるものを用ひてゐる。外部の天幕の覆ひは上手に骨組の上につき覆はれてゐるが風が吹くと下の部分が動いて捲き上げられる様な事がある。そこでそれを防ぐが爲めに覆ひの裾の所に大きな石包つみのなかに重いものを入れて置く、又縄などを其上に置いてゐる。

コリヤークの外部天幕はチュクチのそれよりも広い。幾組かの家族は此一つの天幕の内に住まつてゐる。寢室用の天幕は入口の所を除けば殆んど天幕の周囲の何所いづこにも是が設けられてゐる。チュクチは一般に入口の反対の所に唯一つの寢室天幕を持つてゐるのみである。そして關係のない家族は同一天幕の中に住んでゐない。

コリヤークの大きな天幕は直径八メートルから九メートル位である。 圖

爐裡はツングースの様に天幕の中央に設けられてゐない。けれども入口の後部に在る寢室用天幕の後の壁から中央の所に是を設けてゐる。煙出しは入口の側そばの屋根の所に通ずる事に成つてゐる。其背後は杭の頂上の所で覆はれてゐる。

アジア式の運搬し易い天幕のタイプは其の内部天幕は唯寢室用天幕としてゐることにある。コリヤークとチュクチは特別冬期に於いて仕事部屋として使用する内部天幕(Yaya'ni)は恰も長方形の箱を逆さまとした形である。此馴鹿の皮は斃れた馴鹿の皮を用ひてゐてそれに美しい裝飾を施してゐる。されど彼等の内部天幕はコリマ河畔居住馴鹿使用チュクチの富んだ人々の用ひる様な大きなものは見えない。チュクチの是等の天幕は非常に大きくて自由に内部で立つ事も出来るし愉快である。コリヤークの内部天幕の高さは一メートル三から一メートル五で長さは二メートルから四メートル。巾は一メートル三から二メートル位である。寢室の床下は楊の枝を撒き散

らして其上に馴鹿の皮を掛けてゐる。夕暮になると内部の天幕は全く閉ざされ、此なかにランプが置いてあるが、是に火を點じて、明くし、こゝで茶を飲んだり夕食を喰べたりしてゐる。冬と夏の天幕との相違は唯、其骨組の上に覆はれてゐる所の覆ひ物の軽い重いに關係する。冬に成ると重い皮を用ひる、夏の内部天幕の覆ひは毛の撚りくさしの古い皮を用ひる。けれどもタイゴノス半島の彼等の或者はコリヤークと同じ様な美しく飾つた皮で作つてゐる。コリヤークの内部寢室の天幕はアジアの漂泊民族とエスキモアの雪の家との中間にあるものである。即ち内部天幕の内には火を點じて明るくなつてゐる。又、幾分か馴鹿の脂肪の油のランプを用ひてゐるから温かい氣がする。此ランプで暖を取る風習の如きはエスキモアの家のなかにある脂肪の脂ランプと同じである。圍爐裡は全く外部天幕のなかに設けられる、こゝで煮焚きをするのである。

彼等の特別の場合、例へば商買貿易をするとか、お祭りをするとか云ふ場合

には多人數の人が多く集まつてくる。其時には野營(Yankin)が設けられる。この野營と云ふのは公衆の意味がある。これは三ヶ所以上に張られる事があること云つてゐる。野營は北氷洋の漂泊人の様に何時も絶えず移住するのではない。一年中に四回許り是を移轉してゐる。即ち冬は十月に河のほとりに天幕を張る。そこは背後は高い崖に成つてゐて其天幕の周圍はボブラヤ、はこ楊が茂つてゐる。春は三月の終り小鹿の産れる時期の前、彼等は河の下流地方の打開いたツンヅラ地帯に下つて来る。此場所は苔を以て覆はれてゐる。夏に成ると七月に河の上流の山頂に近い所に登つて行く。鹿の仔の産れる時期に成ればお祭りが各所で催されるが其際に下つて来る事に成つてゐる。此下つて来る季節に成ると彼等は分水嶺の高い所に在るツンヅラや河筋から所嫌はずに下つて来るのである。

其他に彼等が特別なる場合に移動する事がある。それは家畜が牧草を喰べ盡した時とか、流行病が行はれた時とか或は馴鹿の一種の病氣が流行して、

斃れたりした時とか又は貿易の都合上とかの場合である。

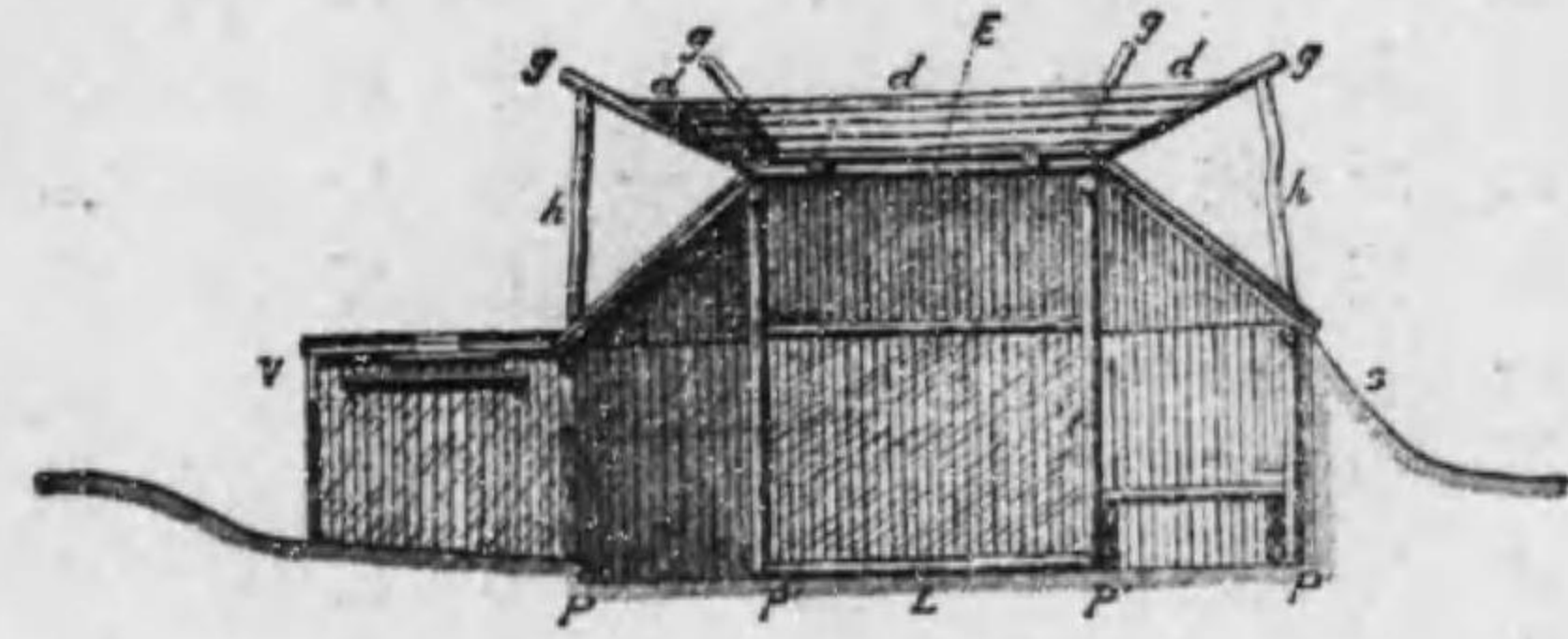
彼等の説話によると古代には近隣の敵が攻めて來ると云ふ事を知つた時には其前に一同を引き連れて移住したさうである。又、ロシア人と戦争をした時には、良い位置に住して櫓を以て周圍を牆かきとし、其中に於いて戦つた。又、馴鹿も其中に隠して置いた。此防禦する場所を堡塞的野營と云ふ。

海岸居住コリヤークの家屋

馴鹿使用コリヤークの天幕の如く海岸居住コリヤークの居住はこれを Lig'e-yan (土着の家)又は、Yaya'n. と呼ぶ。これは堅穴である。即ち海岸居住コリヤークの居住は天幕張りでなくして堅穴を家屋としてゐる。けれども此堅穴は半堅穴であつて、純粹の堅穴から比較すると聊か進歩してゐる。けれども此家は比較的永久の家であつて、彼の馴鹿使用コリヤークが天幕張りで常に移動するのとは餘程性質が違つてゐる。彼等の堅穴を設ける場所は河の岸であつてその左右及び背後は樹が茂つてゐる、そして堅穴の柱棟木其他の木

材は専らボブラ或ははこ楊等から成つてゐる。

家は其住まふ人數によつて大いさが相違してゐる、小さい家は五人から八人位の家族である。古代の彼等の堅穴は如何と云ふにギシガ灣に遺つてゐる、其遺跡に就いて見るに堅穴の跡は今日のそれよりも餘程廣い。家族は時として稀に分離してゐるが、多くの場合には其一族關係者は共に中に住まつてゐる。今日、一軒の家の人數の平均は六人から十三人位である。ペンシナ灣の海岸に存在する百十一軒の家に就いて茲に云へば其一軒のパーレンから移住して來た家を調べて見ると其家には二十一人の人數がある。これは都合二家族から成つてゐるのである。古代の説話によると昔の家は四十人以上の人數が住まつてゐたと云ふ。僻遠に居る Kerck のうちには猶、一軒に二十五人の人が住まつてゐる、これは餘程古い風俗であると云つて宜しい。Mikino の家は長さ一五メートル幅が一二メートルに高さ七メートルから成る堅穴であるが(入口を除いて)その中に十五人の家族が住まつてゐる。



屋家式穴堅のクーヤリコ住居岸海
(るよに氏ソルヘヨ)

堅穴を作るには先深さ一メートルから二メートル位の圓い穴が掘られ、更に其周囲の土を八角形に削つて壁とする。圖に就いて云へばAの側はBよりも大きく、Cの側はBの半分の長さである。これに八本の柱(P)が八隅に建てられた。さうして是等の柱の外に又、頂上の所に刻みを付け、これに梁が挿込まれてゐる。家の内の中央の所に又、四本の柱(P)が建てられ、こゝは大きな家では互ひの柱の間の距離が三〇センチメートルに餘つてゐる。高さは五メートルから七メートル

位ある。是等の柱の頂上には各々二つの梁が置かれ、これを結び合はしてゐる。此梁は四角形に成つてゐて、屋根板が形成され、この上に屋根が出来てゐる。板の間の間隙は枯草や土を以て満たされてゐる。家の頂上の中央には真四角な煙突が開いてゐる。これは吹雪などの集つて雪の堆積するのを防ぐ爲である。これを、Tivoliと云ふ。此穴に梯子が懸けられ、こゝから室内に這入る事に成つてゐる。

馴鹿使用コリヤークの天幕の入口は太陽の上る方向に對つて口が開かれてゐるが、海岸居住コリヤークは上から這入る様に成つてゐるから、外から這入つてくる入口は上に向つてゐる譯であるが、其梯子から降りて下る方の向き方は海上の方に面してゐる。

梯子は夏に成ると置き換へられる。其際は來る秋まで用ひず、壁近くに置く。秋に成つて新たに是を懸ける場合には梯子に脂肪を塗る。此風習は家の内に悪靈が這入つて來ない様にチャムするのである。彼等の云ふ所によ

ると此梯子は家族の守護神の一と見てゐる。それで梯子の先は人の顔が彫られてゐる。そして其顔の部分は丁度竪穴の頂上より上の方に一メートル三程出てゐる。圍爐裡は二個の長方形の石を立て、室内の稍中心より入口に向つた所に設けてゐる。

海岸居住コリヤークの竪穴を馴鹿使用コリヤークの天幕と比較すると、其前者の家屋は後者の家屋よりも最も古い家屋の型式である。そして後者はアジアの極東北に居住して馴鹿と共に水草を追つてゐる民衆の極北式居住のタイプである。

馴鹿使用コリヤークの天幕がアジア式漂泊人の住家のタイプの後に用いられたとするなれば古アジア Palae Asiatic American の漂泊人居住のタイプを示してゐる事に成る。けれども吾人は斯く考へる事は出来ない。何となれば Turkish-Mongolian 種族の住家のうちに斯くの如きものを發見する事は出来ない。凡ての古アジア民族は昔でも今日でもコリヤークの如き竪穴を用ひる

のである。古代のカムチャダールの住家はステルレル氏によれば、今日の海岸居住コリヤークのそれと聊か相違してゐる。其相違は高い入口の頂上に洋傘式の屋根のある事、入口の室のある事、梯子に孔をあけず切目を附けてゐる事がそれである。Kerekの木材の缺乏上洋傘式の屋根を持たない。尙、コリヤークの内でも Tiqun 河畔の彼等は漏斗形の屋根を持つてゐない。此所は森林のうちで風の當らぬ所に存在してゐるのである。コリヤークの説話によると悪神 (Kalan) の家は其入口は屋根を持たないと云つてゐる。かくの如き奇しき建設物は此種の家屋としては存在しない。唯、コリヤークの家屋に於いて見るのみである。

カムチャダールは單に冬の家屋として用ひる竪穴は入口の室を持たない。けれどもコリヤークでは次の室に通ずる入口の室は冬に成ると閉ざれて仕舞ふ。カムチャダールの住家は竪穴の通路は圍爐裡の外に在るが是は恰もコリヤークの次の室に相當するのである。冬に於いてカムチャダールは床

の柱を建て、上に臺を据え其上に圓錐形の小舎を設けて、そこに住んでゐる。コリヤークはこれとよく似た倉庫を持つてゐる。

Strenberg 氏によるとギリヤークは黒龍江畔に住まつてゐる者に限つて冬には滿洲式の家屋に住まつてゐるが、他の場所に住まつてゐる彼等はシユレソク氏によるとコリヤークの様な半地下室の家に住まつてゐる。ギリヤークの家屋の屋根の煙突の孔は彼のコリヤークや昔のカムチャダールの様に上の方から入口として這入つて來ると云ふ様な事をしてゐない。であるから従つて梯子も持たない。然るにストレンベルグ氏によると昔は此煙突の入口はギリヤークもカムチャダールやコリヤークに於けるが如く入口として用ひてゐたと云つてゐる。これは今日でも場合によると此入口は戸として用ひられてゐる。例へば彼等の行ふ熊祭りに殺した熊の皮と肉とを恰も煙突式入口を通過する目的で上の方から家のうちにこれを引込む風習がある。又、祭りが済むと其儀式に使用した凡ての附屬物——例へば熊の骨の如

き右の入口から家の外まへに運ぶ様に成つてゐる。ギリヤークは今日、戸の方に傾斜してゐる通路から家に這入つて行く、これはコリヤークの所謂入口の室と同じものである。戸は一番風を防ぐ方に面してゐる。家の床は通路よりも低い。圍爐裡は屋根の開いてゐる下方の中央に設けられてゐる。

堅穴の風習は尙、アイヌにも行はれ彼等はこれに住まつてゐる、これは現に北千島アイヌがそれである。のみならずカラフトのアイヌも尙、此風習を傳へてゐる。

以上は現今の土俗としての堅穴であるが、僭斯くの如き堅穴は遺跡としては各地に存在してゐる。例へば北海道千島カラフトは申すまでもなくコリヤークの土地に於いて是を見る事が出来る、古代堅穴の跡はギンガ灣の海岸及び島嶼に存在してゐる、尙、オホーツクの海岸、Yamsk村等にも存在する。更に尙極南地方にも存在してゐるらしい。尙黒龍江の下流にも古代堅穴の遺跡が遺つてゐる、ユカギールも昔は堅穴に住まつてゐたのであつて是等は彼

のバラス・ウランゲル・ミウレル諸氏によつてよく研究されてゐる所である。チュクチも海岸居住の彼等は馴鹿の皮で家を作る。けれども北氷洋海岸に於いては、Eri 岬(即ち Shelagski) からベーリング海峡まで、ベーリングの海岸のチュクチやイーストケープの南(Chukotsky)では堅穴の遺跡が発見せられる。是等の地方に在る堅穴には鯨の骨から成る骨組が出来てゐるので其骨が存在してゐる。これは木材が得られない爲である。是等の遺跡に就いてウランゲル氏はこれをチュクチに聞かれたが、彼等は一樣に前に居た Onkilon の手に成つたものであると云つてゐる。此オンキロンと云ふ者は今日北氷洋のアジア海岸に居るエスキモーで、それが遺したものであるとウランゲル氏は云はれてゐる。そして彼等エスキモーは古く此所に居たが後にチュクチ等に追はれてアメリカの方に移つて行つたものであらうと云はれてゐる。けれども茲に一つ考へなければならぬ事は今日のチュクチの云ふオンキロンなる言葉は今でもチュクチ語及びコリヤーク語の言葉に、Anqalan と云ふも

のがある。これは直譯して見ると海岸居住民と云ふ事である。これは前にも云つたが、さうして見ると Onkilon の Anqalan とは同じ言葉であつて、かう云ふ意味から見ると、ウランゲル氏の云ふエスキモー説と云ふものは消滅して仕舞ふものである。なほ Markham 氏はエスキモーは元、アジアの北氷洋の海岸に住まつてゐたのである。是等の地方に今日遺つてゐる堅穴は彼等の遺したものである。然るに彼等は此所からアメリカの方に移住してグリーンランドの方にまで及んだと、斯う云ふ事を云はれた。これは故坪井博士がコロポツクル即ちエスキモーであると云ふ事を主張して彼等は千島よりグリーンランドに到着して、今日遺つてゐるエスキモーは其遺り者であると説いたのと非常によく似てゐる。Markham 氏の此説を主張したのは千八百八十三年である。然るにこれと同年に於いて Boas 氏は此説を駁してエスキモーは決してアジアの方面から移動したものではないと云ふ事を主張せられた。ウランゲル氏は北氷洋の海岸に存在する古代堅穴の遺跡はチュクチの祖先の遺

したものであると云つてゐる、彼等は現今皮製の天幕に住まつてゐるけれども、昔の祖先は堅穴に住つてゐたのである。それらの彼等の遺跡が、今日見る堅穴の遺跡であると云つてゐる。

ポコラス氏はベーリング海峡のチュクチ半島の海岸で海岸居住チュクチの移住者の曾て住んでゐた堅穴の跡を発見せられた、これは正しくチュクチの手に成つたものである事は明かである。而して此堅穴の型式はアジアエスキモーのそれとよく似てゐる。これを以て見てもチュクチが堅穴に住まつた事が解せられるであらう。チュクチは此堅穴を稱して *Wai-kar* と云ふ、即ち顎骨の家の義である。此穴には二つの入口の跡がある。

その(11)

衣服

コリヤークの衣服は前に記したチュクチのそれに略似てゐて皮の着物を

着てゐるのである。これには冬の衣服、夏の衣服と二つに區別する事が出来る。

馴鹿使用及び海岸居住兩コリヤークの冬の衣服は凡て筒袖であつて馴鹿の皮から作られてゐる、他の動物の皮は主として冬の衣服の裝飾の部分に用ひられるだけである。けれども皮の帽子、手袋は全く、犬、狐、狼の皮から出来てゐる。長靴の底は皮紐海豹 (*Thong seal*) 及び鯨の皮から作られる。衣服に用ひる馴鹿の皮は成長したもの、皮を用ひないで多くは若い時の皮を用ひてゐる。それは軟かなのだ、其輕いのだを尊ぶのである。これに用ひる皮は生れ始めから七ヶ月頃のもの、がよいとしてゐる。其内でも最も温かい上等の衣服は秋の末に殺された凡そ六七ヶ月目の皮を用ひる事に成つてゐる。是等の皮は小鹿であるから毛はさう長くはない、けれどもこれは今も云つた如く、輕くて比較的温いから用ひるには便利である。

コリヤークには比較的馴鹿の皮が豊富であるから、氣儘の皮を用ひる事が

出来るが、彼のユカギールやツングースなどは毛皮の不足、缺乏から止むなく老年の馴鹿の重い毛皮を冬の衣服としてゐる。

コリヤークの冬の衣服は男女とも同一の仕立である。それは太い筒袖であつて頭が這入る様に上の方が明いてゐて頭を入れて被る遣り方である。けれども男の方は襦に乗つたりする關係から裾が短かくなつてゐて、膝に達しない位である。けれども海岸居住コリヤークの方では冬の老人の旅行着は時として膝の上に達する衣服を着てゐる事がある。此冬の衣服はチュクチと殆んど同じ仕立である。唯、チュクチの方は其婦女の衣服はコリヤークの方よりも短かい。又、チュクチの方には稀に襟の背後に被り物としての頭巾が着いてゐる事があるが、コリヤークの方では婦女の上衣や男子の旅行用の上衣には殆んど凡て此頭巾が襟の所に着けられてゐる、此形ちは恰も洋服の外套の背後に頭巾が着けられてゐるのとよく似てゐる。お祭りの日などには殊更に此頭巾着きの衣服を着するが、此時は必ず此頭巾着きのものを着

なければならぬ事に成つてゐる。海岸居住コリヤークの婦女は帽子を着ない、それは彼等の常に着用してゐる衣服の襟の背後に頭巾が縫ひ着けられてゐるからである。馴鹿使用コリヤークの婦人は唯に家に在る時のみならず外出する時にでも帽子を被らない風習に成つてゐる。

婦女は股引の衣服を着用する、これは上衣と袴ハカマとが一つに縫ひ着けられてゐるものであつて頭から先に入れて両手を通し、そして自分の下肢を其下の袴に通すのである。所が、此服は上衣下衣とが一所に縫ひ着けられてゐるか同時に着用する事が出来る譯である。これは主としてコリヤークの婦女が用ひるが、尙、斯う云ふ衣服はチュクチやアジアエスキモー等にも行はれてゐる。Nelsen 氏によつて Diomede 島及び St. Lawrence 島のエスキモーの婦女に用ひられてゐると記されてゐる。昔のカムチャダールの婦人は凡て是を使用してゐた。コリヤークは此衣服を *Nai'kei* と云ふ、即ち婦女の股引附の衣服と云ひ、又子供のそれを *Kai'kei* と呼ぶ。此股引附の衣服の仕立には尙、も

一つの種類がある。それは其袴を太くして太股の上の所で縛る事に成つてゐるものである。此種の袴はトルコ式袴である。丁度日本の大口おほくちを穿いてゐる様に成つてゐる。

股引附の衣服はカムチャダールはクラセニンニコフ氏の當時に於いては室内に在る時は、これを用ひてゐたと云つてゐるし、又、チュクチの婦女もこれに關係してゐる。此股引附の袴の衣服及び頭から被る此コリヤークの衣服に就いては我がアイヌにも關係がある、北海道のアイヌの婦女が夜、寝る時に矢張頭から被る或衣服を用ひる、千島のアイヌも亦、此種のものを用ひる。これは必ず女に限られてゐる。千島アイヌ及び北海道のアイヌはこれをマオリと云ひ、千島アイヌの話す所によるに此衣服はカムチャダール・アレウト等の風習が遣入つたものだ云つてゐる。互ひに關係あるものゝ様に思はれる。尙、日本の石器時代の土偶などを見ると矢張り此頭から被る服を着てゐるものがある、よく注意すると、是を單獨に用ひてゐるものもあるが、又、よくよ

く注意して見ると尙、二つのものが、くつ着いて一所に成つたものを着てゐるものもあるかも知れない。東北地方から出る土偶は脚には非常に太い袴を穿いてゐる、是等はトルコ式袴に關係ある様に思はれる。此トルコ式袴を穿いて頭から被る衣服を着用すると非常に此コリヤークなどの風習に似てゐる。一體日本の東北地方から出る土偶の風俗の上に現はれた所から見ると、ゆつたりした上衣を着し、下にもゆつたりした大口おほくちの様なものを穿いてゐる服装はヤクト・サモエド等の風と非常によく似た風俗にも思はれる、是等は比較研究すると非常に面白い様に思はれる。それから衣服の背後に上方に頭巾の着いてゐるのも日本の石器時代によく見る風習であつて、尙、研究を要する事と思へる。

コリヤークの衣服は男女共儀式祭式の時には、その衣服の上から他の毛皮で以て裝飾を施してゐて、立派な仕立に成つてゐる。

コリヤークの男子は冬には上衣の下に毛皮の袴を穿く。これは馴鹿の毛

皮から成立つてゐるものであるが、下肢にすつくりくつ着いてゐる仕立であつて、太くは無い。下は膝より少しく下方に達してゐる。足は素足である。これは、更にこれに長靴などを穿くから、斯う成つてゐるのである。



(るよに氏ソルへヨ)衣上の女婦ターヤリコ

靴は馴鹿の脚の皮から作られてゐて、これを *Pela'kit* と云ふ。靴には短靴・長靴等があるが、祭りの折には裝飾を施してゐる。彼等は冬に成ると帽子を被る、これを

Ta'xian Pen'ken と云ふ。これは二重に出来てゐて馴鹿の皮から作られてゐる。婦女は帽子を被る事は稀である。それは衣服の背後の襟の所に頭巾が着け

られてゐるからである。けれども海岸居住の彼等は冬の日、家外に出る時には衣服の他に着いてゐる帽子を被る事に成つてゐる。

夏の衣服は一般に冬のそれから少しく相違する。晩春から早春に掛けて冬着た時の衣服は冬の着古しの古着を着する。此時期は動物の毛が多く落ちる時期である。であるが故に此時期には彼等は立派な毛皮を着ない。實に見すばらしい風をしてゐる。若しも此時に旅行者がコリヤークを見たならば彼等の生活が如何にも哀れであること云ふ事を見るだらう。けれども是は色々の理由がこれに就いてゐるのである。これは殊に山麓に馴鹿を家畜としてゐる馴鹿使用コリヤークは殊に左様である。けれ共、海岸居住コリヤークは特別に夏の衣裳を持つてゐる。馴鹿使用コリヤークは夏の衣服としては特別に變つたものはなく、そして彼等の衣服を多く見るのには秋から冬さきまでである。

夏の衣服 (*Ala'kin-sān*) は馴鹿の皮を軟かくして打ち敲き、揉んだり、或は煙で

燻べたもので作る。是は男女共に使用せられる。けれども婦女の方は男子の方より衣服が長い。そして其衣服の襟の背後には冬の衣服に於けるが如く帽子代用の被り物を着けてゐる。是を作る原料の皮は天幕の古びたものを多く用ひてゐる。

海獣の狩獵期には海岸居住コリヤークは濡り氣や寒い天氣の日には犬の皮の上衣を着する。これは一には水が掛つても耐へるからである。此合羽用の衣服には背後に頭巾を着けてゐるものは間々ある位である。此衣服は冬でも子供達は家のうちに居る時に着る。是等の夏に用ひる犬の皮の衣服は常に魚の臭ひが附いたり、又海豹の脂が染みついてゐて實に不潔である。彼等は水に耐へる他の衣服例へば海豹の皮から作つた衣服は用ひない。

此海豹の皮の防水服はエスキモーには一般に行はれるものであるが、此所には是を用ひない、其原因は、是等の皮は自身に使用する事の夥だしいと、貿易の爲めに他に出して仕舞ふので不足を來たし、さてはそれを使用する事が出

來ないのである。彼等の説話によると、昔は鳥の羽衣や海豹の腸から作られた衣服を用ひた様であるが、今では是等のものは行はれてゐない。

夏と秋には、上衣は秋に殺した馴鹿の皮から作る。婦女は専ら是を着用する。此上衣は肉桂色に染めて、そして白い皮の小片や毛の房などを裝飾とする。これに縫附け飾 (Appliqué-work) や其他の仕方で刺繡する。斯くの如き衣服は海岸居住コリヤークの婦女は冬でも用ひてゐる。舞踊の衣服 (Miliatuk) にも此類の衣服を着用するが、是が普通のそれよりも裝飾が最も立派である。男の舞踊服には襟の背後にくつつ着いてゐる帽子兼被り物はない。

僭、コリヤークの裝飾としてゐる縫ひ着け飾りの如きは、我日本の石器時代の土偶などにも認められる風である。此裝飾はツングース・ギリヤーク・トルコにも行はれてゐる、是等と比較するとコリヤークの方は原始的である。即ち其材料は皮から成り、それに亦皮を以て、此上に刺繡してゐる。此程度は我石器時代の民族が衣服の材料であつた所の鹿の皮などの原料の上に、木綿の

縫ひ着け模様をやつてゐるのを見ると云ふと、寧ろ我石器時代よりも此コリヤークの方が未だ原始的である。我日本の石器時代の衣服の如きは現今のツングース、ギリヤーク等に遺つてゐるものと、コリヤークのものとの中間にあるものと言つて宜い。思ふに最初はコリヤークの如き衣服の裝飾から、日本の石器時代の衣服の裝飾と成り、さては現今の民族の縫ひ着け模様の様に成つたのであらう。

日本の石器時代の方には既に不完全乍ら、或草の原料で粗布を織る事を知つてゐた、此粗布の小片を皮の上に縫ひ着けて飾りにしてゐたのである。

眞夏に成ると鹿の皮を打ち敲いて鞣して軟かくしたものの、皮の袴を穿く。是は冬の袴と同じく太くなくて頗る細く脚部にくつ附いてゐるものを着てゐる。けれども婦女は前にも話した如く上衣はズボンと一所にくつ着いた衣服を着る。此原料は軟かい打ち敲かれた鞣したものを用ひ、これに燻した馴鹿の皮などを用ひてゐる。又、殊に燻した魚の衣服は漁期に防水服として

使用する。男子の防水袴は稀に海豹の皮から作られてゐる。海獸狩獵の時期に成ると、海岸居住コリヤークは犬の皮の袴を穿く。秋と眞夏にも、頗る寒い時には古びた冬に用ひる馴鹿の皮の袴を穿くのである。此細い袴は日本の石器時代の土偶に、關東を中心として薄手派土器を使用したもの、うちに見える風習である。

夏の穿き物は長靴と短靴との二つである。夏は靴下は穿かぬ事に成つてゐる。其時には靴の中の底の所に草を入れる。夏の靴は若い馴鹿の脚の皮、或は馴鹿の打ち敲いて軟かくした皮、海豹の皮を軟かくしたもので、又小犬の皮から成つてゐる。靴の形状は夏冬同一の形式である。けれども夏の靴は冬のそれよりも聊か小さく出来てゐる。これは夏の方では靴下を用ひないからである。靴の底は紐海豹や鯨の皮から作られてゐる。短い靴は主として男子の中に使用して、女子は用ひない。舟に乗つて海獸を狩りする時には防水用の靴は海豹の皮から出来てゐるが、これには鯨の脂を塗り附けてゐる。

婦女の夏の靴は舞踊靴の様に打ち敲かれ軟かくした皮から作られてゐるし、これに犬の白い頸の所の皮の飾りをつけて實に立派である。

冬に於いて婦女はたまに帽子を着るが、普通は衣服の背後の襟に着いてゐる被り物を以て代用としてゐる夏の日には婦女は頭を露き出して何物をも被らないが、若し暴風などの吹いて來る時には夏の衣服の背後に着いてゐる被り物を被る。今日多くの婦女は頭巾 (Kerchief) をかぶる。これはロシア人の婦女の被り物と同じ形である。夏の男子の帽子は共に馴鹿の皮か、海豹の糝し皮で作られてゐる。殊に海豹の帽子は専ら海岸居住コリヤークに使用せられてゐる。

彼等は夏に手袋を用ひる。其手袋は打ち敲かれて軟かくした馴鹿の皮や海豹の皮から成つてゐる。海獸狩獵の時期には海岸居住コリヤークは犬の皮を手袋にする。五本の指の這入る本當の手袋は稀に用ひられる事がある。それには美しく裝飾が施されてゐる。此種の手袋は元、コリヤークにあつた

ものではなく、これは其附近に住んでゐたツングースの方から這入つて來たものである。子供の衣服は五六歳とこれより少しく以上の者の衣服とあつて、それは婦女の下衣の様な上衣と袴とが一所になつた衣服を用ひる。以上を Kei-kei 或は Malinikei (kei ^{マリン} ^{イケイ} の意) と云ふ。けれども子供のそれは婦女のとはやゝ異つてゐる。時としては其襟の所に被り物が縫ひつけられてゐるものもある。是等の子供の服は袴の所の真中まんなかに大小便をするがために、此所が開かれてゐる。これには皮の垂れ (Makka) が切口の所に着いてゐる。この垂れの内部には乾いた蘇や粉末に成つてゐる軟かい木屑が一杯に入れられてゐる。これは大小便を是に吸ひ取らせる仕方である。五六歳を経過してそれ以上の男の子の衣服は一般の大人の衣服と變りはない。

此所に一種奇妙な風習がある。それは祭の日に着用する衣服の背後に尾の様な垂れを着ける事である。これを特別に *Noihia* と云ふ。今日は此尾の様な垂れは祭日にのみ着ける事に限られて附けられてゐるが、昔は普通の日

も一般にこれがあつたのである。ステルレル氏によれば、カムチャツカの婦女の衣服には尾の飾りを着けてゐると云ふ事を記されたし、又、クラセニンニコフ氏によれば、カムチャツカの男子も尾を着けた衣服を着た事を記してゐる。コリーマのツングラ地方に於いて馴鹿使用ユカギールは脊廣服のやうな衣服を着てゐるが、其背後に尾が着いてゐると記してゐる。此衣服は元、ユカギールには無かつたものでツングラスから這入つて來たと云つてゐる。かう云ふ衣服の背後に尾を着けた風習はミツデンドルフ氏によればエニセイ河畔のツングラスもこれをしてゐると云ふ事を書いてゐる。尙、エスキモの婦女のうちにも特別な日に用ひる衣服にも前垂又は尾の様なものに着けられてゐる。Parry氏によれば、中央エスキモの Iglood の衣服の背後にも尾が着けられてゐると云つてゐる。これは男と女との間に行はれてゐるが、女の方は男の方よりも尾が小さく成つてゐる。ボアス氏によればカンバーランド海峡のエスキモの衣服にも亦短かい尾が着いてゐると云つて

ゐる。ハドソン灣のエスキモの男子の衣服にも其衣服は馴鹿の皮で作られるが、其背後に尾が附いてゐる。かくの如く衣服の背後に尾を附ける風習は、ヨヘルソン氏によれば別々に起つた偶然の土俗ではない、これは或同一起原があつて、何所からか或一つの地方からこれが起つたものであらう、けれどもこゝに面白い事はチュクチには絶対に此風習が存在しない事である。此起原はアジアの東北方民族から起原をなしたものであつて、蓋しシベリアの方面から起つた風習である。それから段々とベーリング海峡を渡つてエスキモの方に分布したのであらう。故に此衣服の背後に尾を附ける風習を稱して東北方シベリア民族の上衣の尾 (The Tail of the Coat of the Tribes of North-Eastern Siberia) と云ふ名稱を附して宜しい。此風習は面白い事には日本の古代にもこれがあつた、これは『日本紀』『古事記』のうちに見える、彼の神武の條の記事である。例へば今其例を云へば神武天皇が吉野川の河尻に到りました時に、そこに尾有る人が井のうちより出できた話がある、尙、それから山の方に

這入つた時に亦尾有る人に出會つてゐられる。此尾ある人と云ふのは、これに就いて、是迄の學者間に大變に議論がある事であつて、又、近頃の或解剖學者人類學者の人々のうちには、當時の人間に生理的に實際尾があつたものが居たのだと云ふ事を説いてゐる人もあるが、これは餘りに穿ち過ぎた、餘りに人類學上の知識の無い考である。これを土俗學上より見れば、こゝに私の記した東北方シベリアの民族等に行はれる様な尾のある衣服を着てゐたものではあるまいか。思ふに當時、皮の服に尾が着いてゐたのを着てゐたのであらう。斯う云ふ風に解せば、立派に説明が附くのである。そして、それ等の尾のある人は、吉野首^{オビト}吉野國^{イゾ}の名を持つてゐたものである。是等の土地には當時に狩獵の盛んな土地に成つてゐて、鹿とか、猪とかを狩し、其肉を喰べてゐたものであるから、従つて皮の用^{イロ}ひが盛んにあつたと思はれるのである。さうして見ると其生活状態境遇と云ふものは東北方のツングースと非常によく似てゐるのである。しかも我日本人の祖先はツングースと色々の點に於て非

常に關係あるものであつて、この尾ある衣服の風習は主としてツングースの風習と關係を持つものであるから、此一致は偶然とは思はれない。何等かの聯絡があるものゝ様に思はれるのである。聊か茲に此事を記して置く。

その(一二)

裝飾品

コリヤークの裝飾品としては頭飾・耳環・頸飾・腕飾其他衣服の飾等がある。是等の裝飾品は一般の土俗から云へば純然たる美を現はす爲に裝飾した所の裝飾品たる事は明かであるが、コリヤークの方に於いては、これは必ずしも單に美を表はすための裝飾であるとは云へない、彼等の社會に於いては是等は、多くは宗教上の條件として用ひてゐるのであつて、言葉を換へて云へば是等の裝飾品が惡魔・惡神に對しての防禦物であつて、これによつて惡魔・惡神をチャムするものである。斯くの如き事は文明人から見れば非常に不可思議

の様
に考へられるけれども人類學上未だ幼稚のステージに立つ民衆には此考を持つ事を忘れてはならない。コリヤークは此事實を示すに最も宜い例である。

コリヤークの以上のチャムせられたものは腕飾・頸飾・頭髪の裝飾・顔及び身體の入墨等が是である。是等の物はコリヤークに取つては惡魔・惡神に對する保護者 (Protectors) の意味を持つてゐる。是等のチャムせられた物品はマジックせられたものであつて、普通の裝飾品とは性質を異にしてゐるのである。又、是等を繼ぎ結んでゐる皮紐及び毛等は護符 (Amulets) として用ひられてゐる。これは腕・頸・脚等に懸けて居る。眞鍮・打ち延ばした金の腕環・耳飾は同等の價值を持つてチャムせられるものであつて、他のチャムよりも最も著しく實現せられるものと信じてゐる。

普通の裝飾品として區別されるものは婦女の頭髪に懸けてゐるもの、うち玉類・皮紐・馴鹿の毛叢・狼・兎の毛・猪の毛等がある。これらも普通の裝飾品

ではなく、チャムせられたものである。是等に對してチャムせられてゐるものである。彼等の考では頭痛すると云ふ事は地下の夜見の國からカラウが來て所持する斧で頭を打つ。そこで頭痛がする。そこで以てカラウの此難を通れるには、是等のものを頭に懸けてゐればよいのである。頭髪は鋭いナイフを以て金太郎の様な風にして、カトリックの坊様の様に頭の周圍を削り、或者は其上に溝の一條をこしらへてゐる。是等もチャムしてゐる頭髪と云つてよい。これは男子の場合であるが、女は前に記した色々の飾りを以てチャムをする。

以上に據つて見ればコリヤークの頭髪の形狀から其裝飾品に至るまで殆んどマジック的にチャムせられてゐるものである。これに就いて思ひ當るのは日本の神代の記事などに玉に就いて色々の説話が傳へられてゐるが、それらも裝飾品に對する一のチャムと云つてよい。殊に、八坂瓊勾玉の如きはコリヤークの例から見れば正しくチャムせられたものである。かく考へて

見れば上代の日本人の如きマジックが好きで、タブーの好きな、シャーマンの宗教を持つてゐる民衆は装飾品に對してもチャムされたこと考へなければならぬ。それであるから一つの上代の装飾品と雖も、これを美的としてのみ見る譯には行かない。此間にチャムの思想が行はれてゐたと云ふ事を其間に考へて置かなければならないのである。

入れ墨
コリヤークには僅か乍ら入れ墨がある、けれども此入れ墨も決して装飾の意味ではない。前にも話した如くにこれも保護 (Protective) の意味である。即ち一種の著しいチャムせられてゐるものである。ヨヘルソン氏は彼等の婦女の間に於いて僅か計りの入墨をしてゐるものを見られた。是等の人は凡て結婚してゐる者計りである。其内の二人は子供の無い者である。そこで子供を得んがために入れ墨をしてゐるのである。彼等の考へる所では子供の出来ないと云ふ事も矢張り一種の宗教的の意味に取つてゐるのであ

つてこれも悪靈魔神の仕業の如く考へ、そこでこれを防ぐのは矢張りチャムしなればならない。此チャムとしての入れ墨が行はれてゐるのである。

昔はコリヤークの婦女の間には入れ墨は廣く行はれてゐた様であるが、今は極く僅かである。此事に就いて彼等の神話・傳説は多少參考となる事を傳へてゐる。例へば大鴉が ニニ を満足させるがために自らの顔に入れ墨を施したと云ふ事を云つてゐる。是等も昔、彼等が入れ墨をしたと云ふ事のよい暗示である。

曾つてカムチャツカを旅行したステレル氏及びクラセニンニコフの兩氏に従ふと兩氏はカムチャダールの入れ墨に就いて先、注意せられたが彼等には入れ墨はない。顔面に白又は赤の色でもつて塗る風がある事を云つてゐる。此カムチャダールの顔に赤及び白を塗る風習は日本の石器時代に行はれてゐたと見えて、土偶の顔面に赤を塗つてゐる例が仲々に多い。これらに入れ墨の方ではなくて、寧ろカムチャダールの如き色料を塗る風習と見て

よいのである。

コリヤークは入れ墨を、*toke*と云ふ。これは顔塗りと云ふ意味である。さうすると、此言葉の上から云へば彼等は色料を顔に塗つた事に成る。さうすればカムチャダールの風習に非常によく似てくるのである。かう云ふ話も矢張りコリヤークの神話のうちにある。それは大鴉の長子が腹に顔料を塗つたと云ふ傳へがあるのである。

ソルドクイースト及びボコラスの兩氏はチュクチの入れ墨に就いて云はれてゐるが、それはコリヤークよりも複雑であると言つてゐる。チュクチの入れ墨については既に前に記した通りである。さてコリヤークの入れ墨は如何なる状態であるかと云ふに、其入れ墨は、鼻の上に二線又は三線の水平線を施して、尙、顎と兩頬に二線又は三線を施してゐる。コリヤークの入れ墨は、たゞ是丈である、此入れ墨の風は我日本の石器時代の土偶の上に施されてゐる入れ墨によく似てゐる。

コリヤーク及び其他の東部シベリアの民族の入れ墨は先、最初に針で突附き、其突附いた中に脂と墨とを混合したものを入れる、さうすると暫らくするうちに色が現はれて来る。ギシガのコリヤークは入れ墨の事を顔の刺繡と云ふ。

以上によつて見るとコリヤークは入れ墨もし、又、顔に色料を塗る風も共に行はれてゐた様に思はれる。或は色を塗る風が彼等の固有の風で入れ墨の風習はチュクチ或はエスキモーの方から這入つた様にも取られる。けれども兩者の行はれてゐた事は其土俗學上の事實や言語學上の證明によつて知る事が出来る。これに就いて思ひ當るのは我日本石器時代の土偶を見ると、入れ墨をしてゐるものもあれば、又、色料を塗つてゐるものもある。さうすると、日本の事實はコリヤークの土俗とよく似てゐて兩方のものが行はれてゐたと云ふ事が推知せられる。日本の石器時代土偶に此兩方のものが行はれてゐたのは最も注意を要する。